

敬して遠ざけたるなり。宰相は一身の位地の困難なるを感じ保護者の許に留まらんことを欲せしむ。Iracは即ち故郷にして家族も亦之に住へるより自から愛着の念を生じて心之に向へり。乃ち謨罕默德に向て帝國のこの地方は民衆に於て將た資力に於て視て以て寶庫となす可く之を利用して以て野蠻人を撃退す可しと説きて同地方に赴かんことを勧めたり。謨罕默德の皇子只拉兒哀丁チエラアヤンは前後二種の退却策に對して等しく反對し、蒙古兵を阻みてアム河を渡ることを得ざらしめんと欲し、支丹若し遠くIracに向ふの決心を定めしとならば軍隊の司令權を小子に委ねよ、往きて敵兵と會戦せんと要求し且語を添えて曰く『よしや武運拙くとも人民は又我等に呪咀を加へ、且彼徒は今日まで我等を苦むるに租税を以てし、難局の來るや我等を韃靼人の狂暴に委棄せりと云ふこと能はざらん』と。されどその切願は毫も功なく、支丹はその辯論を視て以て青年客氣の妄言に過ぎずとなし、吉凶は既に天命を以て定まれるものあり、不幸の來るを止むるは不可能なり、如かず星位の變じて我に便なるを待たんにはとて只管その恃む可からざるを恃めり。ホ、ヘに據る。

バルクを出發するに先ちサルタンは Termed 撒馬爾罕の中間に位せる Pendjab に一枝隊を分遣し同地に駐屯して敵兵の運動を通報せしめしに纏て蒲花羅落城の報知に接せり。間もなく又撒馬爾罕陷落のことを傳へ來りしかば支丹は最早一刻も猶豫せず Irac に向て出發せり。扈從の士卒は多く土耳其種族にして土而堪哈敦ツムカハツンの一族たる之が領袖輩は弑逆の陰謀を企てたり、謨罕默

德は之を偵知し夜中帳幕を更めしに、翌朝その常に眠れる帳幕の數限りなく矢の簇り立てるを見たり。この逆謀ありしより警戒益々嚴に急行 Nischabour に至りしが(回曆二月二日、西曆四月十八日)、蒙古兵未だアム河を渡らざる可しと信じこの地に駐營せり。然るに三週間の終に至るや蒙古兵ホラサンにありとの報あり、謨罕默德は狩獵に出づと稱して少數の供奉を隨へ直ちに Irac 門より Nischabour を出發せり(回曆三月七日、西曆五月二日)。而して間もなく全市人心恟々たるに至れり。ヘに據る。

支丹追撃の命を受けて撒馬爾罕より分遣されたる兩軍は橋梁渡舟によらずして Pendjab に於てアム河の流を渡れり。蒙古兵は樹枝を編みて之を覆ふに牛革を以てし、かくて一種の鞆を造りその兵器携帶物を之に藏めて以て身に著け緊く馬尾を握りて放たず、而して馬は泳ぎて彼岸に達せり。かくの如くにしてこの騎兵は學て河流を横斷するを得たり。ニに據る。Carpin には馬尾に緊着せる鞆となすあり。又希臘の歴史家 Nicetas Choniates は土耳其種 Paclinkes の下ナウ河を渡るや皮革を緊縛して一滴の水をも透らざらしめ之にコークを充溢してその上に坐し馬尾を握り鞆と武器とを捧持し馬を帆となし皮革を船とし容易に大江の水を横斷すと云へり。

將軍哲別チエベ、速不台スイブタイは長驅して深くホラサンの大省に進入せり、ホラサンは當時極めて隆昌にして四縣に分割されしが四縣の要地はメルヴ、ヘラット、Nischabour 并にバルクなりき。蒙古兵の近くヤバルクは進物を携帶せる使節を之に送りて降を乞ひしを以て、蒙古軍は同市に知事を置けり。Navé 市はこの前例に倣はざるのみか城門を鎖して糧食の供給を拒めり。蒙古兵は前程を

急ぎしを以て淹留して之に包圍を加ふることを爲さず將にその傍を過ぎて前進せんとせしに、住民が鐘鼓を亂打し壘壁の頂より敢て抵抗を試み爲に損害を生ずるを見るや踵を轉じて市城を攻撃し三日の末に至りて之を陥れ、その住民を悉く屠り、その携へ難きものは或は粉碎し或は焼却せり。捕虜を拷問し之をして真相を言明す可しとの宣誓を行はしめて謨罕默徳の動靜を審にしかくて Nischabour に向て馬首を向けたり。行く／＼各市に軍使を派遣して之に成吉思汗の近く大兵を擧げて來着す可きを報じ且降服を勧め之を拒絶する場合には最大不幸を蒙る可しと脅逼せり。降服の決意を爲せるものは官印 *Tanga* を帯びたる蒙古人の成將を戴くこととなれり。抵抗せるの城市若し強固ならば蒙古人は之を攻撃して劫掠を加へ若し防備の整へるを見れば之を後にして前進せり、何となればその第一の目的は支丹に追及するにあればなり。

支丹の Nischabour 發轍後同市には宰相法官教務長官假政府の事を委ねられて施政のことに當り、支丹の任命せる新知事なる宦官 Schéref-ud-din の花刺子模より來着するを待てり。この知事は途上に於て病を獲 Nischabour を距る三日程の地點に於て不歸の客となれり。然るに家從等は護衛の士卒がその資財を掠奪せんことを恐れてこの事實を秘せり。假政府委員の一人は武裝せる一隊を從へ往きて之を迎へんと稱して城市を出で之が行李を Nischabour に齎らせり。然れども Schéref-ud-din の一行千有餘人は市内に抑留さるるを欲せず、支丹の麾下に加はらん

として出發せり。翌朝この一隊は Nischabour を距る三リーグの地に於て蒙古軍前衛の追及する所となり襲殺されたり(回曆三月一九日、西曆五月二四日)、蓋しこの前衛は市城に近づくに及びその進軍の事實を偵知し直ちに之を追撃せるなり。

市城は城門を開く可しとの督促を受け支丹にして捕虜となるの時に至らば降参せんと答へたり。第一に來着せる部隊は糧食の供給を受けてその進軍を繼續せり。以後連日爾餘の部隊城側を通過し何れも給養を受けたり。最後に諾延哲別 Nischabour の城外に着し(回曆四月一日、西曆六月五日)、教務長官、法官、宰相に對して來訪せよと命令せり。乃ち三人の平民を以てこの假政府の委員なりと稱し糧食と多少の進物とを携へて之に赴かしめたり。へに據 蒙古將軍は畏兀兒文字もて記せる成吉思汗の諭告を之に交付せしがその文に曰く『守將貴族并に平民よ、知れ上帝が朕に東西兩洋全地球の帝國を與へ給へるを。降服するものは之を助命せん、抵抗するものには災禍立るに至りその妻子從僕を擧げて悉く屠らる可し』と。之と同時に若し城市の全滅を免かれんと欲せば、將來來着す可き蒙古軍に悉く糧食を給し決して水火の反對を試む可からず、又城壁の堅牢と戍兵の兵力とを恃む可からずとの旨を諭達せり。チに據

蒙古兵の兩軍には回教徒并に邪教徒たる多數の軍人は勿論無賴の徒も亦掠奪を行ひその他あらゆる悪行に出づるも處罰を受けざる可きを思ひて之と共に次第に旗下に集まるあり、疾風迅雷、

謨罕默德を追跡し沿道を掠め馬匹家畜を奪へり。Khabouschan, Thouss, Esféraïn, Damégan Simman は Irac Adjém 省に入らんとし Connouss を横斷せる速不台に却掠せられたり。波斯のこの省は砂漠によりてホラサン Fars Kerman 三省の地と隔てられ、幾多の嵩高なる山脈之を横斷し其最高峯は千古の雪を戴けり、亞刺比亞人は即ちこの地方の地形に基きて之に Djibal 即ち山國と云へる稱呼を與へたり。將軍哲別は途を Mazendéran 省に取りて Rayi 城外に至りて速不台の軍と連絡を通じ同市を襲ひて之を却掠せり。野蠻人は男子を殺し婦人兒童を

俘囚となして陣後に従へ前代未聞の殘忍を極めたり。ニに據る。ラには是より先 Rayi に激烈なる宗派の軋寺院を燒却せしを以て、後者は痛くこれを怒り將軍哲別に歎を通じ城市陥落の後これを説きて Hanife 派の信徒を虐殺せしめしが哲別は次で同宗教の信徒を賣るが如きものは待むを得ずとて Schafiyi 派の信徒をも亦屠れりとあり。

謨罕默德は Nischabour を棄てて出奔し皇子屋肯哀丁が Cazvin の城壁内に Irac の軍隊三萬人強を糾合せるを聞きて其陣營に赴き、防禦の良法に就きてこの軍隊の將校に諮問し且つ思慮の勝れるを以て有名なる Lour 地方の諸侯 Hézar-Asb Hézar-Asb の父 Abou Taber はクルド種の出身にして初めその君長たる Fars 侯の命を受けて Louristan を襲ひて之を略し次で君長に背きて自立して同地の王となれり。Hézar-Asb は一六〇〇年にその位を嗣ぎ Schoules と呼べる遊牧民族を Fars に驅りハリフ、那昔爾より Aabey の稱號を得一二九九年に死す (Tankh Gouzide 參看)。をして入觀せしめたり。史に傳ふこの小君侯の來着して大森に近かんとするや七度虚脱して仆れ支丹乃ち之に着席を許可したりと。Hézar-Asb のその宿舎に就きしとき謨罕默德は宰相 Amad-ul-Mulk と上將軍二人とをその許に遣はしこの國家危急の時に際して如何なる方略を取る可き

やを協議せしめたり。Lour 侯の意見は謨罕默德は須らく一刻をも猶豫せず Lour と Fars との境界に當れる山脈の背後に退却す可し、同地方は物資の給養豊富にして容易に Lour 人 Schoule 人 Fars 人并に Schébankaré 人 Schoule 人 Schébankaré 人は共にクルド種の遊牧民族にして彼は Khouistan 北境の山間には Fars 北方の山地に住す を以て組織せる十萬の歩兵隊を徵募するを得可く、これを以て前記山脈の咽喉を扼する時は以て韃靼兵の進入を阻止するに足らんと云ふにありき。而して一度勝利を博せんか乃ち兵士の勇氣を回復し、その野蠻人に對する恐怖の念は又跡を留めざる可しと附言せり。然るに支丹は Lour がこの獻策を爲せるは謨罕默德を我が領土に誘ひて以て隣國 Fars の Atabey を掣肘せんが爲なりと邪推し、幸に危険の遙に大なる強敵を撃退するを得るに至らば、Atabey 征服の事業に着手せんと云ひてこの方略に従ふを欲せざりき。

謨罕默德が Irac に淹留し同地にありて兵力の増大を圖らんとすの決心を發表するや偶々 Rayi 劫掠の飛報は來れり。この凶報の外間に傳はるや君王の左右に群集せる王侯貴族は各々先を争て出奔し軍隊は支離滅裂又收拾す可からず、蒙古兵の與へたる恐怖狼狽は實に至大なりき。支丹は皇子と共に出でて Caroun の城寨に避難せんとせり、途上敵兵追及し來り支丹と知らずして之に向て矢を放てり。爲にその乗馬は數箇所の負傷を受けしも而も能く支丹を乗せて Caroun に入れり。謨罕默德はこの城寨に止まること僅に一日、數頭の駿馬を獲てバグダード街道に由りて

疾驅せり。その城寨より出奔するや間もなく蒙古兵は支丹を生擒し得可しと信じて之に逼りて攻撃を加へしが、激戦ののち支丹既に城内にあらずと聞き直ちに之が追撃を爲し、途上その暇を與へたる嚮導を捕へて支丹のバグダードに向て走れるを知れり。然るに支丹は既にその方向を變更せしを以て蒙古兵は之が踪跡を失ひ嚮導を殺して歸路に就けり。

謨罕默徳は *Cazvin* を西北に距る數十リーグにして高山の頂に位せる *Serdjihan* の堅城イラ

デン文庫藏 *Safi-ud-din Abd-oul-Moumin* 撰 *Merassi-d-ir-itilla ala esmar il-eminet ve-el-becca* 即ち地名書亞利比亞文寫本參看 *Serdjihan* とは波斯語にて世界の頭部の義なり

に向て避難せり。同地に

滞留すること僅に七日にして、次で *Guilan* に赴き更に *Mazenderan* に向ひしがその同省に

着するや殆んど單身にして又一物をも携へざりき。

蒙古兵は既に同省に進入し首府 *Amol* 并に商業地 *Aster-Abad* を劫掠せり。謨罕默徳は來りて朝貢せる *Mazenderan* の諸侯 *emirs* に諮ふに蒙古兵の追撃急にして一瞬の休息をも與へず、何れの堅城に據らば之に對する避難の地を得可きやを以てせり。諸侯は乃ち暫く *Mazenderan* の海岸に近き裏海中の一小島に退却せんことを愆愆せり。謨罕默徳はこの獻策に従はんと欲せり。^{ハに據}かくて數日間海岸の一村落到に滞在せり。傳記家 *Nessa* の謨罕默徳は曰く『支丹の同地にあるや宗規に従ひて回教寺院に詣で五回の祈禱 *namazs* を行ひ同寺院の式僧をして *Cour'an* を讀誦せしめ、涙を濺ぎて上帝に對して若し政權を回復するの日あらば帝國內に正義を行はれし

む可しと誓約せり』と。この村落にありてしかくその日を過せるうち蒙古兵の一隊は來着せり。

この野蠻人のうちに *Mazenderan* 省内の小國 *Kébound-djame* 侯 *Rokn-ud-din* と云へるものありて同行せり、初め謨罕默徳その伯父并に従兄の領土を奪ひ且之を死刑に處するの命令を與へしを以て怨恨骨髓に徹して遂に敵軍に投じその一族の所領を克復せるなり。謨罕默徳は辛じて輕舟に駕し以て海上に出づるを得たり。陸上の兵は之に向て矢を放ち若干の敵騎は只管之を捕獲せんと欲するの餘り馬を躍らして水中に入り波浪を破て進みしが何れも溺死せり。

謨罕默徳は肋膜炎に侵され臨終の遠からざるを知りしを以て乗船の海岸を遠かるや嘆息して曰く、幾多の邦土に君臨せしが今や墳墓の地となすに足る可き數尺の領土だに存するなしと。一小島に上陸して甚くその安全の地に到着せるを喜び帳幕の内に住居を定めたり。 *Mazenderan* 海岸の民は糧食その他以て支丹を慰藉し得可しと信ぜる種々の物品を獻納せり。支丹は之に報いるが爲官職食邑授與の辭令書を之に交付せり、但し謨罕默徳はその供奉員の多數を皇子の許に勅使として派遣せしかば、辭令書を交付さるるもの親ら之を調製すること少からざりき。數年の後只拉兒哀丁が父の故國の一部を回復するや乃ちこの辭令書を提示せしに皆榮譽に與れり。而して支丹謨罕默徳が恩賜の證として之に與へたる短劍若しくは手巾を齎らせるものは、その約束の履行を得たり。

謨罕默德はその災禍の日々に激甚に赴くを感じ書を皇子只拉兒哀丁、鄂斯拉克沙并に阿克沙
 Ac-schah に與へて來りて左右に侍せしめ、鄂斯拉克沙を皇太子に選定したる前年の詔勅を取消
 して唯只拉兒哀丁のみこそ帝國を拯ひ得可れとの旨を勅し、親ら佩劍を取りて腰に著けしめ、
 幼弟をして之に對して忠誠を誓はしめ終始之が命令を遵奉せんことを諭告せり。かくて兩三日の
 後遂にその最後の呼吸を終りて島内に埋葬せられたり。史家はこの島を Abisgoun と名け又或は Abisgoun
 海、即ち裏海上の島と呼べり。Abisgoun は Mazen-
 beran 省 Djourjan 市の船舶寄泊地たる沿海の一村なり。(Ebn Houtcal 地理書參看) Abisgoun を距る數リーグの
 海上に三個の小島あり、支丹の避難せるはその一なり波斯人は裏海に Taberistan 海 Khazares 海等の稱呼を與ふ。但し
 壽衣をも得る能はず、襯衣を以て屍體を包めりと云ふ。ホに據る。バグダード遠征までは謨罕默德の
 企圖一として成功せざるはなく、その野心を満足するが爲に幾多の小君侯を犠牲に供して以てそ
 の領域を膨大ならしめしにその最後の悲惨なりしこと實にかくの如し。

史家の謨罕默德を評するやその所言柄整相容れざるものあり。Djouvein の Alai-ud-din と
 Hémédan の Raschid とは共に成吉思汗の後裔に仕へて宰相の職に墜り、何れもその花刺子模
 帝國入寇の記事を詳細に後世に傳へしが、その記述に従へば謨罕默德はこの國家危急の時に際し
 優柔不斷、恐怖の念に制せられ、占星家に不吉なる信用を措きて方略麻痺、その出づる處を知ら
 ず、輕率にも心裡に潜める狼狽の色を面に表はし怯懦なる振舞によりて軍人々民の意氣を沮喪せ
 しめ、敵兵の追撃を避けて一時の苟安を貪らんことをのみこれ圖れり。兩史家の言にして信ず可

くんば謨罕默德は Irac に避難するに先ち Nischabour に淹留せる三週日の間唯快樂に耽れる
 のみ、二六時中を歌舞饗宴の間に徒消し左右に侍するの徒は唯歡樂を助くるの徒のみ、地方官は
 諸般の政務を怠りて只管幫間歌妓を推薦するに汲々たりきと云ふ。されど當代の作家 Ibn-
 El-ir の描寫する處に據ればその性格遙に見る可きものあり。曰く『謨罕默德は極めて博識の君
 にして殊に法律の學に精通せり。その好む所は學者、明法博士、僧侶等との交際にして盛んに之
 に恩賜する處ありき。堅忍にして倦怠の何物たるを解せず、毫も豪華快樂を思はず獨り靜座して
 國務に盡瘁し帝國の政治と人民の幸福とに就て焦慮せるのみ』と。史家 Zehébi は之を評して
 活潑勤勉大膽なりしも唯野心に驅られて非道殘忍に陥りしことありと云へり。ナ參 照。そは兎に角蒙
 古兵入寇に際して謨罕默德の行動怯懦に流れしことは何人も之を辯護する能はざる可し。

アム河の防禦線を棄てて退却するに先ち、謨罕默德は急使を花刺子模に馳せて母后に向て供奉
 を擧て Mazenderan に避難せんことを懇懇せり。ホに據る。土而堪哈敦は時に恰も成吉思汗の許よ
 り陷擄的提議を接手せり。成吉思汗は謨罕默德が母后と相容れざるを知りこの軋轢に乗じて爲す
 所あらんとし侍從丹尼世們^{ニシヤド}を遣はして、母后に對する謨罕默德忘恩の擧措は曾て耳にせしところ
 にして目下交戦に際して支丹部下將軍の一派は欸を通じて我軍を助く、而して朕は土而堪哈敦の
 君臨せる地方即ち花刺子模を侵略するの意圖なし、腹心の臣下を朕の許に致さば口づからこの文

書の主意を正式に保證せんとの旨を母后に告げしめ、且その征服事業を完うせるの曉は母后にホラサンの領有權を與ふ可しとの約束を爲せり。されど支丹母后はこの使節に對して回答を與へず、支丹より退却す可しとの警戒に接するや謨罕默德の妃妾皇子を伴ひその財寶のうち携帶し得可き限は之を一括して花刺子模を去り、且出發に先ちて蠻行を演じたり。即ち蒙古兵は戰利品を鹵獲し了らば必ず帝國より撤退するならんと想像せしを以て、豫め戒慎を加へ殘忍にも諸王侯の謨罕默德にその領土を奪略せられたる後、花刺子模の監獄に呻吟せるものを殺さしめたり。Iracのセルジウク朝最後の支丹托古洛耳の二子、Balkh侯父子 Termedの領主 Bamian侯 Vakhsh侯 Signac 領主の二子、郭耳の最後の君主馬赫模特の二子并に爾餘の多數の王侯は悉くアム河に投ぜられ、この慘憺たる最後を脱ぬかれ得たるは獨り Yazer 侯の子 Omar-khan のその故郷に達するの道途を熟知せるより、以て出奔に際して嚮導たらしめ得可きあるのみ。實に Omar-khan は熱心この任務を盡せしが而もその Yazer 附近に至るや母后の命あり、その身首は遂に處を異にせり。ホ、ハに據る。

土而堪哈敦は途を Dinistan に取りて Mazendéran 省に到れり。謨罕默德の來りて同省に避難するや、母后并に王族に向て同省内山脈中の冠たる一峻嶺に位せる堅城 Hai の城内に立て籠らんことを勧めたり。將軍速不台は進んで謨罕默德を追撃するに當りて、一隊の兵士をこの城塞

の下に逼らしめたり。Hai 地方の天は數々雲霧の濛々たることあるが故に、何人も亦乾燥の場合に備ふるが爲に貯水池を設くるの必要を思はざりき。然るにこの城塞の包圍を受けしとき偶々稀有の現象を呈し久しく降雨に遭はざりき。包圍數箇月の終に至り飲料水缺乏の極成兵は已むなく降參せしが、蒙古兵が Hai を占領せしその日蒼天は忽ちに密雲を以て覆はれたり。土而堪哈敦は謨罕默德の妃妾皇子と共に當時 Talecan の包圍に従事せる蒙古君王の本營に導かれたり。土而堪哈敦は俘囚として拘禁され皇子は未だ弱冲なりしも殺害に遭へり、支丹の皇女二人は之を親王察合台チンガイに下賜せしかば、察合台はその一人を後宮に納れ他の一人は之を回教徒なる家令 Habesch-Amid に與へたり、第三の皇女は成吉思汗の侍從丹尼世ニシヤに嫁げり。撒馬爾罕の君侯鄂斯滿オスマンの寡婦公主 Khan-sultane は Imil 市に定住せる一染物師に捕へられてその妻となれり。土而堪哈敦は成吉思汗と共にタルタリーに伴はれ、一二三三年に和林 Caracorum に於て長逝せり。宰相 Nassir-ud-din は母后と同時に捕虜となりしが Talecan に到着せるとき死刑に行はれり。ハ、ホに據る。但しホには此處 Khan-sultane を下賜せられ之を納れて數子を擧ぐとあり。

Hai の落城且夕に逼れるとき、土而堪哈敦に仕へし闈官の一人は身を完うして圍を破り只拉兒哀丁が當時大軍を擁せりとの報を得しを以て、往きて之に倚らんことを進言せしも、却て俘囚の憂目を見ることを欲すと之に答へたり。その我が孫なるこの皇子を憎めること實にかくの如く甚

しきものありき。

謨罕默徳の寶玉も亦等しく戰勝蒙古帝の掌裡に歸したり。退きて Irac に出奔せんとして Bistam 市を過りし時、支丹は麾下將校の一人に寶石類を藏めたる小箱十個を託し命じて之を Irac dehan 城の守將に交付せしめたり、城は Ravi の北に當りて Irac Mazenderan 兩省の境界を劃せる山脈のうちに位しその峻嶺の頂にあるより難攻不拔の評ありき。蒙古兵はこの城下に逼り守將若しこの寶玉を交付せば特に助命せんと約して之を納め以てその君王の許に致せり。ホに據る。

蒙古 謨罕默徳の死後三皇子は海路 Balkhan 灣内の Manrichlak に赴むき更に花刺子模に至りて至大の歓迎を受けたり。支丹母后の出奔するや倉皇留守の官吏をも任命せず爾來この帝都は無政府の状態に陥れり。忽ちにして幼年皇子の左右に集まるもの七萬人に達せり、この軍隊は土耳其種康里人を以て組織されしを以てその領袖輩は皇子鄂斯拉克が位を兄只拉兒哀丁に譲れるを懼ばず、その幼冲なるは以て諸將の野心を達するに於て便宜ありと雖も、只拉兒哀丁の剛毅果敢なる默従の境涯に甘んぜざる可からざるの恐れあり、かるが故に諸將は即ち新支丹に對して弑逆の陰謀を企てたり。只拉兒哀丁はこれを偵知し即刻出奔して僅にその危難を免ぬかるを得たり(回曆七年二月一五日西曆一三二二年二月一〇日)。曩に忽斃ホサエドを守り不思議にも蒙古兵の劍鎧を避けてその生命を全うせる老將帖木兒蔑里克時に花刺子模にあり、只拉兒哀丁はその指揮せる三百騎を従へてホラサン街道を取

り花刺子模とホラサンとの間に介在せる十六日程の沙漠を疾驅して横斷し、かくて Nessa 地方に到着せり。ホ、ハに據る。

成吉思汗は撒馬爾罕を略取せる後同市と Nakscheb との中間に位せる地方にその軍隊を駐營せしめ、一二二〇年の春夏の交は同地に淹留せしが、秋季の近くに及び騎兵の休養終り乃ちその作戰を繼續せり。謨罕默徳の皇子の花刺子模に着しその城内に再び大軍の集合せしことは先づ注意を促し、この首府に向けて尤赤、察合台、窩闊台の指揮せる一軍を分遣せり。花刺子模より脱走することある可き軍隊退却の路を斷たんが爲め又之と同時にホラサン駐屯の軍隊に令して沙漠の南端に哨兵線を張らしめたり、この哨兵の一部を構成せる騎兵七百の一隊は只拉兒哀丁來着のとき既に Nessa 附近にありて警戒せり。この親王は猛然之に向て襲撃を加へ、戰鬪久しきに互れる後首尾克く之を潰走せしめて Nischabour に赴けり。Nessa の謨罕默徳曰くこれ回教徒が蒙古兵に對して博せる最初の戰勝なりと。只拉兒哀丁の兩弟はしかく幸福なるを得ざりき、その兄出奔の後三日にして蒙古軍花刺子模を指して進むとの飛報に接し、同じくホラサンに退軍するの決心を定めてその退軍の路を辿りしが、Nessa の附近に位して彼の只拉兒哀丁傳記の作者なる謨罕默徳の所有に歸せし Kharender 城に達するや、蒙古軍の一隊はここに現はれたり。この蒙古兵の任務は只拉兒哀丁の經由せる道路を偵察し、皇子の後を追ふて沙漠を經過し來らんとす

る花刺子模軍をその途上に要せんとするにありて、鄂斯拉克并に阿克の到着は素よりその知らざる所なりき。Nessa の謨罕默徳の姪は Kharender 城を出でて敵兵と戦ひ之を支へて以て年少皇子に脱走の機會を與へんとせしが、蒙古兵は逃走せる人物の何人たるやを偵知し直ちに之を追撃せり。かくて Vescht と云へる村落に於て追及せしかば、兩皇子は駐軍の令を下して戦列を布き交戦の結果蒙古兵を敗北せしむるを得たり。戦勝者は最早安全なりと信じしに同一地點に於て他の敵兵の攻撃を受けこの新戦鬪に於て兩皇子は共に戦死せり。皇子の首は槍頭に貫かれたるままにて省内隈なく曝されたり。

蒙

古

史

Vescht 附近の農民は蒙古兵の寶石類を顧みざるより戦死せる花刺子模兵の屍體を搜索して夥しく之を拾集し廉價に之を賣却せり。ホに據る。

この間蒙古軍は花刺子模の首府にして通常この省名と同一の稱呼もて知らるる烏爾韃赤 Ke-urcandje 亞利比亞人は Djendjanye と説き蒙古人は Orandje と稱す に向て前進せり。アム河は Amou 市の稍下流にて花刺子模省に入り流れて鹹水湖なるアラル海に注げるが、この大都はアム河の兩岸に跨れり。この河流の兩岸にありて能く農耕に適するの地は唯花刺子模省内のみにして同地方は到る處町村點在せり。この狹隘なる地帯の上流に於てはアム河の兩岸唯砂礫の曠野を見るのみ。Ebn-Haoucal 地理書并 Mounin 地名 三皇子の出奔後は烏爾韃赤には之を統御するの君長あるなく、土耳其種の將軍庫馬

辭書參照

地名

三皇子の出奔後は烏爾韃赤には之を統御するの君長あるなく、土耳其種の將軍庫馬

爾 Khoumar と云ふもの支丹母后の姻戚ヲには兄弟なりとあり なりとの理由を以て主將に推選されたり。包圍攻撃の未だ開始されざるに花刺子模兵は大敗北を招けり。蒙古兵の一隊進んで都門に逼り將に家畜を掠め去らんとするや、歩騎兵より成れる大部隊は開城突撃して敵兵を追躡し爲にその伏兵に遭ひて多數の戦死者を出せり。加之蒙古兵は敗兵を追撃して共に花刺子模に入れり、但し餘りに少數なりしを以て勿論城内に止まるの力なかりき。諸皇子が大部隊を引率して來着するや都城に向て降服を促し之に對して何等の災禍をも蒙らすことなかる可きを約せり。尤赤の送りたる書には父より食封として花刺子模を得たれば之が首府を完全に保存せんことを欲するの情切なり、故にその滅却を企つるものあらば之を叱責せんと云ひ、而して兵士の強奪を行ふを禁じて地方の爲にするの意志を示したりき。思慮ある人士は須らく降服せざる可からずてふ意見を抱けり。殊に故支丹が Abisgoun 島より花刺子模の住民に與へたる勅書には『卿等は朕の祖先の優遇を受けたるが如く又朕よりも之を受く可きの權利あり、故に朕は一の勸告を與へて以て朕の情愛深きを示さざる可からず、勝ちほこりたる多數の敵兵より脅嚇されたる時卿等の取る可き最上の措置は降服するにあり』と見えて之が勢力を添へしも而も反對の意見は遂に勝を制せり。

蒙古兵は先づ都城を去る少距離の地點に退却して包圍攻撃の準備に着手し、戦鬪の材料を調製せり。この地方には石塊の以て彈丸の用を爲すに足る可きものあるなく、乃ち夥しき桑樹を伐採

しその材木を以て彈丸の用に供せんとし、石弩を以て之を發射するに先ちその重量を大ならしむるが爲に暫く之を水中に浸せり。蒙古兵は這般の準備的作業を行ふに當り、その慣例に従ひ絶えず更る更る約束と脅嚇とを用ゐて以て士氣を鼓舞せんことを努めたり。占領各省より多數隊伍を爲して來れる新徵募員は斬壕填充のことを掌らしめ十日間にしてその作業を完成せり。次に包圍軍は都城の兩區域を連絡せるアム河上の橋梁を制扼せんと欲し、三千の蒙古兵命を受けてこの攻撃に向ひ悉く戦死せり。この戦勝は著しく花刺子模兵の勇氣を増せり。而も主として都城の陥落を遷延せしめたるものは尤赤、察合台兩親王の不和軋轢即ちこれなり、これが爲に包圍の作戰は萎縮し軍紀壞頽せるを以て、花刺子模兵はこの事情に乗じて數、損害を敵兵に與へたり。包圍既に六箇月に互れる時、兩親王の派遣せる一將校は時に Talcán 要塞攻撃の途にありし蒙古君主の許に來りて、皇子が花刺子模城下にありてその軍隊の大部分を失ひ之を略取するの希望を抛てることを報告せり。成吉思汗はこの計畫の成功を阻碍せる主要なる故障の何物たるやを知りて長子次子の所爲を怒り、第三子窩闊台を以て包圍軍の司令長官に任じたり。この親王は深切を以て巧みに兩兄を調和し、嚴格を以て軍隊に於ける規律を回復したり。蓋し從來その向ふ所敵なかりしは全くこの規律ありしが爲なり。かくて總攻撃の命を下し以て都城の運命を定めたり、蒙古兵は軍旗を城壁の上に樹てて城内に入り、手に石油を納めたる壺を携へその遭遇せる第一の家屋に

火を放てり。大勢既に定まれるにも拘はず花刺子模兵は最も頑強に勇氣を振て防禦を繼續し通路毎に之を争へり、即ち一の街衢より撃退さるれば次の街衢に退却し、婦人小兒も亦この激戦に參與し九日間抵抗を試みたる後、遂に多數の花刺子模市民は三方面に壓逼されて降を乞ふに至れり、警視總監諸親王の許に派遣せられて使命を宣べて曰く『我等は卿等の苛刻なる待遇を受けたり、嗚呼親王等よ、今や我等が卿等仁慈の徳に浴す可き時は來れり』と。尤赤怒て叫で曰く『抵抗を試みて以て我等の軍隊の一部を剿滅し而して我等の苛刻なる待遇を受けたりと云ふは抑も如何。今日まで我等こそ彼徒の苛刻なる待遇を受けたれ、今や彼徒に同一の待遇を施さん』と。市民悉く城外に出づ可しとの令を下し、工藝技術を善くするの徒は別に一團を爲す可しと命ぜり。この命を奉じたるものはその生命を全うしてタルタリーに送られしも、この流寓を恐れ且住民の生命救はる可しと信じて敢て群集の團體を離れざりし多數の工匠は衆人と共にその運命を等うし、蒙古兵諸隊の間に配付され或は劍を以て或は斧ベシキを以て或は矢を以て虐殺せられたり。蒙古兵一人につき二十四人を殺し而して兵士の數總計五萬人なりこれを免ぬかれしは唯青年男女の奴隸として虐待されしと云ふ。チには蒙古に送られし工匠十萬とあり。蒙古兵一人しものあるのみ。この虐殺のち蒙古兵は都市に残留せるものを却掠しその荒廢を完うするが爲、アム河の河水を堰塞せる堤防を斷ちて之に氾濫せしめ、その家屋は滅却せられ市内に藏匿されたるものは悉く失はれたり。史家 Ebn-ul-Ethir 曰く『爾餘城市の却掠さるるや、その住民は或

は潜伏し或は遁走し或は死屍の間に臥して以てその命を全うせしも、花刺子模に於ては韃靼の劍鋒を免ぬかれたるものはアム河の河水に於て溺死せり」と。

諸親王は始め花刺子模の市民に Nedjem-ud-din と呼べる有徳の部族長あるを聞き、包圍攻撃に先ち今や將に市城は戰鬪の慘劇を演出す可きを以て我が陣に來りて避難さる可しとの旨を傳へしめたり。然るにこの部族長は吾れ花刺子模人のうちにおいて平和に生活を營むこと七十五年、今やその將に死地に陥らんとするを見るに及びて之を棄つる能はずと答へ、同胞と共に戰死せり。

ホ、ヘ、チ
ニに據る。

成吉思汗は夏季を通じて Nakhschub の大草原に駐營し、軍隊の馬匹が長途行軍の疲勞より回復せるを俟ち、新に戰役を開始して Termed の包圍攻撃に着手せり。この城市はアム河の北岸に位せるが、勸降書を拒絶してその城門を開かずその壘壁内堡を毀たざりしが爲、十日間の攻撃を受け、住民は悉く出城を命ぜられ蒙古兵諸隊の間に分配されて虐殺されたり。一老婦あり將に最後の打撃を受けんとせる時、助命せば美なる眞珠を與へんと叫べり、故に之を求めしに既に嚙下せりと答へたり。茲に於て直ちにその腹を剖きて首尾克く一顆の眞珠を探り出すを得たり。成吉思汗は他にも亦等しく嚙下せるものあらんとの推定より死者の腹部を剖く可しとの命令を下せり。

この征服者は Sëman 地方に冬季の本營を定めその東方に隣せる邦土を劫掠し、バダク山、刺亞 比亞文地理書 Merasid ul-ittila 下曰く巴達克山は俗に Balkhschan と稱す。この地方の山脈より寶石類殊に紅寶石を産するを以て紅寶石を Balkhschan 轉じて balais と稱す。これ波斯の使節が西藏に赴くの途上に當ると。 國は侵略に遭ひて服従せられたり。之と同時に親王拖雷の指揮せる一軍はホラサンに向て進みこの肥沃なる大省を蹂躪せんとせり。再び春季に入るやアム河々北の都市は或は滅却せられ或は降伏し盡せるを以て成吉思汗はこの江河を徒涉せり。バルク市の代表者は來り迎へて忠誠を表し且高價なる貢物を齎らせり。この有名なる大都の投降は以てその全滅を防ぐ能はず、これが滅却は既に決定して動かす可からざりき。成吉思汗は只拉兒哀丁チヤウラニヤンが兵を擁して哥疾寧地方にあるの報に接し前進せるとき、陣後に人口の夥しき城市の存するを好まず、バルク城民の人口を調査せんと稱して悉くこれを出城せしめ以て虐殺し盡せり。蒙古兵は都城を掠奪し之を化して灰燼となしその城塞を破毀せり。

成吉思汗は次に Talécan 山間地方の城塞 Nousret-couh 戰勝の山の義なり。 に逼れり、この城塞の

守將等はその地形とその堡壘とその成兵の勇敢なることによりて防禦の便を得、抵抗すること六箇月に及べり。ヘ、チに 成吉思汗は乃ち多數の捕虜を齎らし之をして第一線にありて戰はしめ、その背進するものは立るに之を殺戮せり。蒙古兵は材木の足代の上に土砂を運びて丘陵を築き、之を壘壁と水平の點に高め石弩を裝置して以て城内を亂射せり。守兵は百計盡くるに至り全軍開城

突撃を試み包圍軍の陣列を破りて遁れんとせり。騎兵は山脈のうちに投じてその命を全うせしも歩兵は鏖殺せられたり。かくて蒙古兵はこの七箇月間抵抗せる城塞内に入り、又一人の生物をも遺さず且城壁を滅却し了れり。ニに據る。

野蠻人がその略取し得たる城塞の滅却に従事するとき、拖雷は波斯に於ける最も殷富なる一省を全然荒廢に歸せしめし後來りて父の軍に合せり。是より先ホラサンの一部は既に支丹謨罕默德追撃の命を受けて派遣されたる哲別并に速不台の兩軍によりて蹂躪され、而してこの兩將は征服せる各地に守將を駐在せしめたり。然るにその一度通過せる後蒙古兵再び來らず且支丹 Irac に於て戦勝を博したりてふ風説傳はりしを以て、これまで恐怖によりて萎縮せる人心は忽ちにして活氣を添へたり。Thouss 義勇軍の首領は鎮將の資格を以て同地に駐屯せる蒙古の官吏を殺してその首を Nischabour に送りしが、曠てこの輕卒の行爲に對して處罰を受けたり。即ち Irac に向て出發せる兩軍の馬匹家畜を護るが爲に三百人に、將として Oustoria 郡に駐屯せる蒙古の一將校は Thouss に向て進軍し、同地に據れる軍隊の大部分を屠殺し同市の堡壘滅却に従事し以てホラサン征服の任務を帯びたる軍隊の來着を待てり。

一二二〇年の秋拖雷が同省に進軍す可しとの命令に接するや先づ前衛たらしむるが爲に成吉思汗の女婿諾延脱忽察兒 Togatchar 指揮の下に一萬人の一隊を派遣せり。この將軍は Nessa 街

道を取りて進みしにその指揮せる部隊の分遣隊は同市に近くに及び矢を以て迎へられ隊長 Belgousch 之に仆れたり。蒙古兵はこの勇士の戦死に報いるが爲來りて Nessa に圍を置けり。トに據る。

ホラサン省を棄てて Irac 省に向て出奔するに當り謨罕默德は麾下將校の一人を Nessa に遣はして住民に諭さしめて曰く、今や進軍し來れる敵兵の戰鬪を爲すやその方法他の民族と同じかからざるものあり、思ふに韃靼兵は戦利品に飽饜し了らば帝國より撤退す可きが故に、この際取る可き最上の策は城市を去て砂漠若しくは山脈に避難するにあり、故に住民は出奔して以てその生命を全うすることを努めざる可からず、少くも之が防備の爲に再び城塞を起すことを要せずと。

この城塞は支丹塔喀施が Nessa を略取せるとき、その命令を以て毀たれ之が遺址は化して耕作地となれり。然るに住民は寧ろ之を再築せんと欲し直ちに作業に着手せり。

脱忽察兒の部隊は既にして Nessa の城下に着し城壁に對して砲臺一座を築き、捕虜并に新徵募隊をして二十門の弩砲を以て攻撃を行はしめたり。這般の不幸なる士卒は又破城槌運搬の任務に當り、その背進せるものは直ちに虐殺されたり。十五日間撓まず攻撃を加へたる後弩砲の力能く一大破口を爲り蒙古兵は夜に乗じて城壁を占領するを得たり。天明に及びて更に城内に進入し市民を驅て出城せしめたり。市民の原野に集合せしとき蒙古兵は之に命じて各々雙手を背後に廻

し互に相連繫せしめたり。Nessa の謨罕默德は曰く『這般不幸の民は夢我夢中唯命令にのみ服従せり、若し離散して附近の山脈中に避難せしならんにはその多數は生命を完うするを得しならん。その悉く束縛さるるや、蒙古兵は之を圍み男女老幼の別なく之を射殺せり。Nessa の市民と同市に避難せる郡村の民とを併せ死者の數七萬人に達せり』と。

史 古 蒙
Nessa 掠奪の後三日蒙古兵の一枝隊は進んでこの謨罕默德の所有に屬せる Kharender 城を圍めり。この傳記家は語りて曰く『余は嶮山の頂に位しホラサン堅城の一に數へらるる余の城塞にありしが、若し口碑にして信ず可くんばこの城塞は回教の東方諸國に輸入されし以來余が祖先の所有に屬し而して省の中心にあるを以て捕虜の脱走せるもの人民の禁錮若くは死刑を避けて出奔せるもの等のために避難地の用に供せられたり。既にして韃靼兵は之を陥るることの難きを見るや、曩に Nessa に於て夥しき戦利品を獲たるにも拘はらずなほ飽き足らざりしか退却の報酬として棉衣一萬襲并に多額の爾餘物品を要求せり。余は之を承諾せしがこの物品を敵陣に送らんとするに當り蒙古兵は何人をも助命せずとのこと一般に知れ渡りしかば之が使命を果さんとするものなかりき。最後に二人の老人あり敢て身を以て犠牲に供しその子女を余の許に賣らし後事を託して出發せしが果して韃靼兵はその營を撤するに先ちてこの兩翁を殺せり』と。

この文豪は更に曰く『這般の野蠻人は忽ちにしてホラサン省内各地に横行するに至れり。その

一地方に至るや農民を徵發し之を引率して將に略取せんとするの城市に向ひ包圍攻撃の材料として之を使用せり。满目荒涼として人心恟々、甚しきは家居せるものその如何なる運命に遭遇す可きやを知らず却て捕虜となりしものを羨望するに至れり。地方の豪族も亦その臣下を従へその兵器を携へて韃靼兵の略取せんとせる城市の下に赴かざる可からず、之に服従せざるものはその城市を攻撃せられ部下の農民と共に空しく刀の鏑となれり』と。本に據る。

第 一 編
次に脱忽察兒は Nischabour に向ひ同市を取らんとせしが(同曆六一七年九月、西曆一三二〇年二月)、攻撃の第三日に於て壘壁より放てる矢に中りて殺されたり。代て指揮權を握りし將軍は兵力薄くしてこの要地を抜くに足らざるを見、圍を解きて軍隊を兩枝隊に分ち自ら一枝隊を引率して Sebzavar に進み、三日の終に至りて之を襲取し七萬の住民を悉く屠れり。他の一枝隊は Thouss 地方に向ひその進軍の途上に横はれる城塞殊に Car 并に Zocan の兩城を下し悉くその住民を殺戮せり。本に據る。

217
拖雷のホラサン省に入りて後第一に攻撃を加へたるはメルヅ Merv-Schahidjan 府なり。この府城は省内四大都府の一、セルヅク朝支丹瑪里克沙并に散者耳の舊都にして Merver-round 河一名ムルガブ河々畔肥沃なる平原に位せり。アム河畔より遠く退却するに際し支丹謨罕默德は命をメルヅに傳へて官吏と軍隊とは宜しく附近の Méraga 城に退却す可し、府民の移住する能

はずして城内に止まるものは蒙古軍に服従す可しと令せり。然るに謨罕默德狼狼の事情は既にメルヴ市官吏の知る所となり、同市の知事巴哈夷倭兒 Behai-ul-mulk は Meraga 城の恃むに足らざるを信じて去て Alatac Cavini に據れば Taberistan に於ける高山の頂に位せる堅城なりと云ふ。 城に籠り領袖の多くはメルヴに歸りその離散せるものも亦少からざりき。巴哈夷倭兒に代りて知事となりし人物は庸才にして教務長官 Moufi と等しく降參論を主張せしが、法官と Sevids の領袖とは之に反して防禦を試みんことを欲せり。既にして哲別、速不台のメルヴ地方の Maroutchac に至るや、府城の代表者は來りて服従の意を通ぜり。然るにこの際曾て謨罕默德の護衛に任せし Boca と呼べるトルコマソ人の一將校同種族の人民を糾合して一軍を組織し突然メルヴに現はれ、防禦論に贊成せる府民省内のトルコマン人并に蒙古軍の徴發に應ぜず、出奔して之を避けたるの人士をその軍旗の下に收めたり。

さりながら Boca の權勢は久しく繼續せざりき。支丹が Termed より出奔するの時まで之に隨行せるメルヴの前の知事木直而倭兒 Modir-ul-Mulk は支丹の死後メルヴの附近に至りしに市民と云はず軍人と云はず之に心を寄するものは多數相率ゐてその軍に投じたり、而して Boca の警戒その效なく、木直而倭兒は首尾克く城内に入り軍隊は悉く之が制令を奉ずるに至れり。かくて Boca も亦之に服従せざるを得ざることなれり。茲に於て木直而倭兒は帝王の位を窺視

せんとし親ら皇室の血統を傳へたりと稱せり、曰く我が母ははじめ支丹の後宮にありしがその身むに及びて支丹の命を以て出でて我が父に嫁せるなりと。

第 一 編
 教務長官は蒙古軍に黨しその姻親なる Serakhs の法官と私に文通する所ありき、同市はメルヴを距る六日程の地に位し既に蒙古人を守將として戴けり。木直而倭兒は之を偵知せしも敢て知らざるの色を装へり、然るに教務長官は親ら秘密を洩らし一日回教寺院に於て法話を試みし際、思はず『蒙古人の敵は悉く亡べよかし』と述べたり。この言を聞くや聽衆は甚しく激昂して辭色共に犯す可からざるものありしかば、教務長官は狼狽して余が口頭より出でたるの語は余が思想に反對なりと云ひて辯解せんと試みたり。この事件は木直而倭兒をしてその嫌疑を確めしめしも、而も明法の士に對しその叛逆の明證を俟たずして刑罰を加ふるを欲せざりき。但し間もなく之を獲るを得たり、即ち教務長官が Serakhs の長官に寄するの文書を押取するを得たり。木直而倭兒は犯人を召喚して詰問せしに事實を否定せしかばその自筆の書狀を示して詰りしに、黙して一語をも發せず乃ち退席す可きを命ぜり。その出づるや知事の護衛兵は短劍を以て之を刺殺し、足を以てその屍を蹴り以て之を公衢に致せり。

219
 この間巴哈夷倭兒は Alatac 城を棄て Mazenderan 省に赴きて蒙古軍一首領の許に投じ、メルヴ府略取の策を建て、若し之が領主たるを許さば毎年報酬として棉布を獻せんと誓約せしを以

て蒙古兵を供給され之を引率して出發せり。往きて Scheristan に至りてメルヴに起りたる革命の報に接し、同地より書を木直而倭兒に送りて曰く、我等は互に知事の職に對する軋轢の念慮を忘れざる可からず、蒙古兵は極めて多數にして到底之に抵抗せんことを思ふ可からず、蒙古兵は一瞬時の間に Neischabour 市を滅却し了れり、七千の蒙古兵は一萬の新徵募隊と共にメルヴに向て進軍中なり、余は今この軍隊と共にあり、余はメルヴの幸福に就て苦慮するが故に友誼的に倉皇之が通知の勞を執ると。この通知は府城の有力者間に甚しく恐怖の念を起さしめ避難の議出づるに至りしが、更に再考してその虚報にあらざるやを疑へり。乃ち書狀を齎らせる二人の使節を詰問せしに事實を自白せしを以て之を殺戮せり、蒙古兵も亦巴哈夷倭兒のため欺かれたるを見るや之を斬に處せり。

この狼狽より回復するや木直而倭兒は兵を Sérakhs に派し、同市の法官が親ら諾延哲別の許に進物を齎らし且蒙古軍より Sérakhs 縣令の職を受けたるを謹めて之を拘引せしめたり。この官吏はその曾て死刑に行へるものの實子に引き渡され之が爲に復讐の料に供せられたり。當時暫く敵兵進軍のことを談ずるものなかりしより、木直而倭兒その他メルヴの名望家は悠々自適又危険の近づくことを思はざりしに、忽ち Amouvé の縣令は來着して蒙古兵同市の前面に於てアム河を渡りて進軍し來れりとのことを報道せり。實にこの野蠻人の一枝隊八百人はメルヴ附近

に駐營せるトルコマン人に向て襲撃を加へしが、戦闘の酣なるに際し花刺子模より來着せる土耳其兵の一隊二千人背後より蒙古兵を攻撃し殆んどその全軍を屠殺せり。捕虜となりし六十人は府内を一週せしめし後悉く屠殺せり。この戦勝の結果トルコマン人は Amouvé の縣令を推選して首領となし、最早木直而倭兒の命令を奉ずるを好まざりき。この一揆は更に府城を奪ふの計畫を立てしが知事はその謀計をして失敗に了らしめたり。茲に於て一揆はメルヴの郭外を劫掠して之に復讐せり。

親王拖雷が占領諸省に於て徵集せる新徵募兵を併せて七萬の大軍を擁し、以て府城の城下に逼りしは宛もこの際なりき。蒙古軍が第一に着手せし作戰は府城を距ること遠からざるの地に舍營せるトルコマン兵一萬騎を破るにあり、即ち伏を設けて之を誘ひその一部を殺戮しその一部を潰走せしめ、家畜のその所有に屬せるものは勿論そのメルヴの城下に於て掠奪せるものを擧げて夥しく之を鹵獲せり。

翌日（同曆六一八年一月一日）拖雷は五百騎を従へて城外を一週し堡壘を視察せり。前後一週日の間に部下の軍隊は悉く城下に來集せしを以て攻撃は即ち開始されたり。被攻圍軍は兩方面より二回の開城出撃を試みしも空しく撃退されたり、敵兵は終夜壘壁の周圍に佇立して以て一人の府民たりとも城外に脱走することを得ざらしめたり。翌朝木直而倭兒は蒙古親王の許に使節として

高德の式僧を派遣せしに、式僧の復命極めて良好なる約束を報じ來りしを以て、知事は遂に親ら貴重なる音物を携へて親王の本營に赴けり。（一） 拖雷は木直而倭兒をしてメルヴの政治を行はしむ可く住民の生命は之を助く可しとの保證を與へ、禮服を授けて之を身に纏はしめ、次でその友人その従者と懇親を結び、之に官職采邑を授與せんと欲するが故に之を引見せんと希望を示せり。知事は人を派して之を求めしめしに、親王はその來りて又抵抗を行ふ能はざるに及び知事を併せて悉く之を縛し、命じてメルヴ富豪の姓名を擧げしめたり、乃ち名簿を調製して商人地主二百名を數へしに何れも蒙古軍の兵營に召喚せられ、同じく姓名を登録されたる技藝家職工約四百人と共に之に赴けり。茲に於て兵士は府城に入りてあらゆる住民を市外に驅逐せり。令して曰く住民は各々家族と最も貴重なる財産とを携へて出城す可しと、民衆の陸續として進行すること四日間に及べり。親王は平原中に金色燦爛たる席を設けて之に着坐し軍人の捕虜となれるものを引見してその首を刎ねしめたり、住民は之を見て涙の滂沱たるを禁ずる能はざりしが、その運命も亦之に劣らざるものありき。男女老幼は悉く隔離され、悲咽、呻吟の聲は空中に反響せり。この不幸の徒は未だなほその運命の如何に悲惨なるやを解せざりしが、軍隊の間に分配されて悉く虐殺せられたり。この虐殺に際し *Satkhiss* の義勇軍はその法官の死に報いるが爲め刻薄なること遙に野蠻人に超えたり。その生命を全うするを得たるは唯四百人の職工と男女の少年の奴隸

に充てられたるものとありしのみ。捕虜となりし富豪は拷問に遭へり、強逼してその財貨を隠匿したる場處を告白せしむるが爲に最も殘忍なる苛責は之に加へられたり。都府は劫掠せられたり、蒙古兵は又セルジック支丹散者耳（二）の墳墓に寶貨を得可しと信じて之を發掘せる後火をその靈廟に放てり。メルヴの城堡と内壁とは共に毀たれたり。（三）

（一）はメルヴ附近に於て死せしもの凡そ七十萬と記し、（二）は *Satkhiss* の *Yanahatun* と云ふもの多數の助手を從へ死者を數へしに前後十三日間を要し死屍の明なるものみにて百三十萬人餘を得たりとあり。

この虐殺の舞臺を棄てて *Nischabour* の劫掠に向ふに先ち、能く父帝の資性を傳へたる蒙古の少年親王はこの荒廢に歸したる府城の知事としてその有力なる住民の偶然助命せるものを任命し、蒙古人の司令官をして之が副たらしめたり。軍隊の遠く去るや地下の洞窟より約五千の人民出で來りしも永く慘死を免がるるの幸福を享有せざりき。蒙古兵の後れて拖雷の軍に加はらんとして同市を通過せしもの、亦皆メルヴ市民の血に飽かんことを欲し、その首領はこの不幸の民に命ずるに各自その衣服の端に穀物を藏め之を携へて市外の兵營に來る可きを以てせり、不幸の民はこの命に従ひて殺されたり。この軍隊は進軍の途上遭遇せる避難の民を悉く屠りしが、之に次で來りし他の部隊も亦その目に觸れたる人民は一人も之を助けざりき。

拖雷はメルヴを隔つること十二日程の地に位せる *Nischabour* に向て進軍せり。この都市はその名稱波斯語に *Sapor* の都府の義を有し *Cosroës* 王國の時代にはホラサンの首府たり、

又之をイランと呼ぶものあり、これ古波斯の名稱なり。一世紀に満たざるの間に於て滅却されしこと二回、即ち一一五三年には支丹散者耳サシヤンサンに叛きてホラサンを蹂躪せる遊牧民族土耳其種烏古斯部族によりて、一二〇八年には地震によりてともに慘禍に遭ひしも Nischabour は再びその廢址に起り、蒙古の親王が義兄脱忽察兒トクトグチヤルの戦死に報いるの熱情燃ゆるが如く來りて之れを圍みしときはその城壁内に夥しき人口を收容せり。 Ataraid ul-tulia 井に Djihan Kuma 参照。 數箇月以來同市の住民は附近に來

りたる蒙古兵に對して全力を盡してあらゆる災禍を之に蒙らせしを以て其攻撃を受くるを豫期して盛んに防禦の準備に盡瘁せり、壘壁には鏢槍を投ずるの器械として用ゐらるる弩砲バグナ三千、通常の弩砲カキビユルト五百を備へたり。蒙古軍の準備も亦之に劣らず精力を盡し、先づ Nischabour を首府とせる省内全部の蹂躪劫掠を了れる後、城市の下に投槍用弩砲三千、通常弩砲三百、石油壺投射用器械七百、雲梯四千、井に石塊二千五百荷を運びたり、但し石塊は附近の山脈も亦充分之を供給するを得たり。被攻圍軍の領袖輩はこの準備の大仕掛なると城市を圍める軍隊の夥しきとを見て士氣大に沮喪し、式僧并に名望家を以て全權委員を組織しホラサンの大法官を以て一行の長官となし、往きて親王拖雷の本營に至りて城市降服の意を通じ且蒙古の君王に對して歳貢を納付す可きことを提議せしめたり。されど拖雷は全然降服を容るさず且大法官を留めて歸らしめざりき。翌朝拖雷は城市を一週して士卒を激勵し以て強攻を行はしめたり。攻撃は諸方面より同時に開始

されたり、時に恰も水曜日(回曆六一八年二月二日)なりき。終日奮戦夜に至るもなほ干戈を戢めず、曉に至りて塹壕は填充せられ城壁は七十箇の破口を生じ一萬の蒙古兵は雲梯によりて之を攀ぢたり。攻撃軍は各方面より城内に闖入し之が街衢と家屋とは日没後まで幾多交戦の舞臺となれり、されど金曜日には全市蒙古兵の占領に歸し脱忽察兒の戦死に對して殘酷に復讐されたり。成吉思汗の女なるこの將軍の寡婦は一萬人に將として城内に入りその目撃せるものは悉く之を虐殺せり。殺戮は四日間繼續し犬猫をも亦屠れり。拖雷は曩にメルヴの劫掠に際し住民の多數が死屍の間に隠匿してその命を全うせるものありきと人の語るを聞き、命じてその激怒の犠牲となる住民の首を悉く刎ねしめたり。かくしてその首を積み上げて金字塔を造りしが男子女子小兒と各々之を區分せりと云ふ。都市滅却には十五日間を要し全然之を破毀してその遺址に大麥を播種せり。住民のうち生命を全うせるは職工四百人あるのみにして、職工は何れも北方に移住せしめられたり。されど又た地下に潜みて虐殺を免かれたる不幸の民なきにあらず、故に蒙古の親王は一隊の兵士を留めて大軍の退却後避難の地より現れ出づるの民を屠らしめたり。その隠匿せる土窖内に於て最後を遂げたるものも頗る夥しかりき。ヘチ、ニに據る。

四五年の後に至り只拉兒哀丁チニヤル、ムニツツンの波斯を領有するや、年額三萬的那の上納金を容れてこの荒廢に歸したる地方の發掘權を許可せり。然るに財寶之が所有者と共に埋没せられたるの地に就き一

日にしてこの額以上を發見せるもの少からざりき。本に據る。

拖雷はヘラットに向て進軍せり、これホラサンに於て未だ征服を経ざる唯一の都府なりき。Thouss 劫掠のことに當れる拖雷の軍の一隊は同市の附近に於てハリフ、Haroun-er-Raschid の陵墓并にハリフ、Ali の後裔として Schivites の崇敬して措かざる Ali-er-Razi の墳墓を滅却したり。拖雷は行軍の途に當れる Cuhistan 地方を蹂躪しヘラット城下にその本營を定めたり市城は Nischabour の南東五日程の地に位し山脈四周し村落園圃相錯落せる一平原のうちにあり。Kimeir 波斯帝國地理雜記一八一三年倫敦出版二つ折本并に Djahan Numa 参照 同市の守將は蒙古の親王が降服を促すが爲に遣したる軍使を殺さしめ、市民に向てその最も愛重せるものを勇敢に防禦せんことを忠告せり。ヘラットは同時に諸方面より攻撃され激戦一週間に互りしが、守將親ら利を失ひしより有力なる降伏黨は勃興し來れり。拖雷は城内の民心和合せざるを察し直ちに降服せば被攻撃者の生命を援はんと約せしにこの提議は容れられたり。かくて支丹只拉兒哀丁の部下一萬二千人を殺戮し盡くせるを以て満足し、回教徒の知事を同市に置き蒙古人の司令官を之に副へたり。一週間の後拖雷は Talecan 郡カレカンに於て父帝の陣に來會す可しとの命令に接せり。ベリッ

蒙古兵がホラサンに入寇せるころトルコマン人の小部族に Cavi-Khanli と呼べるありて Merv-Schahidjan の附近 Mahan 郡マハンに定住せしが、この怖る可き勁敵の來るを聞きて狼狽し

てその領土を委棄して西方に向て移住し、往きてアルメニアなる Akhlatt 地方にその居を定めたり。八年の後蒙古兵又來りてこの地方をも劫掠せるより Cavi-Khanis は更に小亞細亞に避難せり。この部族は當時四百四十戸より組織されしがその部長 Ertogroul は Roum のセルジウク朝支丹より希臘帝國の境上に接せる Angora 附近の地方に封ぜられ且 Oudj-Bey の爵を授けられたり、これ恰も邊疆伯の爵に相當せり。この采邑は希臘帝國に對する蠶食によりて多少擴張されその死後その子 Osman 一に Othman の襲ぐ所となれり。然るに小亞細亞のセルジウク王朝蒙古兵の爲に滅ぼされし後、その王國の各省を管轄せるもの采邑に據りて國を建つるに至り Osman も亦その小侯國の主權を握りて支丹の稱號を唱へオスマン朝の開祖とはなりぬ。

時に一三〇〇年なり。ム、并に著者所載 Sa'd-ed-din Efsendi 撰 Tadj. ni-Tevanikn (歴史の冠) 土耳其文寫本に據る

Talecan を滅却し了れる後蒙古の征服者は之を圍繞せる山間地方に夏季の本營を定めたり(二年)。皇子察合台并に窩闊台も花刺子模より同地に來會せり。その兄朮赤は烏兒韃赤占領のち之と手を別ちて獨りシル河の北方に向へり。秋季の近くに及び成吉思汗はその作戰を繼續せり。支丹只拉兒哀丁が大兵を擁して哥疾寧地方にありとのことを偵知せしを以て乃ち同地に向て進軍せんとせり。途上 Kerdouan の城塞はその抵抗によりて一箇月間之を抑留せしが、城塞内のものを擧げて滅却されたり。成吉思汗は次で Hindou-Kesch 山脈の高峰を超え進んで Ba

mian 城塞に逼りて之に圍を置けり、前記山脈は東方に連互して印度の北方境界を組成せるものなり。Bamian 城下に於て察合台の一子莫圖根 Motougan と云ふもの流矢に中りて殺さるるや、深く之を鍾愛せる祖父は復讐の情熱燃ゆるが如く、その軍隊は之が激怒によりて鼓舞され、強襲を以て城塞を陥れ且一人の生命をも助けず又一物をも鹵獲する勿れとの命令に接せり、即ち全然之を絶滅せしめざる可からず、成吉思汗の希望はこの郡を化して永く砂漠たらしめんとするにありしが、百年の後なほ同地は無人の郷たりき。

察合台はその子の戦死せるとき事を以て他にあり Bamian 壊滅の事業進行せるとき歸り來れり。察合台の父は之に少公子の陣歿を秘せんと欲しその不在に就きて不實の理由を告げたり。數日の後成吉思汗三皇子と共に食卓を共にせるとき伴て怒色を示しその命令に對して從順ならざるを譴責し視線を殊に察合台の面に注ぎたり。察合台は即ち恐懼してその膝を屈して明言すらく父帝の命令を拒まんよりは寧ろ死せんのみと。成吉思汗は反覆同一の譴責を加へ終りに臨んで言葉添へて曰く『されど卿の言真ならば卿よくその言を保つを得可きか』と。察合台叫んで曰く『若し小子の言過たば小子は敢て死せんとす』と。成吉思汗は聲に應じて曰く『可なり矣。卿の子莫圖根は戦死せり、朕は卿の之を愁訴するを禁ず』と。電撃を受けたる如くなりしが察合台は而も能く己を制して涙を濺がざりき、されど食後野外に出でてその壓逼されたる悲哀の情を洩らせり。

へ、チに據る。

成吉思汗は時に支丹只拉兒哀丁が Zabulistan 境上に駐屯して蒙古皇帝并に皇子拖雷の作戰掩護の任務を帯びたる一枝隊と戦ひて勝利を博したりとの報に接せり。只拉兒哀丁は花刺子模の砂漠を横斷し Nessa 附近に於て蒙古軍の一部隊を撃退せる後、舊領哥疾寧地方に赴かんとして途を Nischabour に取れり。されど同市に滞在せるは僅に三日間に過ぎず、その發程ののち一時間にして蒙古兵來着し直ちに之が追撃に向へり(回曆六一七年二月一五日。西曆一二二一年二月一〇日)。支丹は部下將軍の一人に命じて道路の分岐點に於て暫く敵兵を抑留し而して後、途を異にして退却せしめんとしこの命令は實行せられたり、蒙古兵はこの將軍を追躡せしを以て支丹の踪跡を失ひ、かくて支丹はその日のうちに四十リーグの遠きに走れり。されどその Nouzen に至るや同市に入りて暫く安全の位置にありてその軍馬を休養せんと欲せしも市民は之を肯んぜず、却て蒙古兵來て城壁の下に於て之を攻撃せば壘壁の頂より石を投じて共に之を攻めんとて脅逼するに至れり。茲に於て支丹は深更に及びて再び發程せしに、翌日蒙古兵 Nouzen に着しヘラット街道を取りて暫く支丹を追撃せり。而も支丹は三日の後に至り幸にして哥疾寧に達しその政權は一般に承認され各種族より成れる幾多の軍隊は來りてその旗下に聚れり。

哥疾寧は過ぐる一年間前後數回革命の舞臺となれり。初め Gour の人 Mohammed Ali Khar-

post と云ふもの支丹謀罕默徳の爲に同省を管轄せり。然るに支丹の遠くシル河を離れて出奔するやその小舅 Emin Melik と云ふもの當時ヘラット省を食邑として治めしが之を棄てて遠く戦地を避けんと欲し土耳其種康里人二萬を引率して哥疾寧地方に移れり。この首府を距る兩三日程の地に到りしとき、官吏の一人を Kharpost の許に遣して時局の利運多少回復するの日に至るまで部下軍隊駐屯の地を貸與せん事を求めたり。總督とその部將とは之に答へて曰く『我等は Gour 人にして卿等は土耳其人なり、焉んぞ相共に雜居するを得んや。支丹の命によりてその各種軍隊の定住地域は既に劃然として動かす可からず、各々その領邑に定住せん』と。Emin Melik はその要求を反覆せしもその效なかりき。只拉兒哀丁の宰相なる Sérakhs の Schems-ud-din 時に哥疾寧にあり、内城の司令官と相議して Kharpost は君主の親戚を拒みて省内に入れずこれ叛徒の所爲なりとて之を仆さんとし、城市附近の園圃に宴會を催せる際之を招待し、宴の酣なるに及びて司令官手から之を刺殺せり。陰謀を企てたる兩人は直ちに哥疾寧に歸りて府城を距る半リーグの地に舍營せる Gour 兵が未だなほその主將變死のことを聞知せざるに先ちて之が實權を掌裡に收めたり。Gour 兵は將主の最後を聞くや解散し、Emin Melik は招かれて府内に入り總督のこゝを行へり。

間もなく蒙古兵 Post 街道に依りて進軍し來るとの報あり、Emin Melik 之と會戦せんとし

て進軍せしがこの枝隊は微弱にして抵抗を試むるの力なくヘラットに背進せり。この遠征に際し Emin Melik は同行せる宰相 Schems-ud-din を拘留して Ketchouran 城塞に之を幽囚せり。されどその不在に乗じ哥疾寧に叛亂の勃興せるあり、内城の司令官は犠牲として Kharpost の靈前に供へられ、有力なる市民は Termed の Razi-ul-mulk を推して之に政權を與へたり。多數の Khouloudjes

ムに曰くこの民族は元來亞利比亞種なるが土耳其種と雜し印度河恒河の間にありて遊牧的生活を營めりと。

とトルコマン人とはトランスオ

クシアナ并にホラサンより來りて哥疾寧地方に避難し、Seif-ud-din Agrac の軍旗の下に Fer-

schaour Méressid ul-ittia にて Ferschabour 又俗に Bessavour と云ひ La-haur と哥疾寧との間に位せる城市なりと。即ち今の Pischaver なり。 の平原に集まれり。新總督は

之を攻撃して印度のこの地方を占領せんとの計畫を立てしが戦利あらずして部下軍隊の大多數と共に殺戮されたり。生前その政治を輔佐せる弟 Eumdet-ul-mulk その死後哥疾寧の實權を握有せり。されど間もなくカプールの總督は來りて之を内城に圍めり。防戦四十日間、その宛も陥落せるとき宰相 Schems-ul-mulk (校者曰く、馮氏案じて前出) は同府に來着せり、これ支丹只拉兒哀丁がその鐵鎖を破毀して之を哥疾寧に派遣し以て歡迎の準備を行はしめんとせるなり。七日の後支丹は府城の城壁内に入れり。茲に於て軍隊は諸方面より争てその大森の下に雲集せり。Emin Melik は部下の土耳其種康里人と共に再び哥疾寧に來りしかば支丹はその女を娶れり、Agrac Melik は部下の Khouloudjes 并にトルコマン人を従へて Ferschaur より來會せり、カプ

ールの總督と Azam Melik とは部下の Gour 兵を率ゐて來りて麾下に加はれり、以上の軍隊を糾合する時は只拉兒哀丁は優に六萬乃至七萬の騎兵に將たるを得たり。

支丹は一二二一年の春この軍を擁して哥疾寧を發程し Bamian 郡に隣接せる Pérouan の平野に向て進軍し、更に前進して當時 Valian の城塞を圍める蒙古兵に攻撃を加へんとし、不意にその前衛を襲ひて千人の敵兵を仆せり。攻撃軍は是非なく退却してその分遣せる監視軍に投じ只拉兒哀丁は輜重を止めたる Pérouan に歸れり。その歸れるより一週間ののちに至り、失吉忽秃忽 Shiki Contoucou の指揮せる蒙古軍は同地に來れり。

この將軍は三萬の兵を以てカプール井に Zabilistan の山脈起伏せる境上に駐營し、只拉兒哀丁の運動を監視し成吉思汗の作戰を掩護するの任務に當れり。その部下の一隊が Valian 城下に於て敗北せりとの報を得るや乃ち只拉兒哀丁に對して進軍せしに、支丹はその近くを見て敢て進んで之と會戦せんとせり。兩軍は Pérouan の平野に於て互に相望見するに至れり。支丹は Emin Melik を右翼 Agrac を左翼となし、命を下して騎兵をして悉く馬を下らしめ各自乘馬の絡頭をその腰に附着せしめたり。右翼は初め一萬の蒙古兵に壓逼せられて苦戦の位地に立ちしも中央軍井に左翼の援を得て陣地を克復し敵兵を撃退するを得たり。反覆突貫を行ひ爲に何れも多大の損害を蒙りしも以て勝敗を決するに至らず日没に及びて兩軍各々その野營に退却せり。蒙

古の將軍は援兵を得たるが如く裝ひて以て花刺子模兵を欺かんとし、騎兵をして各々手から毛氈製の人形を馬上に乗せ背後より之を支へしめたり。翌朝支丹部下の將軍は敵兵が二列になりて陣を布けるを見るや、これ援兵の來れるなりと信じ退却の議を唱へしを以てこの詭計は將に成功を告げんとせしが、支丹は斷乎として動かす前日の如く徒歩戦を行ふ可しと令せり。蒙古兵は前日の Agrac 部隊の勇敢なるを認めしを以て之に對してその全力を傾注し、騎兵の精銳を擧げて左翼に向て突撃せしめしも流矢雨下思はず背進せり。されど再び突撃を試みその新衝突の結果、花刺子模兵五百人は戰場に仆れたり。茲に於て支丹は喇叭を吹奏せしめしかば全軍再び馬に跨り呐喊の聲勇しく蒙古兵に向て突進し且戰列を展開して之を包圍せんとせり。忽秃忽は部下に注意して Tunc 即ち軍旗の所在を見失はざらしめんとせしが、部下の士卒はその殆んど包圍されんとするを見るや先を争て潰走せり、而してこの平原には凹字形の道路交錯せるを以て乗馬躓きて之に仆れ、かくて駿馬に跨れる支丹部下騎兵の刺殺する所となりしかば忽秃忽の軍隊は爲にその大部分を失へり。

さりながら戦勝も却て只拉兒哀丁に災禍を降すの基となれり。敵兵より獲たる美なる戦利品分配の問題となりしとき Emin と Agrac との間に一頭の駿逸なる亞刺比亞馬を得んとして激烈なる論争を起し、その極 Emin 鞭を揚げて競争者の頭を毆打するに至れり。されど支丹は之に

向てこの暴行に對するの賠償を要求せざりき、これ康里人の之を肯んぜざる可きを熟知せるを以てなり。Agrac 憤懣遺る能はず夜に乗じて部下の Khouloudjes 并にトルノマン人を引率し營を抜きて Ferschaour を指して退却し且 Gour 兵の首領なる A'azam Melik をも説きて離叛せしめたり。支丹は之に向て懇請して歸營せんことを求めしもその效なかりき。かくて麾下の兵の減じて土耳其人と花刺子模人とを剩せるのみとなりしより支丹は再び哥疾寧を指して退却し、更に成吉思汗が部下將軍の戰敗に報いるが爲進軍し來れりとの報を得て印度河 Sind を指して避難せり。二只拉兒哀丁は戰勝の後書を成吉思汗に寄せて卿夫れ戰場を指定せんか朕之に赴かんと壯語せりとあり。

成吉思汗は部下の軍隊敗軍せりとの報に接するや怒色を面に顯はさずして唯忽秃忽は從來勝利にのみ慣れたれば今回の經驗によりて初めて有益なる教訓を得しならんと云へるのみ。蓋しその極めて幼年のときより之を養育せるよりこの將軍に對して宛も實父の如き思ひを爲せるなり。忽秃忽は元來塔塔兒部の出身にして成吉思汗が同部を劫掠して之を獲しときは未だなほ搖籃のうちにありき、蒙古の君侯はその妻 Bouite が未だ母とならずして數、小兒を得たしとの希望をさせるより乃ちこの幼兒を之に與へたりき。忽秃忽が成吉思汗の寵を得たることに付きて一條の逸話あり R. Schlegel の塔塔兒部の條を參看せよ。 忽秃忽はその敗軍の事情を報告するが爲に君侯の許に赴けり。成吉思汗は既に軍隊に命令を下して進軍の準備を整へしめしが、疾驅して哥疾寧に向て前進し二日の間又食物を調理するの餘裕をも有せざりき。

往きて Pérouan の戰場を過ぎしとき忽秃忽と他の一將軍をして兩軍の陣地を指示せしめたり。乃ちその戰略を非難し戰場選擇の法則を解せざるを譴責しその戰敗に就きて責任を負ふ可きものなるを判定せり。かくて支丹の出奔後十五日にして哥疾寧に到り、同市又一の抵抗を試みざりしを以て Yelvadjie と呼べる總督を止めて之を治めしめ、急遽只拉兒哀丁を追撃し印度河の河畔に至りて之に追及するを得たり。只拉兒哀丁は麾下より脱走せる諸部族の首領に書を與へて切に來會せんことを求めしも、その之に同意せるときは既に時日を剩さざりき。成吉思汗は敵兵將に翌日を以て大江を越えんとすとのことを偵知し疾驅その夜を以て到着し、Orkhan の指揮せる花刺子模兵の後衛を襲撃して之を破り、戰略その機を失はず江流に接觸し半圓形を劃して布陣せる縦隊の一大團を以て只拉兒哀丁の寡軍を圍むを得たり。天明に及で攻撃の合圖は與へられ、蒙古兵は支丹の軍隊に向て突撃を試み Emin Melik の指揮せる右翼を破りてその殆んど全部を殲殺せしかば Emin Melik は Ferschaour を指して敗走し途上に駐屯せる敵軍の爲に殺されたり。左翼の戰運も亦之に異ならざりき。只拉兒哀丁は七百人に將として中堅を守り一條の血路を開かんとして半圓形を劃せる敵兵に向て突撃を試むること前後數回、獅子奮迅の勢を以て戦ひしが、敵兵は蒙古汗の命に従ひて之に向て矢を放つことを爲さず徐々に肉薄し來れり。奮戰正午を過ぎしも未だ敵の戰列を破る能はず、乃ち躍て健馬に跨り最後の突撃を試みしに蒙古兵思はず背進せ

しかば、忽ち馬首を廻らして胴甲を脱し江流に向て馳せて乗馬ホに曰く只拉兒哀丁は一二二六年 Tiltis 陥落のときまで常にこの馬を離さざりしが而も印度河游泳の功を思ひ復之に乗りしことなしと。と共に二十呎の高崖より跳て之に投じ背に楯を負ひ手に旗を握り泳ぎて之を横断せり。これを目撃するや成吉思汗は走て印度河の岸に至り、將士の支丹を追躡して之に投ぜんとせるものを抑止し、諸皇子を鷹きて支丹の武者振を示し須らく之を以て模範となす可しと告げたり。蒙古兵は矢を放ちて支丹に倣ふて江流に投せる多數の花刺子模兵を殺しへには目撃者の談に多數の花刺子模兵江流のうちに仆れ河水爲に赤かりきと云へりと。その軍隊の殘兵を虐殺せり、支丹の家族も亦捕虜となり戰勝者はその男子を殺戮せり。ホには只拉兒哀丁印度河畔に至りしとき母后、王妃以下後宮の婦人は捕虜となるの辱を見んよりは寧ろ生命を奪へと叫びしより之を溺死せしめたりとあり。されど他にはこの事實を敘するものなくへは明に王妃等の捕虜となれるを記せり。又この戦役の月日に就きてもへには(七月)八月なりとあれどもホには(十月二十二日 水曜日)十二月九日とありて兩史家の所言一致せず。又戦地の何處なるやに就きては何等の徵す可きものあるなし。只拉兒哀丁はその所有に屬せる金銀類は悉く之を印度河に投ぜしかば、蒙古汗は潜水業者をして之を撈らしめその一部分を收むるを得たり。

只拉兒哀丁は馬上印度河の江流を横断して、戦場の對岸より稍、隔りたる東岸に於て上陸せり。當初は單身にして一人の従ふものなかりしが、次第に支丹の如く江流を渡り得たる部下の將士來りて屬せり。この孤弱なる敗殘の兵は勿論何物をも具へざりき。されど花刺子模兵は臆て附近の地方を横行して兵器乘馬被服を獲たり。Djoudji 侯一千の騎兵と五千の歩兵とを率ゐて來りて攻撃を加へしが支丹は騎兵四千人を以て印度兵を潰走せしめ射てその首領を殺し夥しき戦利品を收

めたり。宛もこの際蒙古兵の一隊近けりとの報あり乃ちデーリ Dehi に向て退却せり。ホ、へ、チに據る

印度北部の諸省は初め Gour 帝國の一部を組成せしがその滅亡の時に際し之を管轄せる土耳其種族の舊奴隸は何れも割據して王侯となれり。這般王侯のうち最も有力なるは Lahaur, Mouletan 并に Sind の一部に君臨せる Nassir-ud-din Caradja といふ Schems-ud-din Hietmisch となりき。Mirkhond 第四冊 并にム、チ參照

第

成吉思汗は實に支丹を追躡せしむるが爲に巴刺 Bela 土爾台 Tourtai の兩諾延を派遣せり。

一

この兩將は印度河を渡りしも只拉兒哀丁の踪跡を發見する能はずして先づ Biah の城塞を陥れ更に往きて Mouletan を圍めり。同市の郭外に於て弩砲に用ゐるの石を求め難きを知り、江流

編

に委棄されたる船橋を以て之に充てたり。かくて Mouletan の城壁を破るの準備成り將に之を占領せんとせしに、偶々暑氣甚だしく加はり蒙古兵は又之に堪ふる能はざりき。乃ち同市の圍を解き且只拉兒哀丁を追撃して深く印度の内地に進入するを欲せず Mouletan, Lahaur, Ferchaour, Merikpour 諸省の地を劫掠して再び印度河を渡り、途を哥疾寧に取りて往きて將にタルタリーに歸らんとせる大軍に加はれり。

巴刺と土爾台とを派遣せる後成吉思汗は印度河の右岸を溯り以て一二二二年の春季に及べり。

窩闊台は又父帝の命により往きて哥疾寧を滅却せり、これその後に至りて物資を支丹に供給し得

可きを以てなり。この親王は住民の人口を調査すと稱して之を城外に出でしめ、唯技藝に熟達せるものを助命してタルタリーに送れるのみ、その他は悉く之を屠れり。次で蒙古兵はこの二世紀以上有力なる帝國の首府たりし哥疾寧 (Ghazna) に Ghaznin) を劫掠して之を化して廢址となせり。チに據る。

之と同時に將軍伊兒知吉歹 (按只吉歹) Itchikadai の指揮を奉せる一軍は往きてヘラットの市城を滅却す可しとの命令を受けたり、曩にヘラットのみは獨りホラサン省内にありて兵火の災を免れしが、只拉兒哀丁が忽禿忽に對して戰勝を博したりとの報に接するや同市は兵を擧げて叛せり。初め同市の征服されしときその住民は機會の乘ず可きものあらば以て蒙古の桎梏を脱せんと欲して兵器糧食を積聚し、兩總督に對してはかくの如く戰備に汲々たるは蒙古兵と共に進軍す可しとの請求來るの日に備ふるが爲なりと託言せり。ヘラットを距る遠からざる地に Caloun の城塞あり、Badghiss 郡に於ける懸崖の頂に位し後年に至りて Nerretou の名をもて知らるるものこれなり。その城壁の麓に至らんとせば是非共半リグに互れる徑路を攀ぢざる可からず、而も狹隘にして兩人相並んで同時に進む能はず。Raouzi-ul-Djennat 參看 かくの如く弓矢の力も將た弩砲の發射する石も亦及ぶ能はざるが故に蒙古兵は二度之を攻撃せしも遂に之を陥る能はざりき。Nerretou の城兵は野蠻人の更に來りて攻撃を試み且ヘラットの義勇兵をして之に向はしめんこ

とを恐れ、乃ち同市に對して苦肉の策を施し之をして蒙古兵の殘忍なる復讐を恐るるの餘り兵を執りて自ら保護し、以て Nerretou と存亡を共にするに至らしめんとせり。この謀計に従ひ書を兩總督 Aboubekir, Mingtai の許に寄せて、降服の意を通じ、而も蒙古兵の苛刻なるを恐るること深きを以て何は兎もあれ文書もて蒙古の汗より助命す可し、との約束を獲んことを乞へり。Aboubekir と Mingtai とは遲滯なくその要求に應ず可しとの旨を保證し不取敢兩地の間に通を開かんことを提言せり。これ即ち Nerretou 住民が豫て希望せる所にしてその謀計はかくて實行せられたり。即ち勇敢の徒七十人をして變裝して商人と爲り、その携帶せる行李のうち兵器を隠匿して出發せしめ、かくて各々別れて市城に入り首尾克く兩總督を殺害せしめたり。ヘラットの住民は直ちに兵を擧げ Aboubekir 并に Mingtai 部下の士卒を悉く虐殺し文武の長官各々一人を推選せり。

ヘラット市懲罰の任務を帯びたる將軍伊兒知吉歹は包圍攻撃を開始するに先ち、占領地に於て徵發せる民兵約五萬人の來着を俟てり。城市は必死となりて抵抗するの準備を整へ之が領袖輩は相誓て同心協力飽くまで奮闘するの決心を定めたり。蒙古兵の攻撃は烈しく撃退され、血戰幾回となく相次で試みられたり、然るに結局被包圍軍のうち不和起りその一部は降服を思ふに至れり。伊兒知吉歹乃ちこの軋轢に乗じ包圍を繼續すること六箇月十七日にして遂に城市を奪へり

(同曆六一九年五月二日。西曆一三二二年六月一四日)。市民は悉く屠殺せられ全一週の間蒙古兵は殺戮劫掠燒却壞滅の作業に忙殺されたり。傳へ云ふヘラットに於て虐殺されしもの百六十萬人を數ふと。伊兒知吉歹は君侯の許に送るにこの不幸なる都市に於て獲たる戦利品のうち最も貴重なるものと數千の年少捕虜とを以てし、その遠征の目的達せるを以て往きて再び大軍に加はれり。間もなく二千人の一隊はヘラットに赴きて住民の虐殺を脱がれて、廢址の間に徘徊せるものあらば之を殺戮す可しとの命令に接し約二千人を屠り三日間市街を搜索せり。十六人の避難者ありヘラット郡内に於ける嶮山の頂に匿れ暫く同地にありて動かず、蒙古兵の止まるものなきを見るに及びてヘラットに歸りしに街衢にはなほ死屍の狼藉たるものありき。他の避難者も亦來りて之に加はりて四十人の一團體を爲し回教寺院に寄寓せり。Kaouzat-ri-djemat 参考。

メルヅ市は曩にその住民の虐殺されし後再び住民を得しが蒙古兵は再び之を荒廢に歸せり。その市民の移住せるものは故郷を愛するの情に動かされて之に歸り近傍地方の住民の同じく慘死を免かれしものは同市附近の肥沃なるより多く來りて之に定住せり。既にして支丹部下の一將校は多少の兵を引率して同市の城下に來りて之を占領して拖雷の同市に置ける波斯人の知事を死に處せり。この事件はメルヅの爲に新に災禍を招くの基と爲り、蒙古兵の一隊五千人は Nakhscheb より來りて悉くその住民を虐殺し市内各區を軍隊に配賦して之が滅却のことに當らしめ、その退却

するに當り Ac-melik と稱する回教徒に少數の士卒を添へてメルヅに留め之に命じて再び同市に現はるる者あれば悉く之を殺戮せしめたり。Ac-melik はこの不幸の徒を發見するが爲にあらゆる搜索の方法に訴へ、遂に最後の手段を取りて回教寺院の高塔に於て祈禱施行の旨を廣く傳へしめたり、回教徒はこの役僧 Muezzin の聲を聞くやその避難の場所を出でて信心を盡さんとせしに悉く捕獲せられてその命を失へり。この知事の搜索は四十一日間繼續しその間之が配下のものは捕獲したる不幸の徒に對し前古未曾有の残忍を加へ、メルヅ市は僅々數人の住民を止むるのみとなれり。メルヅは Tamerlan の子支丹 Shahroukh の治世までは砂漠たりしが同支丹第十五世紀の初に於て都市を再築して住民を招けり。Djihar-Numata 参考。

印度河畔に於て只拉兒哀丁に對して依然として忠誠を失はざるの軍隊を擊攘せる後成吉思汗は之に離叛せるの軍隊を攻撃せり。その有力なる領袖輩は既に悲慘なる最後を遂げたり。Agrac は花刺子模帝王の陣を去りてより A'azam と共に先づ之が采邑 Bekerhar に赴き暫らく同地に淹留せる後 Ferschabour を指して出發せり。出發の後直ちに部下將校の一人を A'azam の許に遣し豫てより甚く Agrac と相敵視せる Khoulloudjes 五六千戸の長 Noun-Djandar をその領内に滞在せしめざらんことを請求せり。A'azam は刻下の境遇にありては回教徒の互に反目すること最も然る可からずと答へ、五十人の護衛を従へて Agrac の許に至りその怒を宥むる所あらんとせしが、堅くその主張を執て可かざりき。かくて宴を開きて互ひに酒杯を擧げしに Agrac

は酔ふて益々精神の平衡を失ひ馬に跨り騎兵百人を率ゐて親ら Khoulloudjes の營に赴けり。Nouh は之を以て和解の爲に來れるものなりと信じ、その子と共に出でて之を迎へたり。Agrac はその仇敵を見るや怒氣益々激して劍を抜きて之を斬らんとせしに、忽ちにして Nouh の麾下の士の寸斷する所となれり。Agrac の軍隊は主將變死の報に接するや、これ全く Nouh と A'azam とが企てたる陰謀の犠牲となりしものなる可しと信じ、先づ A'azam を殺戮し次で Nouh の兵營に突撃を試みその子を併せて之を虐殺せり。Gour 兵の多數は更に他の戦闘に於て仆れ、最後にこの Khoulloudjes トルコマン人并に Gour 人より成れる軍隊の殘兵は蒙古騎兵と波斯歩兵とを以て組織せる軍隊の追撃を受け、僅々たる時日の間に支離滅裂の状態に陥れり。ハに據る。

哥疾寧掠奪のち窩闊台は急使を父の許に馳せて Sistan 市政撃の命を下さんことを乞へり。成吉思汗は炎熱酷烈なりしを以て之に歸營す可きを令し、夏季の舍營を蒙古人の Belouan と呼べる平原に定め、傍近の地方を悉く劫掠せり。チに據る。成吉思汗が始めてその占領せる都城に文官たる知事即ち達魯花赤 Darougas を配置せるは當時のことなり(一二二二)。ハに據る。成吉思汗は巴刺、土爾台兩諸延の來り會するを待ち、その來着するに及びて進軍を開始し Gonnaoun Cour-kan 城の附近に於て窩闊台の來會するに遭へり。冬季の舍營は之を印度河の河源に近き山間の Bouya-Ketver 郡に定めしが同地にあるや悪性の傳染病大にその軍隊を惱ましたり。

一二二三年春この疫病の病勢衰ふるや、成吉思汗は途を印度西藏 Tubbet に取りて蒙古に歸らんと決心せり。

通鑑綱目に據るに成吉思汗印度にありしとき鐵門關の附近に於てその侍衛鹿に似たる一動物の尾は馬のふを開けり。成吉思汗耶律楚材に向て之を詢問せしにこの動物は角端 Gosaur と稱し萬國の語に通ぜり、猥りに流血の慘状を呈する時現出するものなり大軍西征既に四年上天虐殺の甚しきに驚きこの靈異を陛下に示せるなり、乞ふ天意に従ひてこの王國の民を助けよ、之に寛假せば無限の幸福を享受するならんと奉答せり。成吉思汗乃ち師を班すとあり(ハに參看)。チに西夏を討つるより之を伐たんに爲に東歸すとあり。その蒙古に歸れる後約一年にして西夏を伐ちて之を亡ぼししは事實なりと雖もその國王の反抗せる證據は見えず。按郎長春西遊記云。壬午八月二十七日從車駕北回。九月朔渡河橋而北。九月杪已至那米思干。壬午爲太祖十七年(一二二二年)。是此年即凱旋矣。而二十年(一二二五年)正月還宮。則拉施特與他書所紀年分相同。以。以西遊記與拉施特所言爲本。庶爲得實。(元史譯文禮補) 出發に先ち帳幕毎に十人乃至二十人を數へたる夥しき捕虜に命じて兵士の食糧に供するが爲に多量の糶を玄米と爲さしめたり。一週間にしてこの作業終るや一夜にして悉く捕虜を屠れり。軍隊は途を西藏に取りしが數日の後に至り「元へ」の命令に接せり。峻嶺屹立し密林繁茂せる廣漠たる地方を横斷するの困難多大なる可きことは明瞭となれり。成吉思汗は波斯街道に由らんとして踵を Peschavour に返せり。

成吉思汗は Bamian の山脈を超えたる後夏季の舍營を Bacalan 郡に定めたり、これその大

行李を留めたるの地なり。秋季の近くに及びて進軍を繼續しバルク附近を通過するや、再び歸りてこの市城に住へるものを悉く殺したり。この省内に於て虐殺を免ぬかれたる人々は一年間犬猫の肉を以てその糧食に供するの窮地に陥れり、蓋し蒙古兵は家畜の肉と乳とを以て常食と爲すが

故にニに糲和兵の獸肉をのみ食用に供せることを記せり。單に之が牧場を必要となすのみ、敵地に於ける穀類は悉く之を廢物たらしむるが故に幸にしてその殺戮を免かれたるものは野蠻人の退却後、飢餓の極死に瀕するを以てその常となせり。成吉思汗は再びアム河を渡れり。ヘ參その蒲花羅にあるや Sadr Dihan に命じて回教の教理を熟知せる者を進見せしめたり。乃ち Eschref と稱する法官と一人の説教師とをして之に應ぜしめしに、成吉思汗はこの兩博士をして回教の主要なる教義教條を説明せしめて、メッカに參詣するの一條を除く外すべて之を賞讃し、全世界は即ち上帝の家なり、何れの處に於て祈禱するも等しく上帝に達せずんばならずと云へり。撒馬爾罕に着するや市内の名望家は出でて之を迎へたり。成吉思汗は上帝朕をして謨罕默德に對して戰勝を博せしめれば、朕の爲に公けの祈禱を執行せよとの命を下せり。法官と式僧とは請願して從來納付し來れる課税を免除さるることとなれり。ラに據蒙古汗は同市より急使を朮赤の許に派しその諸子と共に來會せしめんとせり。花刺子模占領後この親王は察合台との確執に就きて憤懣に堪へず、シル河々北の地方に赴きて狩獵に耽りてその日を過せり。父帝は之に會合の地點を告げて言はしむらく、この廣漠たる平原の禽獸を驅りて來會せよと。成吉思汗は一二三年冬季の間全く撒馬爾罕地方に淹留し、一陽來復して再び進軍を繼續するや、軍隊の進行中支丹謨罕默德の母后寡婦親族をして道の傍に佇立し、高聲を放ち且悲鳴を揚げて以て花刺子模帝國に對し訣別せしむ可しとの命令を下せり。

シル河々畔に至るや曩に蒲花羅の附近に留りて狩獵に従事し冬季中毎週五十荷の獲物を父帝の許に致せる皇子察合台、窩闊台來會せり。

成吉思汗は一二二四年の夏季を通じて Colan-Taschi 郡に滯留せり。朮赤は父帝の許に來らざりしが、その命によりて夥しき野獸殊に野馬の群は驅り立てられて成吉思汗の狩獵の快樂に耽れる Calan-Taschi の近郊に集まれり。成吉思汗を始として將士皆爭て喜んでこの動物を射しが野獸は何れも長途の逃走に疲れしを以て手から之を捕獲するを得たり將士皆これに飽きしとき野馬の残れるものを助けしが、之を捕獲せるものは各々その毛に特種の記號を施して之を野に縱てり。

成吉思汗は一二二四年の夏季と冬季とを途上に經過せり。後年有名なる治世を遺したる忽必烈 Coubilai 旭烈兀 Houlagon の兩皇孫は來りて乃蠻部と畏兀兒部との舊境に近く葉密爾河 Imil の邊に於て之を迎へたり。忽必烈は時に十一歳にして途上一兎を殺し、旭烈兀は時に九歳にして一鹿を獲たり。而して少年の始めて狩獵に赴くや、肉と脂とを以てその手の中指を摩すること蒙古人の間に於ける慣習なりしかば成吉思汗は親から兩皇孫の爲にこのことに當れり。その後布喀蘇起庫 Bouca Soutchicou と稱する地に於て軍隊の爲に饗宴を催し、一二二五年の二月その幹ルツ耳朵に達せり。「ヘ、チ」に據る。

成吉思汗は次で唐古特征伐の準備を爲せり。されどこの最後の経略に就きて成吉思汗の事蹟を述ぶるに先ち、彼の歐羅巴の領土内にまで蒙古兵の威名を輝かせる後途上に來會せる哲別、速不台兩將の劫掠的進軍に就て敘する所あらん。

第八章

第

編

支丹謨罕默徳の殂落後之が追撃の任務を帯びたる哲別チエベ、速不台スフタイの兩將は Irac-Adjém 省蹂躪の業を完うせり。既に Ravi 市は野蠻人によりて劫掠せられ Com 市も亦同一の運命に遭遇せり。ラには將軍哲別 Com に逼りしときその陣中にありし回教徒は之に説きて同市の住民は Rafazis 即ちアリ派なればとて悉く之を屠らしめたりとあり。そのハマダンに近くや同市の市長は夥しき進物を携へて出でて之を迎へ降服を約せしを以て、乃ち之に守將を置けり。Zendjan を滅却せる後強襲を以て Cazvin を陥れしに住民は手に短劍を握りて街衢に於て防禦を試み多數の蒙古兵を殺害せしも、而もその頑固なる抵抗も以て大虐殺を脱かるる能はず四萬人以上の住民は之に死せり。

兩將は沿道到る處人を殺し家を焼きて Azerbaïdjan 省の首府 Tebriz に向て前進せり。同省と Kour 河を隔てて之に界せる Arran 省とは當時 Euzbeg と呼べる土耳其種一君侯の有に歸せり、その父は Djihan Pehlivan と稱し、その祖父 Ildéguz は初め欽察キンチンツク地方より奴隸として波斯に輸送され Irac-Adjém のセルヅック朝支丹に轉賣されたり。釋放されたる後次第に昇進して大官となり、かくて Ildéguz は一一四六年に食邑として Azerbaïdjan, Arran 兩

省の地を得たり。四十八年の後に至り Irac のセルジック王朝滅亡するや、Ildéguiz 家はこの兩省の領有權を保ち一一九七年以來 Euzbeg は之に君臨せり、但し稱號は父祖兩代の如く Atabey 即ち父 Bey と云ひてセルジック朝支丹が當初總督の資格を以て皇子の許に配置せるの官吏に與へたる舊稱を以て満足せり。

蒙古兵の Tebriz に近きしとき、Euzbeg は高齡なるが上飲酒に耽りしを以て又領土防禦の爲に兵器を執つて立つを思はず、財寶の一部分を犠牲に供して危険の切通し來れる暴風雨を避けんとし、金錢服地、馬匹家畜等を夥しく貢賦として納め以て平和を購へり。

蒙古兵の兩部隊は茲に於て Azerbaïdjan より撤退して裏海の海岸に赴き、氣候の緩和にして牧草の繁茂せる Mogan の平野に冬營を定めたり、何となれば冬季の寒威凜烈にして積雪深く時に道路の梗塞すること珍らしからざればなり。時に蒙古兵は突然グルジアに侵略を試み、グルジア兵一萬人の軍隊を破りてその大半を殲滅せり。

氣候の險惡なるの間蒙古兵 Mogan 地方に滞在す可しとは世人の豫期する所なりき。グルジアの大使は出でて Azerbaïdjan 侯并にメソポタミア王を説き、同盟を組織して以て春季を俟ちて蒙古兵を攻撃せんとせしが、この野蠻人は玄冬に際して再びその作戰に着手してグルジアに入れり。その軍隊は多數のトルコマン人并にクルド人の應援を得たるがこの地方に住居せる這般の民

族は數 基督教徒より多大の迫害を受くるを以て蒙古將軍の之と戦はんとするや争てその旗下に集れり、況んやその富裕なる地方を劫掠して多大の戦利品を獲るの望あるに於てをや。この援兵は Accousch と呼べる Euzbeg の武將 (mamelouck) 之を指揮し、グルジア侵略に際し蒙古軍の前衛となれり。グルジア軍はチフリス Tiflis にありて敵兵の來るを待ちしが、蒙古兵は之を距ること遠からざるの地に至るまで悉く放火虐殺を行ひたり Accousch の部隊先づ戦鬪を開始せしが頑強なる抵抗に遭遇し、この援兵は多數の生命を失へり。蒙古兵はグルジア兵のこの最初の攻撃を受けて兵力減少し且疲勞せるを見るや、之に對して突撃を試みて之を潰敗せしめその軍隊の大半を擧殺せり (回曆六一七年二月)。ニに韃靼兵の行軍神速なる支那の附近を出發してより一年ならずしての讀者は之を信する能はざらん、豫言者の生誕以來未だ今日の如く回教徒に取りて不幸の甚しきはあらず、一方に於ては韃靼兵は Mavera-n-nahr ホラサン、イラク、アザール、バイジアンを蹂躪し、他の一方に於てはフランク人羅馬帝國の彼方に當り西北に位せる地方より來りて埃及に入りタミエットを占領す云々とあり。

春 (回曆六一八年) に至りて蒙古兵はグルジアより撤退して Tebriz にその鋒を轉じ、之をして再び莫大の貢賦を納れて掠奪を脱がれしめ往きて Meraga に逼りて之を圍めり。同市の領主は一女侯にして當時 Rouider 城に在住せり。蒙古兵は例の如く回教徒の捕虜となれるものに逼りて強襲以て之が攻撃に當らしめ、その背進せるものは之を虐殺せり。タかくて數日の後 Meraga を占領して (回曆二月四日) (西曆三月三日) その住民を屠り、携帶し難きものは悉く之を燒却せり。虐殺を脱

ぬかれたるものをしてその避難地より出で来らしめんとし、捕虜に命じて大叫して韃靼兵退却すとの旨を觸れしめ、かくて極めて多數の民を殺戮するを得たり。二に一人の韃靼婦人ありける家屋に入りて虐殺を行ひしかば人々これ男子なりとなしに驅てその甲冑を脱するを見て婦人なるを知り回教徒の捕虜となれるもの之を殺したりと云ひ、又一人の韃靼兵さる街衢に於て百人以上の住民に會ひその抵抗せざるを見て悉く之を屠れりと云ふとあり。

野蠻人等は Méraga より Erbil に向て進みしが、この山間地方に進入せんとせば隘路を通過せざる可からず、而もこの隘路は二騎の相並んで行進するを許さず、爲にその方向を變じて Irac Arab に向てその馬首を轉ぜり。ハリフハ那昔爾はその領土の危険に逼るを見るや直ちに Erbil 侯 Mozaffer-ud-din, Moussoul 侯 Bedr-ud-din, メソボタミア侯 Melik Eschref に對して出兵を促せり。Erbil, Moussoul の兩侯はこれに従ひ Dacouca に向て各々領内の民兵を進發せしめしに多數の義勇兵は來りて之に加はれり。然るに Eschref は十字軍 Damiette を略取せるより、ダマスカス侯なる同胞 Moazzam 來りて強て之に對して同胞なる Kamil を援助せんことを請求せりと唱へて、前記兩侯の如くする能はざるを謝し、かくて直ちに埃及防禦の途に上れり。

Erbil 侯は自ら軍に將として出陣し、Dacouca に於てハリフハの派遣せる八百人の來會するに遭ひ、且間もなく更に大軍を供給す可しとの約束と往きて韃靼兵を攻撃せよとの命令に接せり。侯は乃ち人をハリフハの許に派して曰はしむらく、かかる少數の士卒にては進んで敵兵に向ふ能

はず、而も法皇若し臣をして一萬の騎兵に將たらしめば、波斯の地又一人の野蠻人をも止めざらしむ可きを信ずと。この證言をなししに係はらず毫も援兵の増派を得ず、而も亦攻撃をも受けざりき、蒙古兵はその Dacouca に於て軍隊を集注せんとするを知りて敢てこの方面に向て進軍せず、而して同地に駐屯せる回教徒の軍隊は更に援兵の來らんとするの模様なく、その兵力孤弱にして進んで敵兵に當るに足らざるを以て解除するに決せり。

この小軍は解散し而して蒙古兵はハマダンに前進し牙營を城市の視界に建て、命を同市に駐在せしめたる司令官に下して金銀布匹の貢賦を徵收せしめたり。ハマダンは既に前年を以て劫掠を脱がるるが爲に賦課されたる重税を納付せるを以て、住民中の有力者は蒙古兵と協商を結ぶの際談判のことに當りたる市長の許に至り、この新なる徵收に對して抗議を試みて、彼の外道等には既に財産を擧げて悉く之を交付し、且又司令官の爲に屈辱を受け之を忍ばざる可からざるが故に、最早這般野蠻人に與ふ可きものは一物もあるなしと云へり。市長は之に答へて曰く、『我等は殊に無力なるものを抑も如何せんとする、今日の策は唯我等の財産を犠牲に供するあるのみ』と。市民の有力者は乃ち市長の異端の徒に對するよりも却て市民に對して苛酷なるを非難し、その他種種の悪口雜言を列ねたり。市長は有力者等のかくの如く激昂せるを見て遂にその希望を擧げて敢て悉く之を實行せんとの旨を語れり。かくて蒙古人の司令官を市外に驅逐し防備の處置に出づ可

しとのことを決定せり。市民はこの決議の成るを知るや司令官を襲ひて之を殺戮せり。

この輕卒なる行動は單にハマダンの不幸を激成せるのみ、蒙古兵は之に包圍攻撃を加へたり。市民は首領として Fakih 即ち明法之頭を戴き開戦の初二日間開城突撃を試みて奮闘し、蒙古兵は爲に著しき損害を蒙りしが、第三日に至りこの高僧親ら馬に跨ること能はざりしを以て、市民は往きて Reis 即ち市長を求め衆に將として敵兵に向て進軍せんことを乞はんとせしに、市長は地下の隧道によりてその家族と共に避けて出奔せり。市民は市長の脱走を知りて大に狼狽し、死を決して防禦するの初一念は變ぜざりしも開城突撃の策は之を放棄せり。蒙古兵は多數の人命を損ぜしを以て將に退却せんとせしが、偶々開城突撃の中止せるより、これ被包圍軍の意氣沮喪せる爲なりと認め、強襲を試みて城内に闖入せり。住民は短劍を手に握りて巷戦を試みしも遂に敵する能はずして虐殺されたり。殺戮は數日間繼續し生命を全うせるものは地下に隠匿し得たるものあるのみ。市街は戦勝者によりて焼夷されたり。

蒙古兵は北方に歸りて往きて Erdébil を攻撃して之を占領して劫掠せり。次で蒙古兵は三度 Tébriz 城に逼れり。その進軍の報に接するや Euzbeg は Nakhchouvan に避難せしも、Tébriz 守備のことを委任されたる將校は巧みに市民の勇氣を鼓舞し、且防禦の手段至らざる處なかりしかば、その事情を偵知したる蒙古兵は新に金錢布匹の貢賦を要求せるに過ぎざりき。而

して之を受くるや轉じて Serab 市の攻撃に向ひて悉くこの住民を殺し、次で Arran 省内に位せる Baliecan をも亦その狂暴の犠牲に供せり。初め同市民の要求ありて蒙古人の一將校は之と協商を締結するが爲に同市に派遣されしに、市民之を殺害せしを以て蒙古兵乃ち城市を攻撃せり。^{二に據る}近郊の地に石なきを以て大楓樹を伐採して挽きて小片となし弩砲を以て之を投射せり。Assar-ul-Bilad かくて城市を襲撃し残忍極めざるなく悉く之が住民を屠れり(同曆六十八年九月西曆一二三二年一〇月)。婦人は之を強姦せる後虐殺し、妊娠せるものの腹部を剖きその胎兒の生命を奪へり。Baliecan の傍近を蹂躪せる後この野蠻人は Arran 省の首府 Gandia に近づきしも、その市民が絶えずグルジア人と干戈を交へ隨て極めて勇敢なるを知りしを以て敢てこの城市を攻撃せんとせず、金錢布匹の納付を逼りて之を獲るや進軍を繼續して再びグルジアに入れり。

グルジアの軍隊は王國の防禦に付きて準備する所あり。哲別は五千人を率ゐて埋伏しかくて速不台敵兵に向て進みその最初の突撃に遭ひて背進し之をして勢に乗じて追撃して以て伏に陥らしめたり。爲に三萬人強のこのグルジア軍は大半覆没せり。曩にグルジア王 George Lascha の姪せしより以來その同胞にして有名なる女王 Thamar の女なる女王 Rhouzoudan 王位にあり、元帥 Ivané 王國陸兵の指揮に當れり。倉皇新に軍隊を召集して蒙古兵の王國の中心に向て進軍するを阻止せんと試みしが、この軍隊は野蠻人の勇猛なるを聞きて恐怖措く能はず敢てその來る

を待たずしてチフリスに歸りグルジアの南部をその劫掠に委棄せり。Ibn-el-Ethir は當時 Mansour に
Mansour 侯の許に來りし大官の言にグルジアにては甚く難人を恐れて又之を破り得可きを思はずこの野蠻人は決して敗走せ
ず降参せず一日一人の難人を捕へしに馬上より巨岩に向て身を跳らしてその頭を碎きて死せりと。Kayrildas の Annales
Ecclesiastiques 一二二四年の條に、法皇ホノリウスに寄せたる女王 Rousoukna 一に Rhouzoulan の書と元帥 Ivané 即ちヨ
ハンの書とあり、これに據るに難人は十字架を先頭に立ててグルジアに來りしを以て人民はこれを基督教徒なりとし敢て抵
抗を試みざりしよりこの策略に欺かれて約六千人のグルジア人殺戮せざるを致せり。茲に於てグルジア人は兵を起
してこの野蠻人二萬五千人を殺しその多數を捕虜とし殘兵を國外に驅逐せりとあり。この文書は信じ難きが如し。

さりながら蒙古兵はこの險隘多き地方に於て交戦することを恐れ、鹵獲品を携へて之を棄てて
Schirvan の劫掠に向ひ同地方の首府なる Schamakhi を攻撃して之を襲取し之を奪掠せり。
次に Derbend 城市をも亦等しく陥れしが而も Schirvan 王 Raschid の避難せる内堡は之を
降すこと能はざりき。蒙古兵はカウカサス山脈を横斷して北方に赴かんと欲せしを以てこの峻嶺
を超ゆるに際し恃むに足る可きの嚮導を獲るに苦心せり。傳へ云ふ、蒙古兵は之を獲んとして先
づ Raschid 王に向て協商を締結するの權限を有せる使節を派遣し來らんことを促し、王の許よ
り同國內に於ける一流の人物十人の來着せるに及びその一人を殺し、他の九人に對して若しカウ
カサス山を超えて無事に軍隊を嚮導するの任務を盡さずんば同じく殺戮す可し、とて之を脅逼せ
りと。

この山脈通過に際し蒙古兵は Alans 一々 Aeses, Lezgus, Circasses 并に欽察人 Kiptchaes
の相連衡して之と戦はんとするに遭遇せり。兩軍接戦せしも勝敗決せずして交綏せり。茲に於て

蒙古兵は勝利を博するの手段として例の如く詐欺奸計を用ゐたり。乃ち欽察人に向て言はしむら
く『我等は卿等と等しく土耳其種に屬す、卿等は異種族と手を携へて同胞に對して戦はんとする
か。乞ふ和を講ぜん、我等は卿等が欲するが儘に多額の黄金と美服とを贈らん』と。この辯説と
その眼を炫耀せしめたる音物とに誘惑せられて欽察人はその同盟諸民族を棄てしかば、諸民族は
攻撃を受けて潰走せり。その住居せる地方と Terki 市とは野蠻人の狂暴なる劫掠に遭遇せり。
この間欽察人の軍隊は解散して三々伍々その郷里に歸れり。蒙古兵は之を追跡してこの個々分離
せる部隊を襲ひて欽察人の多數を殺戮し、且その離叛の報酬として曩に贈與せる財貨を克復せり。
二に據る。

欽察人は土耳其種の遊牧民族にして約二世紀以來先に Khazares に屬したる地方を占有せり。
その領土は廣漠たる平原より組成され、黒海カウカサス山脈裏海の北方に連互し多惱江口より
Jaik 河口に及べり。之に接壤せる國家と民族とを西より東に向て數ふればビザンチン帝國ハン
ガリー人露西亞人ブルガル人 Boulgares 并に康里人等なり。露西亞人はこれを Polovtsi と稱せ
り、これ平原の民てふ義なり、ハンガリー人并に羅馬人はこれを Coumans と呼ぶる。この名稱の今日 Couban
疑ふ可からず。土耳其語の方
言には m と b とを混淆せり。と呼べり、Coumans は今日なほ黒海の北アソフ海 Palus-Méotides の
東に位せる欽察人故國の一部なる Couban 地方にありて住す。
欽察部族十一氏の稱呼は彼の埃及支丹
Zasir の治世に際し同教紀元七二五年即

ち基督教元一三二五年を以て死せる埃及人にして Devadar 即ち大法官たりし Emir Beibars Rokn-ud-din の撰述に係る亞刺比亞文回教王朝史の大著 *Zohdet-ul-fikret*, fi *Tarikh-i-Hidjet* のうちにある。之と其の時を同うせる史家 *Novatin* の書には之を抄出せり。當時埃及マムルック兵の多數は奴隸として同地方に赴ける欽察人を以て組織されたり。十一氏の名稱は Toksaba, Yetu, Bourtji Ogli, Elberli, Cotingour Ogli, Anchogli, Dourout, Felana Ogli, Djezan, Cam-beurkli, Kehen じな。土耳其語に *Ogli* は子孫の義、*Cam-beurkli* は黒帽の義なり。

蒙古兵の意外にも入寇せりととの報に接するや欽察人は各方面よりその領土の極處を指して退却し肥沃なる牧地を擧げて敵軍に委棄せしかば、蒙古兵は乃ち同地方の中心に於て冬季の牙營を建てたり。ニに據 欽察人一萬戸は多惱河を渡りて羅馬帝國の領土に入りしを以つて皇帝 *Jean*

Ducas は之をその麾下に屬せり。この亡命者の一部はトラキア并にマケドニアに舍營して大に

古 蒙 史

同地方を殘害せり。他の一部は小亞細亞に移されたり。Scriber of Memoria Populorum, olim ad Danubium, Pontum Euxinum, etc., incolentium, e scriptis Nicophorus Gregorius 并に Georg. Acropolis 參看。 欽察人の多數は又露國の領土に避難しその常に劫掠を行ひて之に禍患を蒙らしめたるの國民に向て援助を請求せり。露國の疆域は當時東方にありてはヴォルガ江の支流オカ河岸に達せるに過ぎざりき。國內幾多の小邦に分割され之が君侯は何れも *Varége* 即ち *Rosse* なるルーリック *Rurik* の後裔にして、ルーリックは第九世紀に於てドニエプル河の東方并に北方に定住し、後に混じて露人と云へる總稱の下に包括さるるスラブ種の各民族をその配下に統一したり。ルーリックの後嗣は何れもこの王國をその諸子に分配せしが、曠てこの小侯國の内より大侯の爵號を稱する一君長を出せり。數世紀間キエフはこの君長の首府

たりしも一一六九年以來大侯はウラヂミイルに住せり。但しその配下の諸侯は之が政權に服従せんとせず、絶えず干戈に訴へて互に他の領土を蠶食するに汲々たりき、故にこの内訌に乗じてハンガリー人、波蘭人、リトワニア人、リヴォニア人、芬蘭人は西方并に北方に於て露國の國境を攻撃し、而して最も怖る可き敵人たる欽察人は數々南部露西亞に入寇を試みて蹂躪劫掠至らざるなく數千の捕虜をその曠野に移せり。

家族と家畜とを擧げてキエフの侯國に避難せる欽察人亡命者のうちに *Coutan* と呼べるその汗の一人あり、汗の女は *Galitsch* 侯 *Mestislaw* の許に嫁せり。*Coutan* はその女婿に贈るに多數の駱駝、馬、水牛并に奴隸の良好なるものを以てして援助を求め、來りて欽察人の領土を侵略せる韃靼人は露人に對するの攻撃を躊躇するものにあらずとの旨を辯明せり。*Mestislaw* は南部露西亞の諸侯をキエフに召集し、この會議に於て欽察人と進退を共にし相提携して以て韃靼人に當る可しと決議し、使節を *Souzdal* に派して大侯 *George* の助力を乞ひ、かくて諸侯は至急に軍隊を徵集するが爲離散せり。

キエフの *Mestislaw* スモレンスクの *Vladimir* の兩公 *Knies* 并に多數の小諸侯は敵兵と會戦せんが爲前進せり。ドニエプル河畔に至りしとき蒙古軍の兩將が欽察人との同盟を絶たしめんとして派遣せる使者の來るに遭へり。來意に曰く蒙古人は毫も露人に對して惡意を有せず、唯

その隣人たらんことを欲するのみ、露人たるもの須らくこの好機に乗じて彼の強賊と擇ぶなき民族の劫掠に對して復讐せざる可からず、その方法は單に蒙古人と同盟して之に當るにあるのみ、かくてその掠奪に歸したるものは之を蒙古人と分配するを得ん、特に宗教の上より見るに露人たるものは偶像信者たる欽察人との同盟を棄てて一神を崇敬する蒙古人との同盟を執らざる可からずと。露國の諸侯はこの奸猾なる提議を容れざるのみか、却て之を齎らせる十名の使節を殺戮してドニエプル河を渡れり。敵の前進哨の司令官は對岸に於て捕虜となり、欽察人に交付されて之が爲に殺害されたり。露西亞軍はドン河の附近を流るるカルカ Kalka 河に向て進軍し、蒙古兵が之を誘ひてその本國を遠からしめんとし、徐ろに退却せるよりその足跡を追ふて軍を行き、抵抗を受けずしてカルカ河を渡れり。然るにその全くカルカ河を渡るや蒙古兵は之と會戦するの準備を整へたり。Galitsch 侯は親ら必勝を確信しキエフ、Tchernigow 兩侯と共にこの戦勝の名譽を分つを欲せず豫め之に告げずして戦端を啓けり(一二二三年五月三十一日)、然るにその軍隊と之に援助を與へたる欽察兵とは痛く敗北して潰走せり。Galitsch 侯は辛うじて身を以て免れ且我が安固を圖るが爲に士卒の生命を犠牲に供しカルカ河畔の船舶を燒却せしめしを以て、露軍のうち退却し得たるものは十分の一に達せず、之を指揮せる六人の諸侯は戰死せり、加之、欽察人の殘忍なる敗走兵の乗馬を奪はんが爲に之を殺戮せるを以て露軍の不幸は益々その大を加へたり。

キエフ侯は河畔に近き丘上にその本營を据ゑ、營中に潜みてこの敗軍を目撃し、復郭修築の工程を開始せしが、蒙古軍はこの防禦の準備を完うするの光陰を之に與へず、その軍隊の一部は露軍の殘兵を追撃せしが之と同時に他の一部は來りて之を攻撃せり。勇敢に防戦すること三晝夜の後、蒙古軍の新部隊の來るを見るや又降服の外何事をも思はず、乃ち單に兩君侯并にその女婿を始として將士の生命を助け賠償を得て之に自由を與ふる事を約束せんことをのみ要求せり。蒙古の將軍は誓約を以てこれらの條件を承認せしも露人の降服するや悉く之を屠れり。三人の貴族は極めて殘忍なる方法を以て殺されたり、即ち之を横臥せしめたる上に板を列ね、而して蒙古兵は之に坐して宴を開き以てその戦勝を祝せり。

かくてこの野蠻人は露西亞に入りしが毫も抵抗に遭遇せざりき、Galitsch 侯はその侯國に歸り、ウラジミールの大侯 George が南部露西亞諸侯の請求に應じて之に派遣せる軍隊は途にしてその敗報に接して踵を返せり。蒙古兵の近くを見るや Sviatopol 及 Novogorod の住民は防禦を試むることなく手に十字架を携へて出でて之を迎へ以てその哀憐を乞ひしも悉く虐殺されたり、その數一萬人に上れり。蒙古兵は南部露西亞を火災と鮮血との修羅場と化せり。ドニエプル河畔より更に進んでアゾフ海沿岸の地方を蹂躪しクリミアに寇し繁榮なる Soudac 市を略取せり、同市はゼノア人の有に屬せしが貢賦を欽察人に納付し、當時黒海の北岸南岸に位せる諸國の間に

於ける通商市場の中心たりき。Michal Scherbakoff, Istoria Rossijskaja (露國史) 一七七年出版并に Karamsin, Istoria Gossudarstva Rossijskago (露帝國史) 一八一六年出版を參看せよ

この西方諸國を去るに當り蒙古兵は一二三三年(六二〇年)の終に於てブルガル人の領土に入寇を試みたり。この農業民族は思ふにその起源に於てはスラヴ種に屬するものなる可く、或は回教を信するあり或は基督教を奉ずるあり。當時上ヴォルガ江并にカマ河の灌漑せる地方に住しその水路によりて之に隣せる露西亞人并に裏海沿岸諸國と通商を營むの便宜を得たり。カラニジン露帝國史參看。

又欽察人の領土を経て波斯并に花刺子模に北方の産物就中毛皮、蜜蠟、蜂蜜を輸出せり。Ibn-Hi-Messalik ul-Memalik 并に Mas'oudi の Mounoudjuz-Zehab を參看せよ。 入寇の威嚇を受くるやブルガル人は争て武器を握り進んで敵兵と

古 蒙 史

會戰せしも、伏に陥りしが爲蒙古兵は之を包圍してその大多數を殺戮せり。成吉思汗の兩將はこの戰勝を以てその長途の遠征の大切となして途を Sacassin 地方 地理學者 El Brouy 撰 Telkhiss-al-Assar ve A'jrib ul Melik-il Cahhar の寫本は巴里王立文庫に藏せるがこの書には Sacassin は Khazres 領土の大都にして、同地は寒氣驟烈なり、住民は多く回教信者なり、屋背は覆ふに椽材を以てす、此地方にはチクリス河よりも大なる巨流あり各種の魚族繁殖す、その一種は脂肪に富み之を以て燈火の用に供す肉は廉價なり、この河は冬季氷結してその上を歩行す可し、その幅千四十歩あり、Sacassin は當今水中に没したりその遺址に近く同地方の帝王の首府たる Barca の Sarril 立つ云々と見ゆ、Sacassin の名稱は人をしてスキタイ種の Sakas を想起せしむ、この民族は是より十三世紀以前裏海の東方ヤクサルト河の南方に住ひ、數々南方諸國に入寇しバクトリアとアルメニアの肥沃なる地方とを奪ひかくてアルメニアに Sacassene と云へる名稱を興へたり (Strabon 參看) に取りて往きて宛かも波斯よりタルタリーに歸國中の君王の軍に加はれり。二に據る。編末の註第七を參看せよ。へには哲別速不台の遠征を敘せるの章に於てカウカサス山以北のことを説かず而してなほその精銳無双なるを記せり。

以下暫く蹂躪されたる波斯の記事に敘及せざるを以て茲に Irac-Adjem の荒廢に歸すること

第 一

となりたる次第に就きて一言せざるを得ず。Cazvin 城内に本營を建てし支丹謨罕默德父子が蒙古兵 Ravi を劫掠せりとの報に接して突然出奔せしとき、Irac を食封とせる皇子屋肯哀丁は ウケン Kerman に走れり。その軍旗の下に馳せ來りし同省の總督 Nouzen の軍隊を得て兵勢大に振ひ Kerman の首府に入り總督の寶庫を奪ひて之を士卒に分配せり。Kerman に滞在すること七箇月にして Irac に歸り同地方を横領せんとせる豪族 Djemal-ud-din Mohammed を攻撃せんとせしに、偶々その本營を置ける Ravi 附近にありて Faimass 并に Fainai 兩將指揮の下に蒙古軍の一枝隊近けりとの報を得たり。屋肯哀丁は馳せて Sutoun-Avend の城塞に籠れり、城は Ravi を距ること遠からざる斷崖絶壁の上に位し難攻不拔の評あり。蒙古兵はこの城塞を圍み六箇月の末に至りて雲梯を攀ちて之を陥れたり。屋肯哀丁は膝を屈して以て蒙古の汗に忠誠を表するを拒み家族と共に悉く殺戮されたり。屋肯哀丁の死去は一二二二年(六一九年)のことなる可きも正確にその年月を記ししものな。Cazvin の Zaccaria は地理書 Assur-ul-Bilad e Dunbavend の條に於てこれ一二二二年(六一八年)に Rokn-ud-din Gours-saidji の籠居せる城塞なりと云へり。チにはこの城塞は Firouzouh なりとあり。

Djemal-ud-din は花刺子模親王の最後を聞き蒙古軍に投誠して以てハマダン地方の統治權を保たんことを望めり。成吉思汗の將軍は封冊の證として之に禮服を贈り、且服従の誠實なるを示すが爲來り訪はんことを之に促せり。Djemal-ud-din 乃ちその兵營に赴きしに一行と共に悉く殺害されたり。ホ、へ、チに據る。

一二二四年(六二一年)の初に當り成吉思汗が撒馬爾罕地方にありて冬季を過せしとき、蒙古兵約三千人の一隊はホラサンより來りて突然 Ravi の城下に現はれ、同市の附近に舍營せる花刺子模兵六千人の一隊を襲ひて之を潰走せしめ、虐殺を免がれたる住民の再び來りて定住せる Ravi に入りて悉くこの薄倖の民を屠り、城内を劫掠して之が滅却の業を完うせり。次に Save も又 Coum 井に Caschan も亦同一の運命に遭へり、最後の二市は蒙古兵の初めて入寇せしときその行軍の途上に當らざりしを以て當時劫掠を受けざりしなり。ハマダンは初次の虐殺を避け得たるもの之に住ひしが二度猛火と刀劍とに委棄せられたり。この蒙古兵の一隊は同地より更に Azerbaïdjan に向くり、Ravi 附近に敗れたる花刺子模兵の同省に退却せるものは再び攻撃されて著しき損害を受けたり。その殘兵中 Tebriz に避難せるものありしを以て、蒙古兵はこの首府の附近に屯營し君侯 Euzbeg に命じて曰く、若し臣隸たらば須らく花刺子模兵を交付せざる可からず、交付する能はずんば敵國として待遇せんと。Euzbeg は敢てこの要求を拒むの勢なくこれら勇士の多數を殺害してその首を蒙古兵の許に送り爾餘の兵士は之れを生きながら交付せり。野蠻人はこの服従の處置に満足し且之と共に齎らせる夥しき貢賦を得て Tebriz を距りてホラサン省を指して東歸せり。二に曰く當時鞏固人は三千を超えず、而して花刺子模兵は之が倍數を有し Euzbeg の兵は兩者を合算せるものよりも大なりき而もかくの如し云々と。この第二回の入寇は Trac-Adjém の荒廢を完成せり。ホラサンは蹂躪されたり。但しトランスオクシアナは

蒙古兵の殘暴に苦みしことこの兩省の如く甚しからざりき。へに曰く成吉思汗の蹂躪せる地方は人口減じて今の僅に百人に満たずと又曰く今日人口の繁殖を妨ぐる事情存せざるにも拘はらずホラサン、イラクアジエム兩省の人口は蒙古兵征服以前の十分の一に達せずと。

されど波斯の不幸は未だ終局の點に達せるにあらず、更に新に劫掠に遭ひかくて長日月間野蠻的壓抑の下に呻吟し爲にその荒廢の状態より回復する能はざりき。

蒙古兵西亞蹂躪の擧は遠くビザンチン帝國にも亦恐慌を起さしめたり。皇帝 Jean Ducas は各地の城市に糧食兵器を備辦せしめたり。その臣民は道路の流言によりて鞏固兵の殘暴を極むるを聞き大に之を恐れて思へらくこの征服者は犬の頭を具へ人肉を食ふと。Pachymeres 第一冊并に Striter, Memorie populi

lorum, etc. 第一冊卷三

第九章

成吉思汗は斡耳朵 Ordous に還御ののち間もなく長子朮赤の計音に接せり。この親王は裏海并に黒海の北方に横はれる地方 チに據るは Ibir Sibir, Boulgarie, Kirghakie, Baschguirde, Russie, Circassie 等なり。 征服の命令に接せしも之に着手せんともせざりき。成吉思汗はその命令を遵奉せざるを怒り波斯よりタルタリーを指して進軍中幾度か之に書を與へて來會せんことを命ぜしが、朮赤は健康の不良なるを唱へて之を辭せり、而して事實病に惱めるなり。然るに成吉思汗が斡耳朵に歸れるとき朮赤の地方より來りし一蒙古人に同親王の近狀を諮ひしにその健全なるを明言し、且その出獵せるを目撃せりと言へり。成吉思汗は茲に於て又皇子が故意に服従を拒めることを疑はず、之を叛徒若くは狂人と見做し怒て往きて之を伐ちて義務を守らしめんと決心せり。窩闊台と察合台とは既に前衛と共に發程し、その父も亦次で進發せんとせしとき朮赤の計音を得たり。成吉思汗は爲に深く慟哭せり、その新に齎らせる情報に據るに曩に蒙古人の報告せし所は正確を缺き、その出獵せるを見たりと云ふは即ち朮赤部下の將校に過ぎざりしことを示せり、乃ち之を求めて罰せんとせしも遂に之を獲る能はざりき。

朮赤は齡三十有餘歳にして長逝し、その妻妾との間に約四十人 洪鈞曰く拉施特に四十人とあれど十四人も。 の子女を擧げたり。初め母孛兒帖 Bourte 朮赤を孕みし時偶々鐵木眞不在のことありて一隊の蔑兒乞人來りてその居に就きて之を掠めしことあり。汪罕蔑兒乞部の王に向て之を求めその夫の許に還るを得しめたり。歸途一男子を生みしを以て之に命名して朮赤 Djoutchi と云へり、蒙古語にて賓客の義なり。鐵木眞の命を受けて母后を迎へし使節は穀粉を捏ねて以て嬰兒を包み、母后著衣の裾に收めて騎上之を伴へり。 チに據る。 かくの如くにして生誕せる親王こそは數世紀間裏海并に黒海北方の大帝國に君臨し露國をもその外藩に數へたる帝王の遠祖なりしなれ。

成吉思汗が波斯を蹂躪せる當時將軍木訶里は支那北部征服のことに當れり蓋しその城市の多くは成吉思汗の退却後金人再び之を占領して防禦工事を施し、蒙古人は僅に中都と直隸山西の北方邊疆を留保せるに過ぎざりき。皇帝吾賭補はこの安寧を得たる短日月の間に於て輕率にも新に敵國を加へたり。河南の淮水以南に於ける南部支那の地は浙江の首府杭州に君臨せる支那の舊王朝宋帝の制令を奉ぜり。皇帝寧宗は蒙古兵と金兵との交戦を靜に傍觀せしが金の之が爲に孤弱の位地に陥れるに乗じてその之に納付す可き歳貢を廢せり、而して金に於ては新に敵國を加へんことを惧るるの餘りこの條約違反の擧に對して眼を閉ぢたり。加之、吾賭補は書を宋帝に與へて蒙古兵に對する同盟締結を提議せんと欲せしが、かくの如きの交渉は自國の無力を暴露するもの支那

は我が爲に一臂の勞を貸さずして却て我を攻撃するに至らんとて之を諫止するものありき。然るに成吉思汗の支那より退却するや、金の右丞相珠赫呼高琪は吾賭補に説きて歳貢の納付を怠りしことを以て開戦の理由となし、以て宋を攻撃して北方に於て受けたる損害を南方に於て償はんことを勧めたり。この建策に従ひて吾賭補は一二一七年に一軍を淮水の南方に派遣し、この軍隊は數城を降し宋帝國の領土各地を蹂躪せり。而も間もなく蒙古兵の再び来るや吾賭補は南隣の帝國と絶交せるを悔み、而して戦敗を受けたる宋人は喜んで媾和に應ずるならんと信じ大使を寧宗の許に派して之を提議せり。加之、蒙古人に對して之と攻守同盟を約し得可しと豫期せしも、希望に反して寧宗は敵國狼狽の事情を熟知し、協商締結に同意することを欲せざりき。

木訶里は蒙古人契丹人女真人を以て組織せる一軍團に將として一二一七年に支那に入れり。之と同時に蒙古兵の一隊は唐古特に侵入し父李安全の位を襲へる李遵瑱の首府に逼りて之を圍めり。この新王は西涼（甘肅省涼州府）に避難せり。木訶里は先づ直隸保定府下の遂城（遂州）に蠶州（蠶縣）を襲取し次に大名府を降せり（二月）。第一回の戦役はこれに了れり。一二一八年の年末に當り大名府を發して山西經略の途に上り同省の首府太原府を陥れしかば、金の元帥（埒爾錦）は勇敢に防禦を試みし後絶望して自ら縊れて死せり。平陽の守將（參政李革）も亦自殺し、汾州の守將（節度使完顔訛出虎）并に潞州の守將（元帥右監軍納哈塔富拉塔）は共に力戦して死せり。木訶里は同年

を以て山西の大城八箇を陥れ翌年遂にこの大省の征服を完うせしが、この間成吉思汗に降れる金將張柔は直隸を徇へたり。

金帝は是より先（原文に首府中都を去るに當りとあり今之を改む）

苗道潤

を以て中都經略使となし賈瑀を以て副使と爲せり。

この兩將は互に相軋し賈瑀遂に一二一八年に至りその同僚を暗殺せしめたり。苗道潤の友なる元帥右監軍張柔之が麾下に屬したる將校を煽動して復讐の師を起さしめ推されてその首領となれり。張柔中山（定州）に向て進み北京の西南約二十五リーグに位せる紫荆關の要塞より出で來れる蒙古兵の攻撃に遭へり。交戦中乗馬跌きて執へられ主帥明安の許に致されたり。何人たりとも一度蒙古兵の手に陥りたるものは成吉思汗に屈服せざる可からず、然らずんば甘んじて死刑を受けざる可からず。然るに張柔は蒙古の主將の前に於て膝を屈するを欲せず我も亦これ將軍なり、生命を完うするが爲に屈辱を受くる能はずと云へり。明安はその決心を賞して之を釋放せしも既にしてその往きて集合せる軍隊の將たらんとするを慮りて之を防ぐが爲その兩親を奪ひて中都に質とせり。張柔は久しく孝と忠とに就きて取捨に苦みしが遂に成吉思汗に忠誠を盡すの決心を定め河北都元帥の職を授けられたり、河北とは通例黄河以北の地方を指せどもここには單に直隸の南部を包括せるのみ。

張柔は直隸省内の未だ歸服せざる城市を征討す可しとの命令に接し、一二一九年五月南方に向

て進み幾多の都府を下し、道潤ミヤオクオチコンの爲に復讐せんと欲し、往きて賈瑀キヤノイの籠れる城塞(孔山臺)を圍めり、汲道を斷たれて賈瑀の降るやその心臓を剖きて以て道潤の靈に供せり。間もなく保定府に近き滿城マンチエンに於て直隸金軍の司令長官たる眞定經略使武仙ウイシエンに圍まれしが、首尾克くその兵を潰走せしめて之に多大の損害を與ふるを得たり。この戦勝に乗じて更に數城を奪ひ次で武仙の派遣し來れる兩枝隊を逐次に撃破せり。かくて直隸の各城は風を望んで城門を開き張柔の威名は河北に擴れり。

蒙

この頃高麗王國も亦成吉思汗に服従せり。初め契丹人にして金山元帥たる六哥 *Yokkou* と云ふもの蒙古の支配を脱がれんと欲して一二一八年に高麗に入り江東城キヤンソンチンを奪へり、蒙古の將軍哈只吉剌刺 *Khaidit-Tehala* 之を追ふて高麗に至り、高麗王の派遣せる軍隊の援を假りてこの城邑を克復せり。この蒙古兵入寇の結果として高麗は歸服しその君主王噉ウァンソンは翌年成吉思汗の臣隸と爲り歳貢として土宜を納付す可きを約せり。

古

史

木訶里は一二二〇年に山西より直隸の北部に轉じ、保定府附近の滿城に至りて部下の將蒙古不花 *Moungou-bouca* を分遣して武仙部下の一隊と戦はしめて之を破れり。この敗軍の結果として武仙投降し眞定府チンテイフを始としてその管轄に歸せる爾他の城市をも木訶里に交付せり。元帥木訶里は河北西路兵馬のことを權に漢人將軍史天倪シチニに委ね武仙を之が副と爲せり。

第

一

編

史天倪シチニは成吉思汗が初めて支那に入寇するとき夙に仕へて之が臣となれり。初め史天倪の父(史秉直) 郷里永清ユンチンにあり、蒙古兵がその抵抗せる州縣を猛火鮮血の衝と化し降服せる州縣に殘害を與へざるを見且政府に州縣を保護するの實力なきを知り、傍近の民數千を糾合して之を引率し一二一三年に北京の西南數リーグの地に位せる涿州チウチウに近き木訶里の牙營に至りて降を乞へり。木訶里は之に萬戶長の職を與へんと欲せしが、その之を拒絶するや乃ちその子史天倪を以てこの職に就かしめ(廿二史考異に當時史天倪は萬戶の職を授けられたるにあらずして石抹孛迭兒傳に見ゆるが如く千戶に、か權でられたるか或は張匡衡撰木華黎行錄に云へるが如く萬戶を統べたるに止まらんと考證しあり)、かくて史天倪は後に至りて蒙古人の爲に大功を建てたり。一二二〇年木訶里山西に轉戰の際史天倪は一日元帥に向て敢て直言してその部下兵士の既に征服せる地方を待つの方法野蠻なるを難じ、平定の業をして成功せしめんと欲せば之に反して服従せる人民を劫掠することなく以て未だ投降せざるの民心をして自ら歸嚮せしめざる可からずと説けり。木訶里はこの諫言の正當なるを認めざる能はず直ちに令を發して劫掠を禁じ俘虜を放還せしめたり。軍中肅然として規律行はれ人民の抵抗亦少きを致せり。

この年即ち一二二〇年の初金帝は南方に於ても亦北方に於けるが如く敗軍の不幸に會へるを怒り、この失體を以て珠赫呼高琪建言の罪に歸せり。この右丞相の殘忍なる所行に出づるや皇帝は遂に之を失はんとの決意を爲せり。即ち右丞相は奴隸をして妻を暗殺せしめ而してこの奴隸を殺

して以て口を緘せんとせしに、事露はれ死刑の宣告を受けて以てその罪を贖へり。次で宰相の首席に擧げられし將軍時青 *Suting* 〔譯者曰く時青は騰陽公に封ぜられ本處兵馬總領元帥兼宣撫使となる本文は原文の儘なり〕 は銳意して今なほ金人の所有に屬する州縣防禦の策を講ぜり。この間木訶里は山東にその兵を進めしがその東平に至るや彰德府を始として他に直隸南部、河南の黄河以北、并に山東に於ける七州縣の知事將軍嚴實 *Yan-shih* の歸降せるあり、乃ち之をして同地方に於て尙書省のことは行はしめたり。木訶里は進んで次に山東の首府濟南府を奪はんとせり。多數の軍隊は時に時青の注意によりて黄河の北岸曹州府に集まれり。濟南附近にありて木訶里を惱まさんとし一萬二千人の一隊は分遣せられたり。元帥は進んで會戦して之を破り、次で敵軍の大部隊に前進せしに恰もその黄河の北岸に戦列を布けるに會せり。木訶里は騎兵隊の矢戦を事として時機を失するを欲せず、之に命じて徒歩戦を試み手に劍を握て敵軍を攻撃せしめたり。金兵は第一撃を支ふる能はずして多くは溺死せり。この戦勝の後木訶里は東平に進みこの山東の城市を圍みしが、一箇月の末に至り嚴實を止めて長圍の策を執らしめ、親ら直隸の洛州(廣平府)に向ひ且その軍を小部隊に分ちて黄河北部各地に横行せしめたり。東平は糧食盡きて行省事の任にありし蒙古綱 *Mongourgan* の之を撤退せる後一二二一年の六月に至りて漸く降りたり。

木訶里は西北の方向を取りて支那北部を横斷せる後一二二一年十一月東勝州即ち今の托克托

城 *Tokuto-hota* に於て黄河を渡り突然唐古特に入れり。これ金人の制令を奉ずる陝西の一部を奪ひ、途を同省に取りて河南に入り以て南京を攻撃せんと欲せしが爲なり。唐古特王はこの軍隊の來れるを見て狼狽し、將軍塔海監府 *Taga* を今の鄂爾多斯地方に遣して禮を木訶里に致さしめたり。木訶里は士卒を要求せり。國王乃ち將軍塔哥甘普 *Dake Gampou* に命じて五萬人を率ゐて之に加はらしめたり。木訶里は葭州の城市に向て進みしに(二月)、金將は之を棄てて夙に遁れしを以て勝に乗じて綏德州内の兩寨を拔けり。唐古特の將軍迷僕 *Mipou* は王命を受けて更に兵を率ゐて來會せり。然るにその會見に先ち如何なる儀式を守る可きやを問ふや、木訶里は唐古特王の成吉思汗に對すると同一の禮を施す可しと要求せるを以て、迷僕は君王の命令なくんばこの要求に應ずる能はずと答へ、兵を率ゐて去りしも木訶里が延安を攻撃せるに際して歸りその要むるが儘に敬禮を盡して之に見へ且その馬の韁を執れり。

金の元帥哈達 *Khadada* 延安を守備せしが、蒙古兵の既に城下に逼るや大兵に將として城門を開き出でて之を襲へり。然るに戦利あらず七千人を失ひて再び城に入れり。木訶里は乃ち之を攻撃せしも(二月)、城壁堅く塹壕深くして容易に之を降す能はず、故に軍の一部を留めて之が包圍のことに當らしめ親ら南方に向て進軍を繼續し鄜州并に坊州を占領せり。木訶里は一二二二年を以て陝西爾餘州縣の大半を陥れ、將軍兀胡乃太不花 *Khounatai-Bouca* に託するにこの大省の

首府たる長安(西安府)の警備を命じ將軍按赤(按陳)Ankiをして潼關要塞監視の任務に當らしめたり。

南京の朝廷は一二二〇年八月を以て成吉思汗の大本營に向けて烏庫哩仲端 Ouscouna-Tchoung-touan と云へる大使を遣はし、その齎らせる文書に於て金の皇帝は蒙古の汗に向て媾和を求め、帝號は之を去らざる可きも蒙古の汗を長兄と認めんと提議せり。而もこの提議拒絶せられしかば、南京の朝廷は一二二二年の秋再びこの大使を當時なほ西域にありし成吉思汗の許に派して和を請へり。成吉思汗大使に向て曰く曩日朕は金帝に向て黄河以北の地方を割讓し河南を留保して王號を稱せんことを提議せしに帝は之に同意せざりき、今や木訶里既に前記の地方を征服し了るに金帝は前年と同一の條件を以て媾和を求むるかと大使の之を宥めんと努むるや成吉思汗は之に應じて曰く『可なり、卿の遠來を念ふて茲に朕の同意し得可き條件を説かん、河北の地方は既に我有に歸せるも陝西西部の數城は未だ下らず、卿の主君之を朕に割讓し河南を保留して王號を稱す可し』と。仲端はこの條件を得て歸りしが金の皇帝は之を容れざりき。

木訶里は山西に於て更に數城を下せる後一二二三年二月陝西の鳳翔府に逼りて之を圍み四十日間盛んに之を攻撃せり。然るに金の元帥都監侯孝順 Siao-schou が黄河東岸に近き要地河中府(蒲州府)を襲ふて之を取り、河東關陝行臺のことに任せし石天應 Sché-tian-ying 戦死せりと

の報に接するや、木訶里は直ちに鳳翔の圍を解きて河中に向て進みしかば金軍は倉皇火を之に放て撤退せり。乃ち石鞬可 Sché-tian-tsé に命じて代て父石天應の衆を領せしめて同市を去りしが、往くこと幾許ならずして重患に罹れり。その臨終の近けるを感じ弟帶孫 Taisoun に語て曰く『余が君侯の大計畫を輔けて戰役に從事すること四十年、而して曾て撃退されたることあるなし。この際余の唯一の遺憾は南京を陥ること能はざるにあり、努力して之を降せ』と。木訶里は一二二三年四月齡五十四歳にして解州の聞喜縣に於て逝けり。その子孛魯 Borou 國王の爵を襲ひて支那占領地方の司令長官となれり。

皇帝吾賭補は齡六十一歳治世十一年にして一二二三年十一月を以て殂し〔金主珣殂落の時日に付き元(史(一〇月)金史(一二月)の間)に相違あり〕、養子寧甲速 Ninkiasou 帝位を嗣げり、その支那名は守緒 Scheou-sioui と云ふ。新帝は宋帝に向て平和を提議して干戈を戢めたり。寧宗も亦この年を以て殂し養子理宗帝位に陞れり

宋の將軍彭義斌山東の大部分を征服せるより將軍武仙は之と同盟を結びその聲援を恃みて一二二五年三月同僚都元帥史天倪を殺し次で眞定府を奪へり、史天倪の弟史天澤 Sché-tian-tzé は直ちに國王孛魯より河北西路都元帥に任ぜられ武仙を攻撃し、之を破りて眞定府を克復せしかば(四月)、武仙は西山に退却せり。

蒙古人の爲に直隸の中チュンシヤン山チンヂユ(定州)を守備せる支那人李全 Li-tsuian も亦降服して彭義斌の軍に投ぜり。彭義斌は李全の降兵を納れて兵勢大に振ひしかば進んで東平ツンピンを圍めり(四月)、嚴實なほ之に將たりしが四箇月の終に至り糧食缺乏して又之を支ふる能はず、蒙古に叛きて逃て彭義斌の軍に合せり(八月)。かくてこの諸軍は相合して眞定府チンテイフに向て進軍し西山附近に於て蒙古將李里海 Belke の軍に遭遇せり。嚴實は彭義斌の已を信ぜざるを見て平ならず私に之を去るの機會を待てり。故にこの際逃て蒙古軍に投じ之と共に彭義斌を攻撃せしに、宛も史天澤シチエンチエも亦背後より之を襲ひ遂にその軍を破りて之を虜となせり。而もその蒙古汗に忠誠を誓ふ可しとて勸誘さるるや彭義斌は厲聲答へて曰く我は大宋帝國の臣なり豈に他の臣屬とならんやと。遂に慘刑を受けて之に死せり。かくて嚴實は容易に彭義斌の經略せる山東の清河チンチ以東をして蒙古の制令を奉ぜしめたり。

李全は山東北部に據り蒙古兵と數々戦ひしが常に利あらず遂に益都イッ(青州府)に籠りて郡王リチチヤン孫スンに圍まれたり(廿二史考異に一二二五年に中山を以て元に叛ける李全と一二二〇年に叛きて後に青州に據れる李全とは同名異人なりとあり)。包圍を受くること一年糧食全く盡きて人肉を食するの極に至るまで能く支へしも遂に一二二七年六月を以て降れり。帶孫は李全をして山東と江蘇の淮南ホウナンとに於て省事を行はしめ以て歲貢納付の任に當らしめたり。北部支那は五年間の戦役によりて荒廢に歸せり。金軍は全然之を撤兵してその兵力を黄河の南

岸に集注し、且つ陝西より河南に至るの軍道に當れる潼關ツウクワンの城塞隘路を防禦せり。この防禦線全部は約二十萬の士卒を以て之を守り四行省を立てて之を統帥せしめたり。金帝は又一二二七年に當時唐古特の經略に従事せる成吉思汗の許に大使を派遣せり。以下この戦勝帝王の最後の殘忍なる事蹟に就きて敘する所あらん。

成吉思汗は一二二五年の年末にその鞞耳朶を出發して唐古特攻撃の途に上れり。當時の唐古特王は二年前父李遵頊リチユンキツの位を嗣げる李德旺リチテイワンなりしが成吉思汗の之に對する開戦の理由は仇敵の一人なる赤臘喇翔昆(赤蘭喝翔昆) Schilgak-san-hona を納れて臣とせることと王子を質とするを拒めることとこれなり。成吉思汗は皇子察合台をして監視軍に將として留守に任せしめ一二二六年二月この王國に入寇せり。窩闊台、拖雷は軍に従へり。成吉思汗は翌月 Yetsina 黒水城 Ho-schoui-tchin を始として幾多の城壁を占領し、渾垂 Khoun-tchou 山脈に於て大暑の時季を過せる後甘州カンチウ并に肅州スウチウを奪へり。秋に至りて涼州府内リウチウフの擱羅 Tcholo 并に河羅 Khola を取り沙陀 Schaton を踰えて黄河の九渡 Kiyou-tou に達し應里 Yar その他の第二流の城邑を降せり。ハに據這般の地方は悉く猛火鮮血の巷と化せり。綱目の記者は曰く『その民土石を穿鑿して以て鋒鏑を避けしも免れしものは百に一二すらく白骨野を蔽へり』と。成吉思汗はこの遠征を企てし時支那占領地の市場に於て一石の米をも將た一匹の布をも發見せざりしより大に之に驚けり。

部下の將校は成吉思汗に説きて曰く、支那の臣民は無用の長物なり悉くその住民を屠殺し盡して土地を牧場と爲し以て之を利用するの優れるに若かずと。耶律楚材はこの野蠻なる建議に反對して絶叫し、肥沃なる邦土と勤勉なる人民とより受け得可き利益を擧げ、若し土地に程よき租税を課し商品の關稅を收め酒、酢、鹽、鐵その他山川の土宜より貢賦を出さしめば、毎年凡そ銀五十萬オンス、絹布八萬匹、穀物四十萬苞を徵收し得可しと論じ、この人民を以て無用の長物となすを怪めり。成吉思汗は乃ち之に公平なる課稅法の制定を囑託せしが耶律楚材の財政計畫は次の治世に至りて實施されたり。

古 蒙 史

支那の歴史に據れば蒙古の諸將が虐殺されたる唐古特人の幼兒財産を掠むることに狂奔せる際耶律楚材は支那の遺書數部と大黃の藥材兩駝とを取りて敢てその餘を貪らず、既にして疾病蒙古軍を襲ふやこの大黃を以て數千の人命を救へりと云ふ。ハに據る。〔丙戌（一二二六）冬十一月。耶律文正書籍數部大黃兩駝而已。既而軍中病疫。惟得大黃二可愈所活幾萬人。〕（解類錄第三卷）王、從太祖下靈武。諸將爭掠子女玉帛。王獨取。

成吉思汗は唐古特の首府寧夏府の南方少距離にして黄河の東岸に位せる靈州を圍めり（二月）、國王李德旺は此年八月を以て殂し李睨王位を襲へり。唐古特の一軍は嵬名令公 Vel-min の指揮を受けて靈州の援兵として派遣されたり。成吉思汗は再び黄河を渡りて之を潰走せしめ靈州を陥れて之を劫掠し次で鹽州川の河畔に至りて陣せり。ハに據る。ロには唐古特兵三萬擧殺せりとあり。チには蒙古兵は幾多の城市を降しし後進んで朱兒渡談 Deltan 。

Krai (靈州) を劫掠せんとせしに唐古特王 (國人之を失都兒忽 Schidoucou と稱し支那人之を李王 Li-wang と呼ぶ) その首府 Ircai 即ち蒙古人の額里合牙 Irkya を出で五十營 koumans 即ち五十萬の兵に將として進軍せり。成吉思汗は直に之に向て進み Caranouran 即ち黄河河畔の平原に至りて激戦を試みたりこの平原には河水の氾濫に成り當時既に氷結せる幾多の湖水ありて點在せり。唐古特兵の戰場に作るもの三十萬人、その首を失はざるは僅かに三人に過ぎざりき、蓋し蒙古人は十營の戦死者に就きて一人の完全なる屍體を遺せしなりと Vincent の Miroir historique にこの波斯の史家の記事を證す可き節あり、曰く鞏韌兵は敵國の民を屠れる後屍體を計算するが爲千人毎に一個の屍體を高地に倒置しその首を下にしてその足を上にして目標となすの習慣を有せしが一二二年チフリスの劫掠に際しては右の目標となせる屍體七個ありしを以て即ち七千人を虐殺せることを示せりと。

成吉思汗は唐古特首都の城外に一部隊を駐め一二二七年二月を以て黄河を渡り、積石州を下し臨洮府を劫掠し（三月）、同地より西北に向て轉じ、洮河州 Tchao-ho-tcheou 并に西寧を滅却せり（四月）。之と同時に成吉思汗の弟斡赤斤諸延は信都府 Sin-tou-fou に向て分遣され、強襲によりて同市を陥れたり。ハに據る。

第 一 編

成吉思汗は平涼府の西に位せる龍德に近くその大本營を定め（五月）、その軍隊は德順州以下の數城を拔けり（六月）。次で大使として唐慶 Thang-tsin を南京の朝廷に派遣し、成吉思汗は大暑の時季を過ぎが爲に六盤山附近にその兵を進めたり。ハに據る。ロには六盤山は固原州の西二十清里（二リ）には固原州の西南七十清里平涼府内にありと見ゆ。チに曰く六盤山は女眞 Nanguns (宋) 唐古特三國交界の地にありと。前年親王窩闊台は將軍察罕 Tchagan の部隊と共に南京を圍み將軍唐慶 Tang-tsing をこの帝都に派して歲幣を金帝に要求せり。一二二七年察罕は西安府内の數城を占領し深く鳳翔府并に漢中府に入れり。金帝の派遣せる兩大使完顔合周 Quanyen-Khatchao と奥屯阿虎 Otoung-Agué とは媾和の提議を六盤山に齎らせり。ハに據る。

金帝の贈れる音物のうちに珠玉を盛れる盤ありしかば成吉思汗は耳璫を帯びたる麾下の將校に之を分配し、或は之を飾るが爲に新に耳朶を穿たしめ、その珠玉のなほ餘れるものは地上に擲ちて人の争て取るに任せたり。ハに據る

成吉思汗はこの舍營地に於て遼東新王の朝貢を受けたり。曩に成吉思汗の臣隸となりし耶律留哥チリキリコは一二二〇年を以て死し、その寡婦姚里氏ヤウリシ Yaoliese は爾來成吉思汗の不在中假に東部タルタリーの主權を委託されたるその弟帖木哥テムク 赤斤チキンの允准を経て攝政の事を行ひしが、蒙古皇帝の波斯より歸るや三子を携へて之が幹耳朶に入觀せり。姚里氏は成吉思汗に謁見するや儀式に従ひてその膝を屈せり。成吉思汗は之に杯を下賜し且之を優遇せり。女主は遼東の地主なく而して長子薛闌 Hivese が數年以來蒙古汗旗の下を去らずして西域にあるを述べ、之を歸國せしめて父の王位を襲はしめ、第二子善哥 Chancon を質とせんことを請へり。成吉思汗は大に薛闌の功績を讚へそのトランスオクシアナに於て現はせる武功を説き、更に語を添へてかかる良將校を失ふを欲せざれば須らく善哥をして父の位を襲はしめざる可からずと云へり。女主答へて曰く『薛闌は臣の生めるにあらざるも長子なり善哥は臣の實子なり、若し夫れ君命に従ひて之をして王位を相續せしめば、或は恐る長子のその權利の臣が母たるの慈愛によりて毀損されたりとの感を起さんことを』と。成吉思汗はその旨意の公平なるに感じ、姚里氏の深慮あるを賞し耶律薛闌を遼東

王に任命せり。女主の訣別して去るや成吉思汗は之に支那人の捕虜九人、駿馬九頭、銀塊九個、絹布九匹并に寶玉九顆を贈れり。蓋し九の數は蒙古人の神聖なりとして貴べる所なり。

薛闌は成吉思汗の唐古特出陣中その許に來れり、蒙古皇帝は之にその父を保護して金軍に抵抗せる往事を説き、更に語を添へて曰く『卿の父は忠誠を表するの質として卿を朕に送れり、朕は卿の父に對すること常に弟に對するが如くし且朕は實子の如く卿を愛す。朕が兄別勒格台と共に朕の軍隊を指揮し共に親密に協同して事に當れ』と。薛闌が別を告げて我が王國に歸らんとするや、成吉思汗は之を止めて唐古特首府占領の役に與るの快樂を之に與へたり。ハ、イに據る

寧夏は全く窮境に陥りしを以て國王李睨は七月中使節を成吉思汗の許に遣して降を請ひ、單に首府交付に先ちて一箇月の猶豫を乞へり。蒙古の皇帝は之を承諾し且將來我が子の如く之を待遇せんことを約束せり。次で帝はその大本營を秦州の東方約十二リーグなる西江江畔の清水縣に移し、ハに據る。元史には成吉思汗は Saii Koi この地にありて重患に罹れり。前年三月益昏塔朗呼圖克に近き Caronski の營に崩すとあり。 Ongon-talan-coudouk 蒙古語にて Ongon 曠野の清泉の義なり思ふに陝西即ち唐古特の北境に近く連互せる陰山 Ongon 附近の地ならん。 と稱する地に駐營せると

き、夢にその臨終の近けるを得せるより各々その軍隊を率ゐて五六リーグを距りて滯陣せる皇子窩闊台拖雷を招けり。朝餐のちその帳幕に群れる將校に向て暫く席を去る可きを命じ、殊に兩皇子を傍に召して之に幾多の訓諭を與へしが終りに臨んで曰く『兒等よ、朕が事業は終局に近

けり。朕が神助を得て征服せるの帝國は廣大にしてその中心よりその極端に至るの行程正に一年を要す可し。卿等之を保たんことを思はば互に相争ふなかれ、敵國に對しては協力して之に當れ、友國の爲に盡すに際しては相和合せよ。卿等のうち一人須らく帝位に即かざる可からず。窩闊台それ朕が繼嗣たれ。朕が死後この選擇を尊重し且今この席にあらざる察合台をして紛擾を生ぜしむる勿れ』と。チヘに據る。成吉思汗の病に罹れるとき皇子のうちその傍にありしは惟り拖雷のみなりき。その臨終の病床に於て重なる將校に對し深く南京に向て進むに當り取る可きの方略を述べて曰く『金の精兵は潼關ツンクワンにありて南は連山に據り北は大河を限るを以て遽に破り難し。若し道を宋に假らば宋は金の世讐なるより必ず能く我に許さん。則ち兵を河南の南部なる唐州タウシュ并に鄧州トウシュに下し直ちに大梁を擣かば金急に必ず兵を潼關に徵さん、然れども數萬の衆を以て千里赴援せば人馬疲弊し至ると雖も戰ふ能はず之を破らんこと必せり矣』と。ヘに據る。成吉思汗は之と同時に若し瞑目せば深く警戒して喪を秘す可きことと、唐古特王若し約束の期限に至りて首府より出で來らば之を殺害し、次で寧夏の住民を悉く虐殺す可きこととを諸將に遺命せり。この遺命は忠實に實行されしが成吉思汗は實に病床にあること一週日ののちヘチに據る。一二二七年八月十八日を以て殂せり、時に年六十六、その治世の第二十二年に當れり。ハに據る。元史には唐古特王の最後に就て敘せざるも綱目には李昉は降參の後捕虜として蒙古に送られたりとあり。著者又曰く太古より以來蒙古人の如く勇猛なるものあるなし、その帝國を仆す木を抜くが如しと。

成吉思汗の遺骸は秘密に之を蒙古に移せり。その計報の傳播を妨ぐが爲に、柩を奉じて北歸せる軍隊は長途到る處に於て遭遇せるの民を悉く殺害せり。この一行の克魯倫河源ケルンに近き成吉思汗の故土なる大斡耳朵に達するに及びて始めて喪を公にせり。蒙古大帝の遺骸は順次に之を重なる后妃の斡耳朵に安置せり、親王公主并に諸將は拖雷の邀請によりてこの大帝國の各地より争て之に赴き、柩の前に伏して慟哭し以てその最後の尊敬を表せり。その最も遠隔せる地方より來れるものは三箇月の末に至りて漸く來着せりと云ふ。この葬儀了りて後遺骸は斡難、克魯倫、土拉三河の發源せる不兒罕哈勒敦山脈中の一峯に埋められたり。曾て一日同地方に狩獵を試みしとき成吉思汗は孤立せる大樹の樹蔭に休息し暫し心所よく空想を逞うせし後起ちて左右に向てここに埋葬されんことを欲すと語れり。皇子同族諸王等この逸事を聞知せしを以て乃ちその地に葬る可しと命ぜり。その後間もなく附近の地樹木叢生して密林と化し又成吉思汗の何れの樹下に眠れるやを辨識するものなきに至れり。子孫も亦この森林に埋葬されしもの多く爲に久しく千人の烏梁海人 Ouriangutes をして之が警備に當らしめこの勢に報いるが爲その兵役を免ぜり。この地に建てられたる諸帝王の墓前には香火絶えず薫りたり、されど何人も之に近くを得ず、成吉思汗殂してより百年の後までなほ能く保存されたるその四大斡耳朵と等しく神聖視されたり。チに據る。Marco Polo には Chinghis 以下の諸汗は Achi 山に葬られたりとあり、且曰く大汗の遺骸をその地に送るや途上遭遇せるものを悉く殺害せしがこれ世界にありて之をして主君に仕へしむるを得可しと信ぜしが爲にして馬匹をもかく信じて虐殺せり、一二五九年

に死せる大汗 Mongu の送葬に際してはかくの如くにして二萬人以上を殺せりと云ふとあり。又マルコ・ポロは和林を發し北
 方に向て Achaï 山を越ゆる時は Burgu の野に至るその距離四十日程なりとあり。扱 Burgutes の地方即ち Burgutchin は
 バイカル湖東にあるを以て Achaï 山は Orkhon 河に近き和林の東北に當る。Cabil はその當時のことを敘して成吉思汗家
 の蒙古王は Han 山をその埋骨の地となす北緯四十七度五十四分北京西經九度三分に位すとあり。今 D'Anville の地圖に就き
 てその地を檢するに幹難河の水源なる Keney-hu 山あり之を綜合するに成吉思汗以下の幹難克魯倫兩河の水源に近く埋めら
 れしこと信ず可きに似たり。Jean de Mandeville の旅行記三十九章に大汗葬儀の記事あり、屍體を天幕内に安置して生けるが
 如く之に供養することその水眼を攪きざらんが爲之に就きて口を開かざること等を敘す。Hyacinthe の蒙古誌には契
 丹の太祖阿保機の死せしときその寡婦述律 Schourou の數百の臣下を殺して他界に伴はしめんとせしことを記す。

第十章

成吉思汗は諸皇子に廣漠たる大帝國を傳へしがその大部分は不毛未墾の地にして遊牧民族之に
 住し、爾餘の部分は其の兵禍を受けて住民を失へり。その將士は亞細亞の鹵獲品に飽き成吉思汗
 あるが爲に親ら他の民族を凌駕し、且その地上の帝王を蔑視して顧みざるを見て之を見ること恰
 も神に於けるが如くなりき。成吉思汗以前にありては韃靼種族中蒙古人の如く悲惨なるはなかり
 き、即ち蒙古人はその家畜と共にタルタリーの最高地にありて最も不良なる天候の下に漂泊せり。
 その窮乏の一證として傳へ云ふ、鐵鎧を有するものは僅に王侯ありしのみと。へに據この野蠻に
 近き遊牧民族中に於ける一二小部族の部長たりし成吉思汗は多年逆境に立ちて奮闘せし後、遂に
 成功を以てその大望を貫徹するを得たり。先づその曾て臣禮を執りたるの王侯に對して戰勝を收
 め、次で戰敗者の部下を旗下に糾合して以て次第に爾餘の韃靼種族を統一し、更に之を支那に波
 斯に引率して這般の繁榮せる帝國をその劫掠に任せたり。成吉思汗の征服せる處は渺茫として涯
 際なく之を君侯として戴けるの民族は一百に及べり。その得意の際に於ける空想に於ては世界を
 征服せんことを欲し、自ら僭して上帝より帝國を贈られたりと稱し、經略の半途にして不歸の客

となりしを以て、皇子に遺言するにその偉大なる計畫を完うせんことを以てせり。

成吉思汗の戦勝の功を収めたるは意志の強固なると、才幹の非凡なると、而して無遠慮にあらゆる手段を採用せしとにより、奸策詭計は常にその作戦に便宜を與へたり。その破壊的行動は宛も至大なる天然の崇なるが如く、少くも人心に畏懼の念を起さしめ攻撃を受けたる人民をして自ら防禦するの勇氣を失はしめたり。人道を無視せしことかくの如きの征服者は古來曾てあるなし、又この豪傑の引率せる軍隊の如くその計畫を實行せしむるに適したるもの古來曾てあるなし。

その軍隊を組織せるものは居常軍人の生活を營み、親らその籠を携へ家畜乗馬にして牧場を得んか到的處に糧食を得るの遊牧民族なるを以て戦鬪の技術に於て行軍の神速なるに於て成吉思汗の採用せる軍紀の嚴肅なるに於て、爾餘民族の軍隊に卓越せり。タルタリーの諸民族にありては武器を携帯し得可き男子は悉く軍人となり、而して各民族は之を十人宛の小隊に分ちこの十人のうち就きて一人を選びて他の九人を指揮せしめたり。九人の什長は百戸の命を奉ぜり、尤も百戸にはその直隸せる小隊あり、而して九人の百戸は千戸に屬し九人の千戸は萬戸に屬せり。皇帝の命令は傳令使によりてこの上長官に傳へられ次第に傳達されて以て什長に至る。各民族はその指定されたるの地を占領せり。遠征に際して兵員を要するときは十人の小隊に就きて一人若くは數人を簡拔せり。將校に對し他の部隊に屬する兵士は一人たりとも之を我が部隊に收容するを嚴禁

し、皇族と雖も上官に背きてその營を去りたるものは之を麾下に屬せしむるを得ず、これ全く服従の關係を鞏固ならしむるの精神に出でたり。長官に對するの服従は無限にして、成吉思汗の望む所に據れば將軍若し罪を犯さば君主は之を罰するが爲に單に臣下のうちにありて最も微賤なるものを之に派遣す可く、その將軍極めて遠隔の地にあり且十萬人に將たりとも尊敬してこの一介の勅使の齎らせる命令に服従し、杖刑を受くるに際しては地上に臥し、死刑を宣告せられたる時は首を交付せざる可からず。Alai-ud-din は回教諸國に於ける將軍に敍及して語を添へて曰く『これ甚しく吾人が他の地方に於て目睹せる所と異なれり、他の地方にありては黄金もて購はれたるの奴隸その既に十頭の馬匹を私有せんか、之が主人たる王侯は復たこれに對して粗暴なる言語を用ゐず、その軍隊の指揮を之に委ぬるや殊に敬語を以て之に接せり。一身の技能と富力とによりて權勢を得たるの將軍はその恩主に對して兵を擧げて反抗せざること稀なり、將軍の戰爭に出陣し敵兵を攻撃し若しくは之を撃退するの必要あるに際しては常に必ずその軍隊をして準備を整へしむるが爲に全く數箇月を之に費さざる可からず。且平時にありては規定の兵員以上に戰鬥員を備ふる時は之が俸給を特別に請求し、而して閱兵式の時は互に部下の士卒を貸與して以て之を充實し、かくして一時の急を濟ふの常なりき』と。へに據る。

之に反して韃靼人の間にありては軍人は俸給を受けざるのみか、年々君主に對して一定の馬匹

家畜毛氈等を納付せり。その出陣せる時に於ても公租を免かるを得ず、その妻若しくはその故郷に留まれるものは之に代りてその負擔に歸する賦役の義務を盡さざる可からず。へに據る成吉思汗曰く『男子は太陽の到る處を照すが如くなる能はず。故に人の婦たるものは夫の出征せるとき若しくは出獵せるときは、能く家政を整へ、帝王の使節若しくは行旅のその家に入る者あらばその整理せるに感ぜしめ且美酒佳肴を具へて饗應を受けしめざる可からず、これ夫の榮譽たらん、その婦の行によりて男子の人物如何を知るを得ん』と。

成吉思汗は軍隊の常に戦闘準備を整へ命令一度降るときは直ちに馬に跨りて出陣せんことを諸將に望めり。曾て能く十人を統率する者は之をして千人に將たらしむ可しと云ひしが、更に附言して曰く『十人の長にして若しその小隊を指揮する能はずんばその妻子を擧げて悉く死刑に處し、更にその十人隊に就きて之が長を選拔せん。百戸千戸萬戸に對する又之に同じ』と。又將校に訓令を下して年の初毎に參觀して命令を受け諭告を聽かしめたり。曰く『朕の許に來りて教令を受けずして依然としてその兵營に止まるものは、深潭に落つるの石、若しくは蘆葦に入るの矢とそその運命を等うして之が所在を失せん、かかる人物は士卒に長たるの資格なし』と。成吉思汗は將校の孜々としてその諸子をして乗馬弓術鬪争の技を練習せしめ、以て之をしてその運命を勇猛心に繋ぐの希望を抱かしむること、恰も商賈が之を錦欄を始としてその賣買せる貴重なる商品に繋

ぐが如くなる可きことを欲せり。

又諸臣を任用するに當り常にその才幹に従ひて取捨せるの事情を述べて曰く『朕は聰慧にして且大膽なるものに軍隊指揮の權を與へ、活潑にして敏捷なる者には輜重の管理を委ね、魯鈍なるものには手に鞭を携へて往きて家畜を牧せしめたり。この注意と秩序規律の整頓とによりて始めて朕の權勢は宛も新月の如く日々にその大を加へ、且朕は天祐を得て世界の敬重を博し降服を贏ち得たるなれ。朕の子孫、朕の政權を繼承するに當り能くこの規範を遵守せば、五百年千年一萬年の後まで等しく天祐に浴するを得ん。上帝は之に恩寵を下さん、臣民は之を崇敬せん、かくて長日月の間あらゆる地上の幸福を享有するを得ん』と。チに據る

成吉思汗は子孫に遺言して遠征を企つるに先ち必らずその軍隊を檢閲し且士卒の携帶せる兵器を點檢せしめたり。弓矢と斧との外に兵士は規定に従ひて各々矢を磨くに用ゐるの鏢、篩、錐、針、并に糸を携帶せざる可からず。以上の携帶品中その一を缺けるの兵に對しては罰則あり。更に武裝の整へる者は稍屈曲せる刀劍を帶びその頭部と身體とを護るに革製の甲冑を以てしその甲は鐵板をもて之を覆へり。成吉思汗は戰鬥を行ふの方法、降服せる人民征服せる邦土に對するの政策に就きて訓戒を遺したり。へに據るその條文は毫も今日に傳はらず、唯當代作家の書に於て一二の抄録を發見するのみ、されど歐亞の各國に於ける蒙古人戰勝の歴史と、第十三世紀に於ける

歐洲旅行家の記事とに照すときはその戦術の主要なる特色を認むるを得可し。

一國を攻撃するに先ち成吉思汗はその帝王に降服を促せり、勸降の書は直截にして之を結ぶに左の數語を以てせり、曰く卿若し降服せずんばその結果果して如何、之を知るは上帝あるのみと。

〔へに據る〕 蒙古の臣隸となる時は王侯は之に質を交付し、臣民の人口を報告し、各省に蒙古の總督を仰ぎ、莫大の貢賦を納付す可きことを約せざる可からず、貢賦は通例國內生産物の十分の一より成り、且この野蠻人は人民をも亦家畜と同一視せしより男女を併せて進貢せり。故に穩かに服従せる人民の運命も亦敢て征服されたる邦土の民に比して幸福なるにあらず、唯その隠約の間に於て次第に滅亡の域に瀕するを以て相違となすのみ、蒙古の司令官は專權を揮ひ誅求飽くなくその一舉一動悉く野蠻的弊政の痕跡を示さざるなかりき。

蒙古兵の遠征を試むるや必ず之に先ちて皇族諸將を召集して總會議即ち *Courtial* を開き、軍隊編制に關する諸般の細目を規定し十人組に就きて何人宛を徵發して進軍せしむ可きか何時何處に軍隊を集屯せしむ可きか等を決議せり。成吉思汗は敵國の内情に通曉するにあらざれば入寇を試みず、之を偵知するが爲には注意に注意を加へ、その不平家を誘惑するに或は同胞を劫掠するの利益を以てし或は要職に任用するの約束を以てし之をして内應して報告を致さしめたり。蒙古兵は同時に各方面よりその侵略せんと欲する邦土に入寇し枝隊を分遣して村落の人民を屠殺せ

しめ、その助命せる少數の捕虜は唯、兵營にありて必要な作業に従事し得可きものと城池を攻撃するに際し先頭に立たしめ得可きものとあるのみ。一省を蹂躪するに當りては監視隊を城堡要塞附近に駐屯して以てその守兵を牽制せり。大都城の容易に之を陥落し難しと認められたるものを攻撃せんとするや先づ郭外の地方を悉く劫掠し盡し、次で之に包圍を加ふるや守兵を誘ひて伏に陥れ以て之に多大の損害を與へんとせり、即ち小部隊をして城壁の下に逼りて横行掠奪を試みしむる時は、城内の將士市民中その最も勇敢なるものは常に必ず開城して之を追撃せんとし、遂にその銳氣の犠牲とならざるもの蓋し稀なり。蒙古兵は對壘を築きて包圍されたる城邑を圍み、數千の捕虜を壘壁の前面に驅り最も困難なる作業、最も危険なる戦闘に従事せしめ、日毎に城内に向て或は甘言を以て之を誘惑し或は威嚇を以て之を脅逼するも被攻撃者の之を拒絶するあらば、乃ち塹壕填充の作業終り砲臺の弩砲を以て城壁を破壊せるを待ちて捕虜と占領地に於て徵發せる兵士とをして之に肉薄して強襲を行はしむ。軍隊は交代して日となく夜となく攻撃を繼續し、城兵をして休養の暇なからしめ臆てその戦闘力を失はしむ。成吉思汗は支那に於て又波斯に於てこの時代を使用せる總ゆる戦具を製造するの工人を得たり。水火の兩元素も亦敵城を滅却するが爲に蒙古人によりて用ゐられたり、即ち蒙古人は希臘火薬を使用し又河水を轉じてその抵抗せる城市に氾濫せしめんとせり。又隧道を穿ちて城内に闖入せることもあり。奇襲を以て之を抜かんと

するや圍を解きて遠く城下より退却し、輜重を留めて踵を轉じ百方警戒を加へて敵兵をしてその進軍を知ること能はざらしめ兼程再び之に向へり、蒙古兵は城邑の包圍を中止せること稀なり、その地の利を占めて到底之を力取する能はざるを見るや包圍を繼續し、時には數年の久しきに互ることあり。殊にその目的を貫徹するが爲には數々詭計を用ひ、その占領せんとせる都城の城門を開かしむるが爲には如何なる約束をも敢て辭せず、而して初心なる都民の之を信じて降服するや極めて神聖なる誓約を無視して之を虐殺し盡せり。何物もよく大都の荒廢を救ふを得ず、都民進んで投降し蒙古人の兵營に赴きてその哀憐を乞ふも等しく虐殺の不幸を脱かれざりき、蓋しこの野蠻人はその陣後に多數の人民ありて不安の念を起さしむることを欲せざるなり、蒙古人は人命の貴ぶ可きを思はずその征服を行ふや單に一時の鹵獲を貪りその地を沒收して之に家畜を放牧せんとせるのみ。Vincentの *Miroir Historique* に第十三世紀に於ける蒙古人に關する記事あり、これ一二四五年に法皇知らしめんが爲にその最も近接せる軍隊の許に赴けるドメニコの僧侶 Simon de Saint Quentin の談話に基きしものなり。

敵軍の近くを見るや部隊の或は地方を劫掠するが爲に或は牧場を發見するが爲に離散せるものは直ちに集合せり。蒙古人は兵力よりも寧ろ詭計を以て敵兵を破らんと努めたり、蒙古兵は武士的勇武を以て敢て得意となさず、その戰術に於ては之を肉食獸に比較するを得可し。即ち機會の乘ず可きあれば常に敵に對して奇襲を行ひ又之を伏に陥るるを努めたり。優勢なる敵軍の前面に

あるを見るや數日程の距離を退却し、或は要害の地を占領して以て敵兵の離散するを待てり。戰鬪に際しては敵兵を包圍せんと努め、若しその勇敢なる抵抗を試るや戰列を開きて圍繞されたる敵軍に退却の便を與へ、かくてその潰走に乗じて容易に之を全滅せんとす。或は又背進して敵兵を誘ふことあり、蒙古兵は輕裝せるが上に何れも數頭の駿馬を伴へるを以て、追撃し來れる敵騎の疲勞困踏せるを見るや乗馬を更へて逆襲を試み、若しくは背進に際してその戰線を擴げ迅速に方向を變じ、その兩翼を以て輕卒に進撃し來れる敵兵を包圍せんとす。蒙古兵は遠距離より矢を放て攻撃を開始しその背進に於ても又矢戰を怠らず、その白刃を用ふるは單に戰勝の功を收むるときのみ。各部隊は信號に應じて極めて敏活に進退せり。兵士の個々分離して單獨に出奔し若しくは戰場を去りて恣に掠奪をこととするものは死罪に行はれたり。

遠征の中ばに於て蒙古兵は毎年數箇月宛一地に滯陣せり、これ主としてその軍馬を休養せんが爲なり。されどその舍營地に就くに先ち、傍近の地方は勿論遠距離の地に至るまで之を蹂躪し以てその安全を圖れり。かくて後休息に就き劫掠し獲たる物資に飽き、多數男女の捕虜の或は年少なるが爲或は艶麗なるが爲に助命されたるものをして左右に侍せしむ。この薄倖の徒の運命は蒙古人に殺戮されたるその同胞に比して却て憐む可きものあり。殆んど赤裸々たるが上に飢饉と疲勞とによりて又元氣なく最下等の動物の如く待遇されたり。Vincent de Beauvais の記事に「韃靼人は奴隸のうち就きて豫め生きながらその墓に埋む可

きものを選びしことありと云へり

優雅なる亞細亞的豪華に慣れ東洋の風俗と回教法規との命ずるところに従ひ深窓のうちに生長したる數千の少女は目前に於て兩親の虐殺さるときその腕より奪はれ、この性質の恐る可く風俗の厭ふ可き野蠻殘忍なる將士の陣後に従へられ、空しくその玩弄物となれり。

征服せる地方を穩かに占領するが爲成吉思汗はその住民を殺戮し城邑堡塞を滅却せり。占領地の荒廢は蒙古兵戰術中の主たる要素にして秩序的に實施されたり。成吉思汗はその法令を以て降服を拒めるの民叛逆せるの民を全滅す可きことを規定せり。韃靼民族の慘酷なる交戰權に従ふときは戰敗者の家族と財産とは戰勝者の有に歸せり。されど人口饒多なる邦土に於てはこの多數の捕虜を如何す可き。蒙古人はその必要を認めざる限りは悉く虐殺し、而して若干の捕虜を留めてその同胞に對して戦はしむと雖も、その地方を撤兵する時に當りては悉く之に白刃を加へたり。

蒙古人が捕虜を利用して雜務に當らしめしこと、時に屬國の民若しくは占領地の民を使役せしこと、その軍旗の下に文明國に於ける戰利品の分配に與らんことを熱望せる他の遊牧民族を糾合してその援助を得しこと、戰鬪の最も危険なるに當りて注意して捕虜と援兵とを陣頭に立たしめしこと等、すべて以上の事情は即ち蒙古軍が長日月の間遠隔の地に於て干戈をこととし且數々包圍攻撃に於て激戦を試みしにも拘らず毫もその兵力を弱めざりし理由を説明するものなり。又その遊牧的生活は南方氣候の有害なる影響を避くるを得たり。

兵士たるものは平時にありては人民と伍して温厚靜謐なること正に犢の如くならざる可からず、然れども戰時にありては敵に向て突進すること宛も餓へたる鷓の禽鳥に向て直下するが如くならざる可からずとは成吉思汗の曾て云へる所なり。

一日又諸將の長處を擧げて語れる時曰く『勇猛なること也孫伯 Yessountai の如き人物あるなし、何人もかくの如く稀有の性質を具へたるはあらず、されど也孫伯は親ら極めて長途の行軍を試むるも疲勞を覺えず又飢渴をも感ぜざるが故に部下將校士卒の甚だ之に病めるを思はず、これその主將たるに適せざるの理由なり。主將たるものは飢渴に對して感覺を失はず以てその部下の困苦を察せざる可からず、行軍は急激に過ぐるなく人馬の力を節せざる可からず』と。

成吉思汗一日麾下將軍の一人なる諸延博爾朮 Bourjoudji に向て人生の最大快樂は何ぞとの問を發してその意見を求めたり。答へて曰く『春日駿馬に跨り手に鷹若くは鷓を携へて出獵しその飛禽を搏撃するを觀るにあり』と。茲に於て更に同一の問を以て將軍博爾忽勒 Bouroul の説を叩き、次で他の諸將に及ぼせしにその答ふる所何れも博爾朮に異ならざりき。成吉思汗再び口を開きて曰く『然らず、人生の最大快樂は仇敵を撃破し、之を驅逐してその所有せる財寶を奪ひ、之に親近せる人々の悲哀の顔色を示して涕泣せるを見、その馬に乗じその女とその妻とを納れて後宮に備ふるにあり』と。チに據る。

成吉思汗はその教令に於て諸皇子に怠らず狩獵に出づ可きを訓戒し、之を以て軍人の學校なりと呼び、人類に對して干戈を交へざる時は蒙古人は須らく獸類に對して戰はざる可からずと爲せり。冬季の初は即ち大狩獵の時期にしてその準備は軍事的遠征に類するものあり。先づ人を派遣して野獸の繁殖せるや否やを視察せしめ、その報告を得たる後行程一箇月の半徑を劃し、その以内に舍營せる各部族に對して命令を下し、毎十人に付き一定の人数を出して圓形を劃し指定せる地點に向て野獸を驅らしむ。この列卒^{セウ}は之を右翼左翼中堅に分ち、各々その頭に將軍を戴けり、將軍の妻妾亦之に伴へり。この列卒の行進中各方面より派遣せる將校は數々皇帝の許に來りて野獸の動靜とその何れの地に之を驅れるやとを報告せり。列卒の劃せる圓形は初めは廣大なるも次第に狭められて遂に兵士の肩と肩とは互に相接觸するに至り、獵場として指定せる地點の左右に集まれり、その地は二三リーグの周圍を有し綱に垂れたる毛氈を以て之を圍めり。列卒は能く警戒してその列を護り野獸をして逸出せしめざるを要す、聊かたりとも懈怠するものあらば杖刑の罰を受く可し。皇帝は第一に后妃并に供奉の一行と共に獵場に入りて、この狹隘なる地域に滿てる夥しき各種の動物を射て以て娛樂を極め、之を捕殺せる時乃ち獵場の中央に於ける丘上に退きて皇族諸將軍等の狩獵に耽るを觀覽し、次で普通の將校をして同一の快樂を縱にせしめ最後に兵士をして又之に倣はしむ。この遊獵は數日間繼續せり。野獸の數極めて僅少となるに至り老翁

數輩皇帝の前に跪きて歎願し、殺戮を免かれたるものを助命せんことを乞へり。乃ちこれらの動物を縱ちてその繁殖して以て次回の狩獵に於て快樂を増殖するの策を執れり。かくて皇帝に陪食せるの將校は獵獸を分配せり。宴樂は一週間繼續し了て士卒はその舍營地に歸れり。^{へに據る。}

成吉思汗は支那の制度に倣ひて孔道に驛站を置き以て官吏使節急使の來往に便せり、驛馬は附近の人民之を供給せざる可からず、人民はまた急使に酒食を給し貢賦輸送用の馬車を供へたり。驛馬を使用するの權を有するものに關しては法規の設ありてその守る可きの箇條を定めたり。道路の安全は嚴重なる警察制度によりて保證せられ、從來タルタリ地方に於ては個々獨立せる部落の多くは何れも掠奪を業とし外人をして之に近くこと能はざらしめしに、又この憂患なく之を旅行するを得しめたり。^{へちに據る。}

韃靼民族の間には惡風行はれ紊亂甚しかりしに成吉思汗は嚴法を以て之を制止せり。その出づるまでは盜賊強姦の如きは日常茶飯と一般にして子女は毫も父母に従はず、弟は兄に従はず夫は妻を信ぜず妻は夫の命を奉ぜず、富者は貧民を濟はず下輩は長者に對して崇敬を表せず、最後に強奪を行ふも罰せられざりしことを説きて成吉思汗は曰く『されど朕が這般の民族を朕の政權の下に統一するや、朕が第一に心を留めしはその間に秩序と正義とをして行はれしむるにありき』と。^{チに據る。}

その法典は殺人、偷盜、強姦、私通、雞姦等に對して死刑の罰を課せり。又三度管理を委託されたる資本を失ひたるもの、逃去せる奴隸拾得せる財産を竊に藏するもの、人の戰場に遺棄せる所有物武器を鹵獲してその本主に之を還付せざるもの、他人に損害を與ふるが爲に妖術を用ゐたるもの、決闘に干渉し戰士の一人に援助を與へて他の一人に敵對せるものは等しく死刑を受く可きものと認められたり。Ahmed Ibn-ul-Macrizi 撰 Kitab ul-movâiz v-el-tib ur, bi-zikr-il-Khitat v-el-Assar (埃及誌) 巴里王立文庫藏阿刺比亞寫本第三册大宰相 Hadib の條參看。極惡の罪惡を犯したるものは兎に角、通常の被告はその罪狀を自白せるものにあざれば之を罰せず、但し之をして白狀せしむる爲には拷問を用ゐたり。盜賊の小なるものは單に杖刑に處せらるるのみなりき。Rubruquis タルタリー旅行記并に Marco Polo の東洋旅行記參看。

韃靼種族の間には奇異なる迷信的思想ありて元來可もなく不可もなき幾多の行爲がその甚しく恐怖せる雷電を誘ひ、若くは不幸を來すの原因となることありと信ぜしが、成吉思汗はその法律を以てこの思想を是認せり。故に水中若しくは餘燼に放尿し、燃火、卓子、器皿を跨ぎ、手を流水に浸すこと衣服を洗濯すること等を嚴禁せり。水は器物を以て汲まざる可からず、衣服は著用し得る限り依然として之を膚に纏はざる可からず。成吉思汗は物の汚れたり云ふを好まざりき、その意見に従へば萬事皆その當を得たり。〔チ并に〕 Kitab ul-movâiz に據る。Rubruquis の韃靼旅行記に曰く蒙古の婦人は衣服を洗ふ時は上帝怒りて之を乾すに乘じて雷電を降すと稱して洗濯せず、食器も單に熱湯を以て洗ふのみとあり。Carpin も亦同一事を敘せり。Pallas は Sammlungen hist. Nachrichten に述べて曰く、史家 Abul-Gazi の援ける水を以て食器を洗ふことを禁ずて、成吉思汗の法律は今なほ Calmouks の間

に行はる、この民族は乾草若しくは氈を以て之を拭ふのみと。Jean de Plan Carpin に據るに蒙古人は小刀を以て火に觸れ鍋の肉を出し湯を以て火を打つ等のことを禁ぜり道般の迷信はそのはじめ元素を犯すを恐れしが爲ならんと。

動物の肉を食用に供せるが故に之を屠殺せんとせば先づその四肢を縛したる後胸部を割きて手を挿入してその心臓を緊握せざる可からず。何人たりとも動物を屠るに於て回教徒の方法に倣ふものは即ち親ら屠殺さる可し。〔チ并に〕 Kitab ul-movâiz に據る。Pallas 曰く Calmouks の羊を殺すや胸部を割きて手を挿入しその心臓を抜き出だすこれ成吉思汗が蒙古種族の間に行はれしめたる屠獸法也。

成吉思汗は蒙古人の食卓に就くとき至大の款待を盡さんことを求めたり。蒙古人はその家に來りて席に列せんとする者には何人に對しても之を優遇せざる可からず、何人をも之を拒絶する能はず、又主人は賓客に先ちてその料理の味を嘗めざる可からず、主人と來客との位階甚しく懸隔するものにも亦然り。Kitab ul-movâiz に據る。Vincenz は蒙古人の貪慾吝嗇なるにも拘はらず食事の際は來て食ふことあるを云へり。又曰く蒙古人は多數の家畜を有するものもその病死若しくは亦變死せるものにあざれば之を食はずと Jean de Plan Carpin 參看。

過度の飲酒は成吉思汗によりて然る可からずとして戒められたり。曰く『酒を嗜むの人は耳聾し眼盲し理性を失ふ。その心の平を保つ能はず宛も頭を打たれたるもの如く眩暈を感ず。その知識も將たその材幹も最早悉くその用を爲す能はず唯昏迷するあるのみ、帝王酒を嗜む時は何等の堂々たる事業をも行ふ能はず、將校酒を嗜む時は能くその部隊を統御するを得ず、何人たりとも酒を嗜むものは否徳によりてその身を失はざるなし。若し酒を廢すること能はずんば少くも之

を節し一箇月三回宛之を用ゐることを努めざる可からず、一回ならば更に可なり全然之を飲まずんば最も可なり、されど決して酒を嗜まざるの人物何處にかある』と。

成吉思汗は子孫に向て何れの宗教にも重きを置かざること、隨て各宗派の信徒を平等に待遇す可きことを熱心に訓戒せり。之を崇拜する方法如何は神に取りてさまでの關係なきことなりとはその信ずる所にして、成吉思汗は親ら認めて神なりとなせり、されど又太陽を禮拜し薩滿教の粗野なる儀式を遵奉せり。

成吉思汗は又各宗派の牧師、僧侶、托鉢僧、醫師、并に爾餘の學者に對して諸般の課税は勿論如何なる賦役をも免除せり。

亞細亞の帝王は堂々たる尊稱を唱へて榮譽とするの常なりしが成吉思汗は之を蔑視し、一族の諸王子に訓戒して決して之を採用することなからしめたり。故にその子孫は帝に倣ひて單に Khan 若しくは Caan の稱號を用ゐしのみ、王族は君主を呼ぶにその本名を以てし、國書勳記等に於ても決してこの本名に榮譽を表するの文字を添へざりき。成吉思汗の秘閣より出でたる文書は措辭簡潔にして彼の波斯文浮誇の弊は之を認むるを得ざりき。へに據る。但し第十三世紀歐洲旅行家文書には諸帝王の支那皇帝に倣ひて神子と稱し宇宙の主と呼べるあり。 そのトランスオクシアナを征服せるとき、支丹護罕チユン默德の一秘書は來りて仕へんことを乞ひしかば乃ち之を容れたり。その後將軍哲別チユンの報告書に接せしに書中

Moussoul 侯 Bedr-ud-din Loulou の反對あるが爲シリア攻撃の計畫を阻碍さるる旨を殊に報じ來りしかば、成吉思汗は前記の秘書に命じて Moussoul 侯に宛てて下の如き意味にて國書を草せしめたり、曰く『上帝は我等に地上の帝國を賜ひぬ。服從して我等の軍隊を通過せしむる者はその國家と家族と財産とを保つを得ん、之を拒むものの如何になる可きやは唯上帝之を知るのみ。Bedr-ud-din 若し降らば我等を友國となすを得ん然らずんば我等の大軍 Moussoul に至りその運命知る可からず』と、秘書は波斯語にてこの國書の草稿を起し極めて浮華なる文體を用ゐ、回教君主に對して與へらるる華麗なる形容の辭は一語をも剩さざりき。侍從丹尼世們 Danishmend の之を蒙古語に翻譯するや成吉思汗はこの文書に對して満足せず、秘書に向てその口授せし所と異なるを詰れり、秘書のその典例に倣へるものなるを答ふるや、成吉思汗は怒て之に應じて曰く『汝は逆賊なり、汝のこの國書を起草するや Moussoul 侯をして之を讀みて却てその勇氣を鼓舞するに至らしめんとせるなり』と、かくて之を死刑に處せり。チに據る。

成吉思汗の法令訓令はその命により蒙古語を以て之を編纂し畏兀兒文字を以て之を書せり、畏兀兒文字は成吉思汗の蒙古の青年に命じて學習せしめし所に係れり。この法典の謄本は Orlog-yassa 即ち大律令と稱し嚴かに子孫帝王の秘閣に藏せられたり。重要な事件の起る毎に諸王侯は相會して協議を催し、成吉思汗の命令を記せる卷物を齎らさしめて恭しく之を閱して參照に供

せり。この法典の條文はヘチを始とし Vincent の *Miroir historique* 并 *Maclizi* の埃及語等に散見す。Maclizi はその一友人のバグダードなる *Mosulensis* 學院文庫所藏成吉思汗 *Yassa* 寫本を閱讀せるものより聽取せりとてその詳細を敘せり。チに據るにこの法典は成吉思汗が波斯よりその斡耳朵に歸りて傳習せしとき即ち一二二五年に編纂されしが如し、曰く『成吉思汗は當時詳細なる命令を下したり』と。成吉思汗は特に親ら皇子察合台に向て法令の施行監督を委任せり、これその性質嚴格なるを知りしを以てなり。成吉思汗は又この訓戒は即ち朕をして他人の上に傑出せしめ、朕が政權を鞏固にせるものなれば朕の子孫若し夫れ之を遵奉せず、殊に最も嚴正なる服従の道を維持せずんばその帝國は咄嗟の間に支離滅裂となり忽ちにして衰頽の域に沈淪せんと云ひ且曰く『茲に至りて成吉思汗に求むる所あらん』と。又曰く『朕が子孫は錦欄の袍を纏ひ、美食佳肴を味ひ、駿馬に跨り、腕に妙齡の嬌姫を擁するに至らん、而して復這般快樂の基く所を夢想せざるに至らん』と。チに據る

成吉思汗の妃妾はその數約五百人に達せり。その妾は即ち諸國の民族より獲たる捕虜若しくは蒙古の女子なり、何となれば蒙古當時の習慣に據るに各民族は最も艶麗なる所謂秀女を選びて之を帝王若しくは皇族に獻じたればなり、而してこの習慣は成吉思汗の子孫の時に於てなほ行はれたり、中隊の士卒に屬するの女子は隊長悉く之を檢査してその最も艶麗なるもの一人を選びて之を千人長に呈せり。この上官は又選擇を行ひかくて各千戸の秀女一人は萬戸長の手を経て汗に獻ぜらるるなり。帝王のその後宮に留めざるものは之をして后妃に奉侍せしめ或は之を一族に下賜せり。ヘに據る。Candis は皇帝に子姪を所産されたる時は運帶なく之を獻ぜざる可からず又毎年若しくは二年或は三年に一回宛國中の女子を集めてその秀麗なるものを選びその選に漏れたるものを宮中の諸臣に賜ふと云へり

成吉思汗の后妃中 *Grand dame* と稱す可く第一流の格式を具ふるもの五人あり。その第一に位するは孛兒帖 *Bourté* にして夫人 *Fou-gin* と云へる支那的尊稱をその名に添へたり。その尊稱は支那の皇帝が妃妾のうちにおいて皇后に次ぐの位階を占むるものに與ふる所に係れり。チに據る 孛兒台は翁吉刺特氏の族長諾延特因 *Nain* の女にして朮赤、察合台、窩闊台、拖雷四皇子并に諸部族の部長に嫁せる五皇女の母なり。蒙古の家族にありては正后の資格を有するものは爾他の妃妾に對して多少の權利を有し、隨て子女の席次もその母の席次によりて定まるが故に、孛兒台の生める子女は成吉思汗の爾餘の子女に對して頗る優越なる位地を占めたり、その第二の皇后は忽蘭 *Coulan* と呼び、蔑兒乞部長の女にして皇子果魯干 *Goulgan* を生みしがこの皇子に就ては唯その名を傳ふるのみ。第三の皇后と第五の皇后とは姉妹の塔塔兒人にして姉は也速凱特 *Yissoucat* 妹は也速命 *Yissouloun* と呼び。第四に位するの皇后は金帝の女なる公主哈敦 *Guenkdjou* 公主の なり。成吉思汗はその他又その妃妾のうちに汪罕の姪并に太陽汗の寡婦を數へたり。爾餘の妃妾は諸將諸遊牧部長の女なりとす。チに據る

一夜成吉思汗汪罕の姪にして即ち札罕不の女なる阿卜哈 *Abica* の帳幕に眠りしに惡夢に魘はれて安眠するを得ざりき。醒めて後その王妃たるこの公主に語て曰く朕は常に卿に満足せしも上帝は今宵夢によりて卿を他人に與ふ可しと命じ賜へり、乞ふ朕に對して之を怒る勿れと、かくて

之と同時に高聲に帳幕の外にあるは誰ぞと問へり。諾延怯台 *Keiti* (校者曰く、馮氏には「案元祕史作主 (Dourichei) 之對音、多桑此處譯寫疑誤。」) 兒推歹、元史作赤台、此二名皆是抑多桑以其事屬主兒推歹之子答台」とあり。) その夜警衛の任にありしかば直に之を奉答せり。成吉思汗は之に命じて帳幕に入らしめこの婦人を卿に降嫁せんと云へり、怯台は驚愕して一語をも發せざりしかばその眞面目に語れる旨を告げ、更に公主に向てその住へる鞞耳朵は勿論之に附屬せる僕婢、家具、種馬、家畜等をも併せて贈遣し、唯食卓供奉の吏一員と金杯一個とを留めて以て公主の記念となさんことを欲せり。かくて阿ト哈は蒙古部兀魯特 *Ourotes* 氏の諾延にして左翼の四千騎に將たる怯台の妻となれり。チ蒙古部兀魯特人の條に據る。又チに據るに成吉思汗は孛兒帖夫人との間に五女あり長女火真別嬪 *Couchi Bigui* は亦乞剌思人 *Teguin Toncou* の子に配し妾址千 *Tchichigan* は蔑兒乞人 *Ondonyotes-Merkies* 王) 忽秃哈別乞 *Coukouca Bigui* の子脱拉兒赤 *Tanaldji* に適き三女阿勒海別嬪 *Alachi Bigui* は汪古部主の子石奎夷 *Tchincouti* に嫁し四女秃馬倫 *Toumaloun* は翁吉刺特部主の子古爾干 *Gourgan* に歸き五女阿兒塔佛 *Alaloun* は斡勒忽訥特 *Olcounote* 部長台出 *Taidjou* の子札弗圖兒色辰 *Tchaver Satchan* と結婚せり。

附 録

註 第一 (第五八頁参照)

附

森林の民 *Ourianguites*

史家 *Raschid* は森林の民と稱する *Ourianguites* と蒙古種族に屬する *Ourianguites* との相違を詳説せり。その彼に就て敘する所はその細目に至るまで、通古斯種族 *Toungouses* の現狀と能く符合せり、試みに *Joh. Gottl. Georgi* の著書 *Bemerkungen einer Reise im Russischen Reiche* 第一冊二四二頁以下六八頁までを參看せよ。露國にては橇を *Sani* と呼ぶるが *Raschid* の記事に見ゆる *tehana* とその名稱相似たり。*tehana* とは所謂森林の民が積雪の候に當りて外出に際して用ゐるものなり。通古斯人はその居住せる西伯利亞東部の廣漠たる地方を *Ouriangkhai* と呼べり。蒙古人が第十三世紀に於てこの民族に與へたる名稱に似たりと云ふ可し。(Abel *Rémusat* 氏の韃韃語研究錄巴里一八二〇年出版參看)。Rubruquis も亦 *Orengay* のことを敘して、その能く磨きたる骨片を足に附著し之を以て冰雪の上を駛するの用

録

に供し、又途上鳥獸を捕ふることを記せり。

註 第二 (第五八頁参照)

中亞諸部族

附

Raschid は Djami ut-Tévarikh の第一編に於て中亞に住せる土耳其種族のことを敘せるが、但し土耳其種なる名稱の下に體質言語等の全く眞の土耳其種族と異なる遊牧民族をも包括せり。その先づ第一に擧げたるは Abou Aldja の子 Dib Bacouyi の子 Cara-khan の子 Ogonze の後裔なる烏古斯族 Ogonzes なる。Ogonze は六十ある何れも汗と稱せらるる Gnu, Ai, Youldouz, Gueuk, Tak, Dingviz といれなり、各四子を生めんとす左の如し。

録

Gnu-khan の四子 Cavi, Bayat, Alca-ola, Cara-evlu
 Ai-khan の四子 Yazer, Deugner, Doudourga, Yaparlu
 Youldouz の四子 Oschar, Cazik, Bigdili, Carkin
 Gueuk の四子 Baidour, Bitchina, Tchaoundour, Tehini
 Tak の四子 Salour, Imour, Ala-yountlou, Oraguir
 Dingviz の四子 Eskindour, Boukdour, Séva, Canik

附

この二十四人の Ogonze の孫は各々氏族の祖と爲り、初の十二人は右翼即ち Bozouk の祖となり、後の十二人は左翼即ち Uteh-ok の祖と爲れり。又この烏古斯族 Ogonzes の支流に (第一)畏兀兒人 Ouigoures (第二)康里人 Cancalis (第三)欽察人 Kiptchacs (第四) Carlouks (第五)喀喇赤人 Calladies (第六) Agatcheris 等の諸部族あり。

これらの土耳其種族は中央亞細亞の西部に住し畏兀兒人の領土は阿爾泰山脈に達せり。この山脈の東には或は土耳其種に屬するものあり、或は韃靼種即ち蒙古種に屬するものあり、即ち左の如し。

録

札刺亦兒部 Djélaïres は Onon 河附近に住し十大氏族に分たる、Tchate, Tacraonne, Coungcassaonne, Koumssaonte, Ouyate, Bilcassane, Conguere, Toulangkite, Bourri, Schingcoute 即ちいれなり。
 蘇尼特部 Sounnies の一氏に Caironne と稱するもの。
 塔塔兒部 Tatares は捕魚兒 Bouvir 附近に住し、Toutoucaïoutes, Itchi, Tchagan, Couyiu, Térate, Bercoüi の六氏に分たる。

蔑兒乞部 Merkites は又兀都亦特部 Oudouyoutes と稱し、Ohouze, Moudan, Toudak-line, Djionne の四氏に分たる。

Keurloutes
Bargoutes

衛拉特部 Ouirates は又數氏に分たれ八河の灌漑せる地方に住す、この八河は合流してイエニセイ江上流即ち Kem 河となる。

Couris

Coualaches

Bouriates

附

これらの三部は Selinga 河の彼岸に住するを以て總稱して Bourgoutes と呼び、その地方を Bourgoutchin-Tougroum と稱す。

秃馬特部 Tounmoutes は又 Bargoutes のうちに數へらるるが、その居住地は乞兒吉思部の領土に近し。

Coulgatchines

Kermoutchines

録

これらの兩部は乞兒吉思部の領土盡くるの處、巴兒古眞 Bourgoutchin-Tougroum 附近に住す。

Ourassoutes

Télenkoutes

Kestimis

附

これらの三部は乞兒吉思部、侃侃助特部領土の森林中に住す。

Ourianguites sylvestres 即ち森林烏梁海部もこの地方の森林に住す。

Courcanes

Sacaites

これらの兩部の住地は記録の徵す可きものあるなし。

客刺亦部 Kéraités は Toungeaite, Tchirkire, Sakiate, Tounmaite, Éliate の五氏より成る。

録

乃蠻部 Naimans の領土は廣且大にして阿爾泰山脈 Caracouroun 山脈并に Éloui Serass (○) 山脈を以てその境界となし、イルチシ河によりて灌漑され、北は乞兒吉思部東は客刺亦部に接し、西は沙漠を隔てて畏兀兒部と相臨めり。この部族の一に Goutchagour と稱するあり。汪古部 Ongoutes は支那の長城附近に舍營す。

唐古特部 Tangoutes は王國を建て支那陝西の大部分をも兼併す。

Tékines は一に Mékrines と稱し畏兀兒部境上の嶮峻なる山間に住す。
蒙古部 Mongols.

成吉思汗の帝國建設後蒙古部人民の間に區別を立つることとなり、阿蘭郭翰 *Alan-gua* の光明に感じて生める諸子の子孫は尼倫 *Niroun* と稱してその血統の純潔なるを示し、以て他の諸族と分てり。これらの諸族は總稱して *Durlukin* 即ち平民と呼べり。これ即ち阿兒格乃哀山中に籠れる腦古 *Tékouz* と顔 *Cayan* の子孫なり。先づこれらの氏族を數へんに

附

烏梁海氏 *Orianguites*

翁吉刺特氏 *Councarates*

亦乞刺思氏 *Ikirasses*

斡勒忽訥特氏 *Oulcounoutes*

Caranoutes

Counkouliontes

録

亦乞刺思氏以下の四氏は翁吉刺特氏の支流なり、亦乞刺思氏と斡勒忽訥特氏とは *Cabai Schira* の裔にして、後の二氏はその弟 *Tousboudai* より出でたり、その兄は *Mergan* 即ち善射の稱ある *Tehourlouk* なりとす、傳へ云々、この三兄弟は黄金の桶より出でたりと。

火魯刺思氏 *Courlasses*

也里吉斤氏 *Ildjikines*

これらの兩氏は亦共に *Tousboudai* を祖とせり。

Ozbaoutes は *Coungcamares*, *Erlates*, *Kélengoutes* の三氏に分たれ、

即ち三人の兄弟より出でたるものにして各々その名を傳へたり。

許兀慎氏 *Houschines*

速兒都思氏 *Seldouses*

Ildourkines

附

Bayaoutes は *Djedi-in-Bayaoutes* 即ち *Djeda* 河畔に住くるものと

Kiharoun-Bayaoutes 即ち平原に住くるものとに分たれたり。

蒙古尼倫諸氏 *Mongols Nirouns*

哈答斤氏 *Katakines*

撒兒助特氏 *Saldjioutes*

泰亦赤兀氏 *Taidjioutes*

阿力干氏 *Erikanes*

録

- 珊竹特氏 Sidjioutes
- 赤尼思氏 Tchihizes
- 那塔勤氏 Nouyakines
- 烏魯特氏 Odoutes (Ouroutes)
- 忙兀特氏 Mingcoutes
- Barines
- 朵兒奔氏 Dourban
- Canoutes
- Souctoutes
- 巴魯刺思氏 Berolasses
- 阿答兒斤氏 Hiderkines
- 札只刺特氏 Djadjérates
- Boudans
- 朵里刺特氏 Doucalates
- 亦速特氏 Yissoutes

Soucans
Kingcotans

註 第三

成吉思汗系譜

拉施特并に高貴系譜に據る

李兒特赤那 Bourte-Tehina
阿兒格乃袞山より出でたる人也

- 必特赤干 Betedji-Caan
- 特馬徹 Tamadj (特馬徹克 Tamatsak)
- 乞楚蔑兒干 Cabtchou-Mergan (和哩察爾墨爾根 Khoritsar-Mergen)
- 古津博郭羅爾 Coutchim-Bougouroul

也客爾敦	Nigue-Nidoun	——
珊鎖赤	Sam-Saoudji	——
哈里哈爾楚	Cali-Cadjou	——
朵奔巴延	Douboun-Bayan	——
伯古訥特	Bougounouti	——
布兒古訥特	Bilgounouti	——
阿闐郭幹	Alon-cova	——
朵奔巴延の寡婦にして蒙古尼倫	Mongols-Nirounes	の祖也
不哀哈塔吉	Boucou Cataki	——
哈塔斤氏	Catakines	の祖
不固撒兒只	Boucadij Saldji	(Boucou Saldjigo)
撒兒助特氏	Saldjoutes	(Saldjigoutes) の祖

李端察兒	Boudandjar	——
布格	Bouca	(伯格爾巴圖爾)
土敦邁寧	Toutoun-Méne	(瑪合圖氏 Makha Todan)
海都汗	Caidou-khan	(Catchi Külük)
拜桑古兒	Bai-Schingcor	——
扯勒黑領昆	Tchergué Lingcoum	——
泰亦赤兀	Taidjoutes	の祖
更都赤那	Kendou Tchina	——
烏魯克勤赤那	Euloktchin Tchina	——
この兄弟は赤尼思氏	Tchinizes	の祖也
俺巴該汗	Anbagai Caan	——

禿歹 Toudai
哈丹太石 Cadan Faischi
抄眞幹兒帖該 Djaoudjin-Eurdéki
阿力干氏 Erlikans 珊竹特氏 Sidjoutes 〇祖
托邁乃汗 Toumenai Khan (托木巴該 Toumbagai Setsen)
札克蘇 Djaksson
那塔勤氏 Nouyakines 烏魯特氏 Ouroutes 忙兀特氏 Mingcoutes 〇祖
八林昔刺禿合朱 Barim-Schiratou-Cairndjou
哈出里 Catchouli
巴魯刺思氏 Berolasses 〇祖
撒姆哈準 Sim Catchiounn
阿荅兒斤氏 Hiderkines 〇祖
博歹阿庫兒格 Bat-Kilgai

博歹阿特氏 Boudates 〇祖
哈不勒汗 Caboul Khan
乞要特氏 Kiyates 〇祖
烏圖爾伯顏 Oudour Bayan
朱里耶特 (札只刺特) 氏 Djadjéates 〇祖
布端察兒朵黑蘭 Boudandjier Doucalan
朵黑刺特氏 Doucalates 〇祖
乞牙台韓赤斤 Tchinatatai Utehuguen
亦速特氏 Yissoutes 〇祖
烏勤巴兒哈合 Eukin Barcan
乞要特月兒斤氏 Kiyates Bourkines 〇祖
莎兒哈禿月兒克 Sourcaktour-Bourga
薛徹別乞 Sedjde Bigui

把兒禮把阿禿兒	Bartam Bahabour
忽禿黑禿蒙古兒	Coutoucou Moungruer
泰出	Baidjou
合丹把阿禿兒	Cadan Bahadour
忽都刺哈汗	Coubila Caan
拙赤罕	Djoudji Khan
火察兒	Coudjir
徒丹斡赤斤	Boudan Uchuguen
蒙格禿乞顏	Moungdou Kiyau (博格圖徹辰 Mengutou Setsen)
捏坤太石	Néoum Taischi
槐因額里干氏	Hoyu Erigan 〇祖
阿勒壇	Altan
也速該把阿禿兒	Yissougai Bahadour

乞要特孛兒只斤氏	Kiyates Bourdjoukines 〇祖
荅力台斡赤斤	Daritai Uchuguen
別勒格台諾延	Bilgoutei Noyan
札富都	Tchaoutou
鐵木眞	Témoutchin
朮赤	Djoutchi
察合台	Tchagatai
窩闊台	Ogotai
拖雷	Toulouï
朮赤哈薩兒	Djoutchi Cassar
也古	Yékou
脫古	Coutou
也生哥	Yessouncouh

阿兒哈孫	Harcassoun
也生哥	Yessouncouh
愛每根	Emegan
勢格都兒	Schingcour
哈準	Cadjounn (Cadjiken)
伊兒吉歹	Itchidai
察忽刺	Djacoulah
哈刺忽兒	Calaour
哈丹	Cadan

勝格納哈兒	Schikileour
帖木哥斡赤斤	Témougou Uchuguen
禿格察兒諾延	Togatchar Noyan
乞ト	Djibou
哀楚兒	Adjoul
乃顔	Nayan

括弧のうちに記せるはシュミットの出版せる薩囊薛珍の蒙古源流に據る。同書に従へば孛兒特赤那より朵奔巴延までの間を十世となす、即ち阿固濟木博郭囉勒 Agotchim Bougouroul の次に薩里噶勒濟固 Sali Khaldjigo あり、又哈里哈爾楚 Cali-Cardjou の次に博爾濟吉台墨爾根 Bordjigüetei-Merguen 并に都喇勒津巴延 Torghaltchin Bayan あり。又同書によれば都喇勒津巴延の子多博墨爾根 Dobo Merguen (拉施特の朵奔巴延) に Dova Sokhor と呼ぶ弟あり四子を生む、即ち Oengueletes の祖 Donoi, Bagatoutes の祖 Dokschin, Coyites の祖

Ennek, Kergoutes の祖 Erké これなり、これ即ち Onirate 部の四氏なりとす。

最後に李端察兒三子を生む、巴噶哩台汗 Bagaritai Khan 亦察郭兒圖 Idjagortou 并に哈必齊巴圖爾 Cabidji Bagatour これなり、哈必齊は伯格爾巴圖爾 Biker Bagatour 即ち拉施特の布格の父なり。

註 第四 (第一〇五頁参照)

附

塔塔兒部

Raschid には塔塔兒部は往古より世に知られ且成吉思汗以前に於て勢力ありしを以て、土耳其種族に屬するものも亦塔塔兒人と稱せられたることあり、その状宛も當今塔塔兒人、衛拉特人、汪古人、客刺亦人、乃蠻人、唐古特人等が蒙古人と稱するが如し、されど往古に於ては蒙古人は土耳其種族の一たるに過ぎず、その蒙古人なる名稱も實は阿蘭郭翰アランコフ以後乃ち三百年以來の新稱呼にしてその子孫の繁殖し來りしものかく稱せるなり。然るに今やこの名稱は契丹(支那北部) Nangyass (支那南部) の民を始として女真人、畏兀兒人、欽察人、トルコマン人は勿論回教徒即ち Taziks 并に蒙古人に捕へられて其間に生長したる者をも包括するに至れり。而して成吉思汗以前にありては塔塔兒人なる稱呼は亦かくの如く廣く採用せられたり、これ今日支那印度を

録

始として欽察人、乞兒吉思人の間に又北部亞細亞、アラビア、シリア、埃及、阿弗利加に於て蒙古人を韃靼人と稱する所以なりと説けり。○ Mass'oudi 并に Ebn-Haoucal の如き回教國初代の學者の北方亞細亞の民に就て記述せるものは塔塔兒人を擧げず、されど Saint-Martin 氏が Mémoires sur l'Arménie に述べたるが如く、回教紀元五二〇年(一一二六年)に無名氏の撰める波斯文萬國史要 Modjmet ut-Tévarikh v'el Coussass 寫本の巴里王立文庫に所藏せるものには亞細亞の帝王の尊號を列擧し、塔塔兒人の王は Simon Bivey Khiar と稱すと記せり。

註 第五 (第一一四頁参照)

録

畏兀兒人

宰相 Alai-ud-din 曰く『吾人は聊か畏兀兒人の書籍に於て寓目せることを記さん、吾人は固より之に信用を措くにあらず、唯異聞を擴めんが爲に之を敘するに過ぎず。畏兀兒人の信ずる處に據れば、その祖先は Caracouroun 山脈に發源せる Orcoun に住し、最初二氏族に分れたりと云ふ、この山脈は可汗(窩闊台)が近頃建設せし都府の名稱の因て基く所にして、これより發源の河流三十あり。五百年を経て Boucou-khan 出でたり。傳く云ふこの汗は Efrassiyab

と呼べる王に同じ。 (Pischadiens 朝の末 Kéyaniens 朝の初に當りて波斯を侵せる有名なる突厥王を Efrassiyab と云ふ) Caracouroun 山に Pijen の穴と稱する遺址あり (Pijen は Kiv の子にして Key-Khoussrou の朝に於ける波斯の英傑なり、Efrassiyab に捕へられ知らずしてその女と婚し暫く井底に拘禁されし後有名なる Roustém に援はれたる人なり) 又 Orcoun 河畔に宮殿の遺址あり、往時之を Ordou-Balic (斡耳朵の町) と稱し今之を Maou-Balic (悪しき町即ち廢市の義) と呼ぶ。その宮殿の前門と覺しく文字を彫れる石あり、可汗治世に際しその下に於て銘を刻せる一大石碑を發見せしかば皇帝は各國の民をして之を檢せしめしも之を讀む能はず。遂に支那より來れる人 (或は曰く Caru) ありて始めてその漢字なるを知り得たり、文に曰く Caracouroun 山より發源せる Tougola, Sélinga 兩河の會流地點 Coumlandjou に二本の樹あり、一は Astouc と稱し松に似て四時綠葉を呈し毬菓を結び一は野生の松なり。この兩樹の間に忽然として一個の塚を生じ天上より一道の光線を放て之を照せり、かくてこの塚は日々に生長せり。畏兀兒人はこの奇事に驚き敬て之に近けり。人の歌へるが如き音樂は聞へ來れり。終夜煌々たる光線に包まれ三十歩の距離に達せり。その發達の極に達するや、門あり自ら開きて内に五個の天幕に似たる者ありて一條の銀線より垂下せり、而して天幕には各一人の幼兒ありて之に坐し口に含める管によりて涵養を取れり、部族の領袖等は痛く驚きて來てこの奇蹟を見たり。

五人の嬰兒は空氣に觸るるや運動を始め直にその室を出でたるを以て之を養育せり。その稍、對談を解するや父母は誰ぞと問ひしかば、即ち二本の樹を示しに五人の小兒は兒女の母に對するが如く往きて兩樹に敬禮を盡せり。兩樹はこれに向て最も尊重す可きの性質を養ふ可きを戒め名譽を得て長生せんことを望めり。五兒は地方の人民より王子と同一の尊敬を博せり。長子を Souncour-tékin と云ひ、次子を Contour-tékin と云ひ、三子を Boucac-tékin と云ひ、四子を Or-tékin と云ひ、五子を Boucou-tékin と云へり。畏兀兒人はその天より降れるを信じその一人を戴きて君主となさんとせり。Boucou は容貌と云ひ精神と云ひ技能と云ひ推して第一と稱せられ、且各國の語に通ぜしを以て畏兀兒人は之を選びて汗と爲し盛大の宴を開きてその即位式を舉行せり。新王は正義をして能く行はれしめ臣民の數は大に増加せり。上帝は之に各國の語に通ずる三羽の鳥を遣したり、故にその或る地方に就きて報告を得んとするや鳥は飛んで直ちに之に赴けり。

『一夜 Boucou-khan その帳幕に眠りしに少女の姿を爲せる靈鬼來りて之を覺醒せしめんとせしかば恐怖の餘り熟睡を装へり。翌日の夜も亦同じく靈鬼に魘はれしを以て、第三日の夜は遂に老臣の協議を盡したる後この婦人の怪物に従ひて Coultag 山に至り、東天の紅ならんとするまで相語れり、七年六箇月二十二日の間この怪物は一夜として來らざるなく夜毎に同一の地に赴

きて語れり。最後の夜に於て少女は Boucou-khan に訣別して曰く、東洋より西洋に至るまで全世界は卿の帝國の下にあらん、卿の運命を完うするの準備を行へ、而して能く卿の民を支配せよと。茲に於て Boucou はその軍隊を糾合し、兄 Souncour-tékin をして三十萬人に將として蒙古人乞兒吉思人の領土に向はしめ、Contour-tékin をして十萬人を率ゐて唐古特を征せしめ、又 Boucac-tékin をして同數の兵に將としてキタイを伐たしめ、第四兄は之を左右に留めたり。諸軍は何れも莫大の捕獲物と多數の捕虜とを得て前記の諸國より Orcoun 河畔に歸來せしを以て、即ちその地に Ordou-balic を建設せり。かくて東洋は悉く之を征服し了れり。

附

『1』の時 Boucou-khan は新に夢に身に白衣を纏ひ手に白色の杖を携へたる男子より一塊の硬玉を得、且そのこの石を失はずんば世界の四方を領するを得んと云ふを聽けり。大臣も亦同一の夢を見たり。翌朝 Boucou-khan は戦備を整へ次で西洋に向て進軍せり。土耳其斯坦に至りて沃野の清水に富み極めて牧地に適するを得て王城を定め Bela-Sagoun 市を建てたり今日 Gou-Balic と稱するものこれなり。各方面に派遣せる軍隊は十二年間に於て地球の全土を征服せり。即ち遠く人類の住せざる地方まで征討を試み、各國の國王を率ゐ來て Boucou に貢賦を獻せしめたり。王は之を欸待せしが獨り印度の王は容貌醜かりしを以て拜謁するを得ざりき。Boucou は各國の國王に貢賦を命じて各々その國に就かしめ、この大遠征を了りて Bela-Sagoun の都府

録

を去りて郷國に歸れり云々。

『畏兀兒人の宗教に就ては當時既に Carnes と呼べる術士あり、今日蒙古人の間に信仰さるる者に同じ。これ妖鬼を使ひ之によりて悉く現在將來の事件を知ると稱するの徒なり。余はこの問題に就きて熟知せる幾多の人士に質す所ありしに、何れも妖鬼は帳幕の頂に於ける窓より入りて Carnes と對話を交うと云へり。その互に親密なる交際を有するは勿論妖鬼は即ち術士と一身同體となるを得可しと云へり。蒙古人は無智なるが故に術士の言を信じ今日にありても成吉思汗の子孫の多くは深く之を信用し、術士の言と占星家の説と相一致するにあらずんば大事を企てず。これらの術士は又病を醫せり。

附

鈴

『畏兀兒人は偶像禮拜の行はるるキタイ國の汗に、所謂 noumis (喇嘛) を遣さんことを請求せり。その來るや畏兀兒人は兩宗教の僧侶をして如何にせば勝利の結果を失はざるを得可きやを討議せしめたり。noumis は Noun と稱するその聖書を朗讀せり。これその倫理の典範なり小説、逸話、箴言等の全集なり、天使の傳へたるものは悉くこれを收めたり、かくて人類は勿論動物をも損傷せざる可きこと害を加へたるものに對して幸福を與ふ可きことを特に勧めたり。Houmis は各派に分れその教理も亦異なれりと雖も、最も廣く行はるるものは輪廻の説を信ぜり。曰く人類は數千年前より存するものにして、敬虔仁慈の人は死後その功績の多少に従ひ上は國王よ

り下は平民に至るまでの間に於て多少優等の位地に生まるるを得可く、罪惡もて汚され殺人罪を犯し同胞を虐げたるものの靈魂は之が罰として爬蟲猛獸の體に宿る可しと。

『偶像信者は更にその *Noun* を讀みしも *Canes* は黙して一語をも發せざりき。かくて畏兀兒人は初めて偶像を信じたり、東洋にありて最も回教に敵對するものは即ち畏兀兒人なり。最後に *Boucou-Khan* はその臨終の時まで幸福なるを得たり。吾人は畏兀兒人の書籍に見えたる妄誕の記事に付き僅にその十分一を抄出せるに過ぎず、されど以てこの人民の蠢愚なることを示すに足らん。

附

『余の友人曰く曾て某書を讀みしに一人の男子あり、前記兩樹の傍を掘りて兒童を藏め燈火を置き、而して他人を誘ひてこの怪異を示し、更に先づこの兩樹に禮拜して衆人をして之に倣はしめたりと記せり』と。

錄

『*Boucou-Khan* はその子の一人を繼嗣となせり。畏兀兒人はその後(時代不詳)家畜野獸は勿論小兒までも *gneutch gneutch* と呼ぶを聞けり、これ進め進めてふ意なり。この命令に従て乃ち移住せしにその止まる毎に同一の音響を耳にせり。かくて次で *Bisch-Balik* 市を建設せるの平原に來りしに漸く之を耳にすることなかりき。即ちその地に定住して五箇の舍營地を設けてこれを *Bisch-Balik* と稱せり、五市の義なり。爾後 *Boucou* の子孫はこの民を支配し *Idi-*

cont の尊稱をもて稱せらる。前記の兩樹はその殿堂に安置せらる』と。

附

邵遠平の續宏簡錄の畏兀兒人に關する記事は *Djouveini*, *Raschid* の傳ふる所と相似たり、思ふに同一根本史料に基けるものならん。邵遠平の記事は *Visdelou* (*D'Herbelot* 撰 *Bibl. or. 附錄*) *Klaproth* (*Mémoires relatifs à l'Asie* 第二冊) 兩氏の譯文あり。因に畏兀兒人の舊領土を流るる河に *Outékian* と呼べるあり。續宏簡錄に據るに *Boucou-Khan* 以下諸王の舊都は *Orcoun* 河と *Outékian* 山との間に位すと云ふ。(Abel Rémusat 和林市考參看)

註・第六 (第一四八頁參照)

哈刺乞解

錄

Alai-ud-din Djouveini 曰く『哈刺乞解の汗は乞解より出でたり。同帝國の太祖は同國人中の有力家にして已むなく郷國を去りて *Gour-Khan* と稱せり。諸汗之汗てふ義なり。その乞解を去る時は七十人を従へたりと云ひ、又或は多數の兵を引率せりとも云ふ。一旦乞兒吉思人の領土に近づき將に之れに入らんとせしが、その大擧して抵抗せんとするを見て *Imi* 地方に轉じ一市を建てたりその遺址なほ存す。土耳其種族の民も亦來りてその蠡下に屬し、忽ちにして四萬戸に長たり。次で乞解の公子は *Bela-Sagoun* に向へり、蒙古人の現今 *Gou-Balik* と稱するもの

これなり。この地方の國王は Efrassiyab の子孫なりと云へど當時勢力振はず、康里人柯耳魯克人等は既に服従を表せざるのみか時に侵略を試むるの姿なりき。故に敢て乞解人を防ぐの意氣なく使節を派して之に國土を譲らんとするの提議を爲せり。乞解の公子は Bela-Sagoun に赴きて王位に即ぎ、Efrassiyab の後裔より汗號を奪ひ之をして Ilk-Turkan と稱せしめたり、土耳其種族長の義なり。かくて COUN-Kidjik より、Barserdjan に至り Taraz より Tamidj に至る迄各省に總督を置けり。間もなく康里人を服従しその一軍は喀什噶爾、和闐地方を征服し、一軍は乞兒吉思人に復讐せり。次で Bisch-Balik を占領しその軍隊はフェルガナ井にトランスオクシアナを兼併せり、支丹 Osman の祖先がその臣隸となりしは即ちこの時なりとす。かくて後その將 Ernouz を花刺子模に派遣し之を猛火鮮血の巷と化せり。花刺子模帝 Atsiz は Ernouz に降を請ひ Gour-khan に對し歳貢とし家畜貨物の外三萬 dinars を納付す可きを約せり。Ernouz は媾和を許して退却せしが間もなく Gour-khan は死せり。

『その寡婦 Keuyounk 位を襲ひしも數年の後不品行のこと發覺し、その嬖臣と共に殺されたり。次で死者の兩兄弟の一人位に陞り、その王位の安固を圖るが爲に他の一人は犠牲に供せられたり。』

『Atsiz の位を襲へる支丹 Tacasch は歳貢の請求に遭ひ種々の財貨を贈りて哈刺乞解汗の款

附

録

附

註 第七 (第二六〇頁参照)

蒙古兵の歐洲遠征

録

左に掲ぐるは Ibn-ul-Ethir の書に見えたる蒙古兵裏海黑海北方作戰の記事なり。『韃靼兵の欽察人の領土に入り、曩に Alans, Lezguiz 兩同盟と分離して郷里に歸れるの軍隊に對し詭計を用ゐて之を破るや、欽察人はこの敵兵に抵抗するの勇氣なく各方面に退却せり、或は森林に投ずるあり或は山間に匿るるあり、その多數は露領に入れり。韃靼兵は欽察人の領土に舍營せり、この地方は夏と冬とを問はず牧場として最も適當の地なり、即ち大暑の候に於て氣候の涼しき地あり、又冬季寒氣の甚しからざる地あり、海岸には森林多し。韃靼兵は欽察人に屬

し、その穀物を貯ふる Soudac 市まで深く進入せり。同市は Khazarienne 海岸に位し船舶輻輳せり（クリミアは當時 Khazares に屬せるより Khazarie と稱せり）。同市には又布帛を獲たりこれ欽察人がその地方に産する狐、海狸、栗鼠等の皮革并に男女の奴隸と交換して購ふ所のものなり。韃靼兵 Soudac を占領するや住民は出奔し、或は家族財産を擧げて山間に避難せるあり、或は乗船して Roum に渡れるあり、Roum は當時セルジック朝 Klidj-Arslan の後裔にして回教を奉ずる國王の領有に歸せり。

附

欽察人の領土を占領し了るや、韃靼兵は六二〇年（一二二三年）に露人に對して遠征を試みたり。露人は之と戦はんとし夥しくその地に移住せる欽察人と同盟せり。乃ち共に韃靼兵に向て進軍し、その露領に達せざるに先ち之と會戦せんとせり。その近くや韃靼兵は退却して敵兵の追撃に任せしかば、敵兵は外夷亦戰ふ能はずと思へるが如し。則ち露人等は熱心追撃し、而して韃靼兵の依然として退却すること十二日間に及び、而して後韃靼兵は突然露人と欽察人との聯合軍に向て突撃を試みしに、敵兵はその距離隔たりしを以て毫も攻撃を豫期せざりき。激戦數日の後結局韃靼兵は戦勝者となり、欽察人と露人とは大敗を蒙りその大半は虐殺せられ、輜重は悉く韃靼人の有に歸せり。少數の辛うじて命を全うして露國に歸るを得しものは長途を走りしが爲、極めて憐む可きの状態に於てありき。韃靼兵は之を追跡し沿途至る處、劫掠、虐殺、放火等暴行を

錄

極めたり。露國の富豪豪商等は其の貴重なる財産を携へて移住し、或は海上を越えて回教國に避難せるもあり。

『露國を蹂躪せる後韃靼兵同地方より撤退して六二〇年（一二二三年）の終に Boulgarie に向て進めり。ブルガル兵は進んで之と會戦せしが韃靼兵は之を伏に陥れたり。その進んで韃靼兵の埋伏せる地點に来るや追撃を受けたるの兵も踵を轉じ、かくてブルガル兵を包圍してその大部分を殺戮し、僅に少數の敵をして脱走するを得しめしのみ。ブルガル兵は約四千人なりしと云ふ。韃靼兵は途を Sacassin に取りてその皇帝成吉思汗の許に歸れり。

附

『その欽察人の領土より撤退するや、欽察人中その命を全うせるものは故國に歸れり、韃靼兵の同地占領中は回教國との交通は全く斷たれしを以て回教國に於ては又狐、栗鼠、海狸等の皮革を得ざりき。欽察人の歸國後復び這般の商品を輸出し來れり』と。

錄

Tarikh Djihankuschai には蒙古兵露國侵略のことを記さず、單に蒙古兵は Derbend を越えて欽察人の曠野に於て尤赤の軍に合し、次で成吉思汗の許に赴けりと記せるのみ。Raschid のこの遠征の記事は Ibn-ul-Ethir の抄略に過ぎず、但しこの史家は花刺子模占領後尤赤は欽察人の領土侵略の命を受けしも食封にありて之に従はざりきと記せり。

岩波文庫

1389-1390



昭和十一年十二月十日印刷
昭和十一年十二月十五日發行

蒙古史上卷 ★★
定價四十錢

(覆木製本)

譯者

田中 萃一郎

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波 茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井 赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七〇
九段 〇一八八八番
振替口座東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を小數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を駭縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て奮然とする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

古事記 幸田成友校訂	枕草子(春曙抄) 上 池田龜鑑校訂	源氏物語(一) 島津久基校訂	源氏物語(二) 島津久基校訂	源氏物語(三) 島津久基校訂	源氏物語(四) 島津久基校訂	源氏物語(五) 島津久基校訂	紫式部日記 池田龜鑑校訂	更級日記 西下經一校訂	三條西榮花物語 上 三條西公正校訂	三條西榮花物語 中 三條西公正校訂	三條西榮花物語 下 三條西公正校訂	古今和歌集 尾上八郎校訂					
國文學	枕草子(春曙抄) 中 池田龜鑑校訂	枕草子(春曙抄) 下 池田龜鑑校訂	源氏物語(一) 島津久基校訂	源氏物語(二) 島津久基校訂	源氏物語(三) 島津久基校訂	源氏物語(四) 島津久基校訂	源氏物語(五) 島津久基校訂	更級日記 西下經一校訂	三條西榮花物語 上 三條西公正校訂	三條西榮花物語 中 三條西公正校訂	三條西榮花物語 下 三條西公正校訂	古今和歌集 尾上八郎校訂					
土佐日記 池田龜鑑校訂	神樂歌・催馬樂 武田祐吉編	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂	枕草子(春曙抄) 上 池田龜鑑校訂	枕草子(春曙抄) 中 池田龜鑑校訂	枕草子(春曙抄) 下 池田龜鑑校訂	源氏物語(一) 島津久基校訂	源氏物語(二) 島津久基校訂	源氏物語(三) 島津久基校訂	源氏物語(四) 島津久基校訂	源氏物語(五) 島津久基校訂	紫式部日記 池田龜鑑校訂	更級日記 西下經一校訂	三條西榮花物語 上 三條西公正校訂	三條西榮花物語 中 三條西公正校訂	三條西榮花物語 下 三條西公正校訂	鏡和田英松校訂	
梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂	新山家集 佐佐木信綱校訂	水鏡 和田英松校訂	松浦宮物語 峰須賀雷子校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂	藤原定家(附定家) 佐佐木信綱校訂	新金槐和歌集 新編 豐原茂吉校訂	中世歌論集 久松滄一編	六百番歌合 岸秋校訂	六百番歌合 岸秋校訂	方丈記 山田孝雄校訂	保元物語 岸谷誠一校訂	平治物語 岸谷誠一校訂	平家物語 上 山田孝雄校訂	平家物語 下 山田孝雄校訂	東關紀行・海道記 玉井幸助校訂	十六夜日記 玉井幸助校訂	神皇正統記 山田孝雄校訂

增徒然草	和田英松校訂	芭蕉書翰集	勝晉風編	直毘靈・玉銜百首	本居宣長著
閑吟集	狂言小歌集 藤田徳太郎校註	芭蕉花屋日記	小宮豐隆校訂	雨月物語	上田秋成著
好色一代男	和田萬吉校訂	風俗文選	伊藤松字校訂	調良寛詩集	大島花東譯註
好色一代女	和田萬吉校訂	燕村七部集	伊藤松字校訂	椿説弓張月	上卷 和曲 幸馬 梁作
好色五人女	和田萬吉校訂	燕村俳句集	原退蔵編註	椿説弓張月	中卷 和曲 幸馬 梁作
西鶴浮城物語	和田萬吉校訂	松の落葉	藤田徳太郎校註	椿説弓張月	下卷 和曲 幸馬 梁作
武家義理物語	和田萬吉校訂	松の落葉	藤田徳太郎校註	胡蝶物語	和曲 幸馬 梁作
日本永代藏	和田萬吉校訂	松の落葉	藤田徳太郎校註	新一茶俳句集	萩原井泉水編
世間胸算用	和田萬吉校訂	雲萍雜志	柳澤漢國著	おらが春・我春集	萩原井泉水校訂
西鶴織留	和田萬吉校訂	酒落本集	高木好次校訂	一茶父の終焉日記	萩原井泉水校訂
奥の細道その他	伊藤松字校訂	玉勝間(上)	本居宣長著	東海道膝栗毛	十返舎一九作
芭蕉七部集	伊藤松字校訂	玉勝間(下)	本居宣長著	柳多留	上卷 西原柳雨校訂
芭蕉俳句集	原退蔵校註	玉勝間	本居宣長著	柳多留	中卷 西原柳雨校訂
芭蕉連句集	小宮豐隆編	玉勝問	本居宣長著	柳多留	下卷 西原柳雨校訂

萬載狂歌集	野崎左文校訂	俗樂旋律考	上原六四郎著	二宮翁夜話	藤住正兄筆記
德和歌後萬載集	野崎左文校訂	論畫四種	坂崎垣編	海舟座談	藤本善治編
忍ぶの戀	助太阿彌校訂	茶の日本思潮	本國倉三著	日本道徳論	西村茂樹著
鼠小僧	河竹繁俊校訂	讀史餘論	新井白石著	福澤撰集	藤澤論吉著
赤垣源藏・仲光	河竹繁俊校訂	都鄙問答	石田梅巖著	文明論之概略	藤澤論吉著
辨の平右衛門	河竹繁俊校訂	手島堵庵心學集	白石正邦編	寒 寒 錄	陸奥宗光著
お森	三河竹繁俊校訂	松翁道話	石川謙校訂	兆民選集	中江篤介著
實錄先代萩	河竹繁俊校訂	訂道二翁道話	石川謙校訂	日本開化小史	田口卯吉著
孝子善吉	河竹繁俊校訂	鳩翁道話	石川謙校訂	内村鑑三隨筆集	内村鑑三著
加賀	河竹繁俊校訂	蘭學事始	杉田玄白著	清澤文集	清澤謙之著
改訂版花傳書	野上豊一郎校訂	經濟要錄	佐藤信淵著	綱島梁川集	安倍能成編
申樂談義	野上豊一郎校訂	一書言志四錄	山田三郎譯註	現代文學	島坪内透著
能作書・覺悟條條	野上豊一郎校訂	古史徵開題記	山田孝雄校訂	新曲 赫映	島坪内透著
至花道	野上豊一郎校訂	報 德	富田高麗達	うたかたの記	他三篇 森 蘭外著
入木道三部集	鹿校訂			キタ・セクスアリス	蘭外作
歌舞音樂略史	小中村清短著				

雁	護持院ケ原の歌討 <small>(他三篇)</small> 森 蘭外作★	明	暗下巻夏目漱石著★	千曲川のスケッチ 島崎藤村著★
左千夫歌集	土屋文明編★	風流佛・一口劔	幸田露伴著★	生ひ立ちの記 島崎藤村著★
左千夫歌論抄	土屋文明編★	五重塔	幸田露伴著★	櫻の實の熟する時 島崎藤村著★
二人女房	尾崎紅葉著★	自然と人生	徳富蘆花著★	飯倉だより 島崎藤村著★
子規歌集	正岡子規著★	北村透谷集	島崎藤村編★	春を待ちつつ 島崎藤村著★
墨汁一滴	正岡子規著★	北村透谷遺稿	金築松桂編★	高野聖泉 鏡花作★
病牀六尺	正岡子規著★	觀音岩	前篇 川上眉山著★	眉かくしの聖泉 鏡花作★
仰臥漫錄	正岡子規著★	觀音岩	後篇 川上眉山著★	註文帳・白鷺泉 鏡花作★
漾虛集	夏目漱石著★	源をぢ	他二篇 國木田獨步著★	歌行 燈泉 鏡花作★
坊つちやん	夏目漱石著★	運命論者	他二篇 國木田獨步著★	風流儀法
草	夏目漱石著★	號	外他六篇 國木田獨步著★	上田敏詩抄
行	夏目漱石著★	蒲團・一兵卒	田山花菱著★	有明詩抄
硝子戸の中	夏目漱石著★	生	田山花菱著★	泣菫詩抄
道	草夏目漱石著★	田舎教	師田山花菱著★	宣
明	暗上巻夏目漱石著★	晚翠詩抄	土井晩翠著★	長塚節歌集
		にげく	ら 藤村詩抄	入江のほとり
		たけく	ら 藤村詩抄	生まざりしならば
		たけく	ら 藤村詩抄	千

桑の實	鈴木三重吉作★	布施太子の入山	倉田百三著★	イノック・アーデン	入江直祐譯★
銀の匙	中 勳助作★	餘	盗 芥川龍之介著★	クリスマス・カロール	森田草平譯★
煤	煙森田草平作★	侏儒の言葉	芥川龍之介著★	爐邊のこぼろぎ	本多顯彰譯★
和解	或る男志賀直哉著★	河	童 芥川龍之介著★	ブラウサウル	野藤 勇譯★
小僧の神様	他十篇 志賀直哉著★	春夫詩鈔	佐藤春夫著★	喜劇	相良徳三譯★
白秋詩抄	北原白秋著★	厭世家の誕生日	佐藤春夫著★	エレホン	山本政喜譯★
白秋抒情詩抄	北原白秋著★	英米文學		パーター論集	田部重治譯★
海神丸	野上彌生子著★	ニュートピア	(理想郷) トマス・モア著★	ハルディ短篇集	森村 豊譯★
大石良雄	野上彌生子著★	ペーコン	隨筆集 神吉三郎譯★	幻想を追ふ女	(他六篇) 森村 豊譯★
そ	妹 武者小路實篤著★	フオースタス博士	松尾 相譯★	月下の舞臺	(他五篇) 森村 豊譯★
幸	福 武者小路實篤著★	闘技者サムソン	中村爲治譯★	新アラビヤ夜話	佐藤線葉譯★
人間萬歳	武者小路實篤著★	ブレイク抒情詩抄	書長文章譯註★	寶	佐々木直次郎譯★
友	情 武者小路實篤著★	パインズ詩集	中村爲治譯★	ジョーキル博士と	ステイヴンソン著★
波	青銅の基督	湖の麗人	スコット作★	サロメ	岩田良吉譯★
青銅の基督	長興善郎著★	ラム沙翁物語	野上彌生子譯★	獄中	阿部知二譯★
陸奥直次郎	長興善郎著★	イン・メモリアム	入江直祐譯★	人と超	市川又彦譯★
出家とその弟子	倉田百三著★			鯨夫の家	市川又彦譯★

思想の達し限る限り (原名トセラ時代に編れ) シヨウウ作 ★★★
 聖女チヨウン (ヤンヌ・ダルク) 野上豊一郎作 ★★★
 ピータア・パン 本多顯彰作 ★★★
 アイルランド物語 山宮允作 ★★★
 隊を組んで歩く妖精達 山宮允作 ★★★
 キップリング詩集 中村爲治選譯 ★★★
 争 闘 石田幸太郎作 ★★★
 静寂の宿 本多顯彰作 ★★★
 ユリシイズ (一) ジュニムズチヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★★
 ユリシイズ (二) ジュニムズチヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★★
 ユリシイズ (三) ジュニムズチヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★★
 ユリシイズ (四) ジュニムズチヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★★
 ユリシイズ (五) ジュニムズチヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★★
 マンスフィールド 崎山正毅譯 ★★★
 短篇集 崎山正毅譯 ★★★
 スケッチ・ブック アーヴィン作 高垣松雄譯 ★★★
 自然論 片上仰著 ★★★
 少年他十 佐藤清譯 ★★★
 短篇集 優しき少年他十 佐藤清譯 ★★★

エヴァンジェリン ロンゾフエロ作 ★★★
 ボウ黒猫 (他六篇) 澤村豊作 ★★★
 マン詩集 有島武郎選譯 ★★★
 王子と乞食 村岡花子譯 ★★★
 小公の子 若松睦子譯 ★★★
 おしなご 遠藤隆子譯 ★★★
 荒野に生れて 本多顯彰作 ★★★
 地平の彼方 清野鳴一郎譯 ★★★

たぐみと戀 シラア作 ★★★
 グレンシニクイン 鼓常良作 ★★★
 ヴイルヘルム・テル 櫻井政隆譯 ★★★
 黄金寶壺 石川道雄譯 ★★★
 牡猫ムルの観 上巻 ホフマン作 ★★★
 牡猫ムルの観 下巻 ホフマン作 ★★★
 牡猫ムルの観 秋山六郎兵衛譯 ★★★
 全グリム童話集 第一 金田鬼一譯 ★★★
 全グリム童話集 第二 金田鬼一譯 ★★★
 全グリム童話集 第三 金田鬼一譯 ★★★
 全グリム童話集 第四 金田鬼一譯 ★★★
 全グリム童話集 第五 金田鬼一譯 ★★★
 全グリム童話集 第六 金田鬼一譯 ★★★
 全グリム童話集 第七 金田鬼一譯 ★★★
 ゲニテと對話抄 エツルマン著 尾見英四郎譯 ★★★
 ハルツ紀行 内藤 匡著 ★★★
 みづうみ 他三篇 シュトルム作 ★★★
 三色菫・溺死 シュトルム作 伊藤武雄譯 ★★★

村のロメオとユリア ケラ一作 ★★★
 僧の婚禮 伊藤武雄譯 ★★★
 忘れぬ言葉 渡田一雄譯 ★★★
 埋 木 森キルシユネル作 森キルシユネル外譯 ★★★
 アルト ハイデルベルク 番匠谷英一譯 ★★★
 ソアーナの異教徒 ハウプトマン作 ★★★
 日の出前 ハウプトマン作 ★★★
 沈 鐘 ハウプトマン作 ★★★
 希臘の春 城田皓一譯 ★★★
 改春の目ざめ 野上豊一郎譯 ★★★
 悪童物語 實吉捷郎譯 ★★★
 トオマス・マン短篇集 實吉捷郎譯 ★★★
 トオマス・マン短篇集 實吉捷郎譯 ★★★
 トオマス・マン短篇集 實吉捷郎譯 ★★★
 平 行 カイザア作 ★★★
 ジョクリースと人相良守譯 ★★★
 祖 妣 岡本修助譯 ★★★

維納の辻音楽師 石川銀次譯 ★★★
 み れ ん 森 隆 外 譯 ★★★
 アナトール 小宮豊隆譯 ★★★
 戀愛三昧 森 隆 外 譯 ★★★

佛・白文學

ポリウクト コルネイユ作 木村太郎譯 ★★★
 人間嫌ひ モリエール作 關口存男譯 ★★★
 愛と偶然との戯れ マリウオー作 進藤 一 譯 ★★★
 マノン・レスコオ アベブレ作 阿部好雄譯 ★★★
 懺悔録 上巻 石川 巖 譯 ★★★
 懺悔録 中巻 石川 巖 譯 ★★★
 懺悔録 下巻 石川 巖 譯 ★★★
 懺悔録 下巻 石川 巖 譯 ★★★
 ポールとワイルジニイ ヤン・ビエール作 木村太郎譯 ★★★
 アドルフ コンスタン作 大塚 幸男 譯 ★★★
 スタイン 赤と黒上巻 桑原武夫譯 ★★★
 ダール 赤と黒下巻 桑原武夫譯 ★★★

バルムの僧院上巻 スタンダール作 前川堅市譯 ★★★
 カストロの尼 桑原武夫譯 ★★★
 戀愛論 上巻 前川堅市譯 ★★★
 戀愛論 下巻 前川堅市譯 ★★★
 從兄ボンス 前篇 水野 亮 譯 ★★★
 從兄ボンス 後篇 水野 亮 譯 ★★★
 知られざる傑作 水野 亮 譯 ★★★
 海邊の悲劇 他三篇 水野 亮 譯 ★★★
 愛の妖精 宮崎雄雄譯 ★★★
 エトルリアの靈 (他五篇) 杉 夫 譯 ★★★
 コロンバ 杉 夫 譯 ★★★
 カルメン 杉 夫 譯 ★★★
 屋根裏の哲人 スワエストル作 木村太郎譯 ★★★
 格 姫 デュマ・フィリス作 吉村正一郎譯 ★★★
 プチ・ショウズ 八木 さわ子 譯 ★★★
 陽気なタルタラン 小川 泰一 譯 ★★★
 風車小屋だより 櫻田 徳一 譯 ★★★
 月 囀 物 語 櫻田 徳一 譯 ★★★

アチトル・フランス短編集 母と業師(他四篇) 六井 征譯	昔がたリ アチトル・フランス作 杉 健夫譯	ノア・ノア 前川 聖市譯	過 去 岸田 國士譯	氷島の漁夫 吉江 喬松譯	お菊さん 野上 豊一譯	女の一生 モーターソン作 杉 健夫譯	生の誘惑 原名イガ モーターソン作 前田 眞譯	モーターソン短編集 飾(他七篇) 前田 眞譯	ピエルとジャン モーターソン作 前田 眞譯	水の 上 モーターソン作 吉江 喬松譯	別れも愉し他一篇 岸田 國士譯	ジャン クリストフ (一) 豊島 與志雄譯	ジャン クリストフ (二) 豊島 與志雄譯	ジャン クリストフ (三) 豊島 與志雄譯	ジャン クリストフ (四) 豊島 與志雄譯	ジャン クリストフ (五) 豊島 與志雄譯
ジャン クリストフ (六) 豊島 與志雄譯	ジャン クリストフ (七) 豊島 與志雄譯	ジャン クリストフ (八) 豊島 與志雄譯	愛と死との戯れ 片山 敏彦譯	獅子座の流星群 片山 敏彦譯	パリュウド 小林 秀雄譯	鎖を離れたプロメテ 河上 徹太郎譯	法王座の抜穴 石川 淳譯	田園交響樂 川口 篤譯	短編集 小き町 荒野 隆三譯	若き日の手紙 外山 桐夫譯	母への手紙 三好 運治譯	青い鳥 若月 紫蘭譯	オネーギン 米川 正夫譯	スペードの女王 ブーシキン作 西 清譯		
露西亞文學																
イワリンイワリン キツチとが喧嘩をした話 原久一 譯	外 套 他二篇 伊吹山次郎 譯	昔氣質の地主たち 伊吹山次郎 譯	検 察 官 米川正夫 譯	現代のヒーロー 中村白葉 譯	皇帝フーイドル 除村吉太郎 譯	ルーデイン 原久一 譯	初 戀 米川正夫 譯	煙 原久一 譯	春 原久一 譯	ブウニンとパブリン 小沼 運治 譯	處 女 地 前 篇 湯淺芳子 譯	トウルグ 散 文 詩 神 西 清 譯	罪と罰 第一卷 原久一 譯	罪と罰 第二卷 中村白葉 譯	罪と罰 第三卷 中村白葉 譯	

永遠の良人 原久一 譯	悪 靈 第一編 米川正夫 譯	悪 靈 第二編(上) 米川正夫 譯	悪 靈 第二編(下) 米川正夫 譯	悪 靈 第三編 米川正夫 譯	カラマーゾフの兄弟 第一卷 米川正夫 譯	カラマーゾフの兄弟 第二卷 米川正夫 譯	カラマーゾフの兄弟 第三卷 米川正夫 譯	カラマーゾフの兄弟 第四卷 米川正夫 譯	少年時代 米川正夫 譯	少年時代 米川正夫 譯	結婚の幸福 米川正夫 譯	戦争と平和 第一卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第二卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第三卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第四卷 米川正夫 譯		
戦争と平和 第四卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第五卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第六卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第七卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第八卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第九卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十一卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十二卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十三卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十四卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十五卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十六卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十七卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十八卷 米川正夫 譯	戦争と平和 第十九卷 米川正夫 譯		
閣 活 力 米川正夫 譯	復 活 下 卷 中村白葉 譯	復 活 中 卷 中村白葉 譯	復 活 上 卷 中村白葉 譯	光あるうちに 米川正夫 譯	イワン・イリツチの死 米川正夫 譯	イワンの馬鹿他八篇 中村白葉 譯	トルストイ民話集 中村白葉 譯	人は何で生きるか他四篇 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (一) 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (二) 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (三) 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (四) 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (五) 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (六) 中村白葉 譯	アンナ・カレーニナ (七) 中村白葉 譯		
生 け る 屍 米川正夫 譯	人 生 論 中村白葉 譯	懺 悔 原久一 譯	藝術とは どういふものか 河野 興一 譯	トルストイ日記抄 除村吉太郎 譯	ソニーヤ・コヴァ 野上 彌生子 譯	レフスカヤ 米川正夫 譯	伯父ワニーヤ 米川正夫 譯	三人姉妹 米川正夫 譯	櫻 の 園 米川正夫 譯	シベリヤの旅他三篇 神 西 清 譯	決 闘 妻 チエーホフ 譯	接吻・可愛い女他二篇 原久一 譯	神々の復活 (一) 米川正夫 譯	神々の復活 (二) 米川正夫 譯	神々の復活 (三) 米川正夫 譯	神々の復活 (四) 米川正夫 譯	ど ん 底 中村白葉 譯

幼年時代 ゴードン・キーン作 ★★
 サーニン上巻 アッハイパー・ワット作 ★★
 サーニン下巻 アッハイパー・ワット作 ★★
 アミエルの日記(四) 河野與一譯 ★★
 アルプスの山の娘 ヨハント・スベリ作 ★★
 プラシド イブ・セン作 ★★
 キーランド短篇集 前田 異譯 ★★
 島の農民 草間平作譯 ★★
 大海のほとり ストリントベルク作 ★★
 父 ストリントベルク作 ★★
 令嬢ユリエ ストリントベルク作 ★★
 稲妻 小宮豊隆譯 ★★
 幽霊 小宮豊隆譯 ★★
 アルプス登攀記上 ウイム・パーナ作 ★★

南欧・北歐文學 其他

希臘羅馬神話 バルフィンチ作 ★★
 クオレ 愛の上巻 アミール・リス著 ★★
 クオレ 愛の下巻 アミール・リス著 ★★
 恐ろしき媒 ベナベント作 ★★
 作り上げた利害 永田寛定譯 ★★
 子守唄 永田寛定譯 ★★
 即興詩人上巻 森岡 外譯 ★★
 即興詩人下巻 森岡 外譯 ★★
 繪なき繪本 アンデルセン作 ★★
 アミエルの日記(一) 河野與一譯 ★★
 アミエルの日記(二) 河野與一譯 ★★
 アミエルの日記(三) 河野與一譯 ★★
 アミエルの日記(四) 河野與一譯 ★★
 山岳・紀行 チン・アルプスの旅より 矢島祐利譯 ★★
 ダル・アルプス紀行 矢島祐利譯 ★★
 アルプスの氷河 (第一部) 矢島祐利譯 ★★
 アルプスの氷河 (第二部) 矢島祐利譯 ★★
 自然美と其驚異 板倉勝忠譯 ★★
 文藝評論 丸山和馬譯 ★★
 ボワロイ詩 丸山和馬譯 ★★
 美と藝術の理論 草薙正夫譯 ★★
 マルクス・エンゲルスの藝術論 上田 進譯 ★★
 文學史の方法 テ・エヌ著 ★★
 佛蘭西文學史序説 關根秀雄譯 ★★
 キュー社会學上より見た 大西克禮譯 ★★
 キュー社会學下より見た 小方眞正譯 ★★
 キュー社会學より見た 大西克禮譯 ★★
 キュー社会學より見た 小方眞正譯 ★★
 藝術の始源 安藤 弘譯 ★★
 藝術經濟論 西本正美譯 ★★
 この後の者にも 西本正美譯 ★★
 建築の七燈 高橋松川譯 ★★
 キン胡麻と百合 黒山正順譯 ★★
 回想のセザンヌ 有島生馬譯 ★★

歴史

フランツ シュベルト ジロウウウ著 ★★
 ベルン歴史とは何ぞや 坂口 昂譯 ★★
 伊太利文藝復興期の文化 フルック・ヘルト著 ★★
 世界人類史物語 上巻 コフマン 厚譯 ★★
 世界人類史物語 下巻 コフマン 厚譯 ★★
 東洋思想・文學 武内義雄譯 ★★
 孔子家語 武内義雄譯 ★★
 孟子 武内義雄譯 ★★
 子思子 武内義雄譯 ★★
 菜根譚 山口康常譯 ★★
 孫子 山田 隆譯 ★★
 鹽鐵論 曾我部龍雄譯 ★★
 楚辭 橋本 備譯 ★★
 陶淵明集 藤山又四郎譯 ★★
 李太白詩選上巻 藤山又四郎譯 ★★
 李太白詩選下巻 藤山又四郎譯 ★★
 杜 詩卷之一 藤山又四郎譯 ★★
 杜 詩卷之二 藤山又四郎譯 ★★
 杜 詩卷之三 藤山又四郎譯 ★★
 杜 詩卷之四 藤山又四郎譯 ★★
 唐詩選 上巻 藤山又四郎譯 ★★
 唐詩選 下巻 藤山又四郎譯 ★★
 寒山詩 太田伸義譯 ★★
 支那通俗古今奇觀 青木正兒校註 ★★
 魯迅選集 佐藤春夫譯 ★★
 朝鮮童話選 金素雲譯 ★★
 朝鮮民話選 金素雲譯 ★★
 哲學・教育 阿部次郎譯 ★★
 フロバロダゴラス 菊池 一譯 ★★
 マス形而上學敍説 高森純夫譯 ★★
 哲學體系 小尾範治譯 ★★
 スピノザの知性改善論 島中尚志譯 ★★
 人間機械論 杉 健夫譯 ★★
 ヒューム人性論 太田 香男譯 ★★
 (改訂版) 天野貞祐譯 ★★
 カンプロレゴメナ 桑木 健藏譯 ★★
 カン實踐理性批判 宮本和吉譯 ★★
 ヘーゲル哲學の批判 佐野文夫譯 ★★
 將來の哲學の根本命題 フオイエラッパ著 ★★
 唯一者とその所有 上 藤村晋大譯 ★★
 唯一者とその所有 下 藤村晋大譯 ★★
 自然認識の限界 坂田 德男譯 ★★
 哲學の貧困 木下 半治譯 ★★
 天才・悪 ブレンター著 ★★
 マルクス・ドイツエー・リヤザノフ 三木 清譯 ★★

反デューリング論 上 長谷部文雄著	歴史と自然科学・道 谷田英雄著	獨逸國民に告ぐ 大津 康著
反デューリング論 下 長谷部文雄著	徳の原理に就て 聖 谷田英雄著	ベリイ数学教育論 編島信太郎著
フオイエルバツハ論 佐野文夫著	永遠の相下に他三篇 篠田英雄著	
エンゲル自然辯證法上巻 加藤 正著	ワインデル 哲学概論 速水・高桑・山本著	
エンゲル自然辯證法下巻 加藤 正著	ワインデル 第二部 速水・高桑・山本著	
この人を見よ 安倍龍成著	心理学原論 リツブス著	アウグスの懺悔録 フォン・ハルナック著
反時代的考察上巻 井上政次著	自然に於ける美 ソロウイヨフ著	テインの懺悔録 山谷省吾著
反時代的考察下巻 井上政次著	藝術の一般的意義 高村理智夫著	(改譯版) 基督者の自由 マルティン・ルター著
眠られぬ夜 第一部上 草間平作著	フロバヘーゲル論 笠 信太郎著	イ エ ス 林 達夫著
眠られぬ夜 第一部下 草間平作著	カントとゲエテ 谷川徹三著	法 句 經 萩原雲來著
眠られぬ夜 第二部上 草間平作著	認識の對象 山内得立著	大乘起信論 宇井伯壽著
眠られぬ夜 第二部下 草間平作著	リ唯物論と經驗批 上巻 佐野文夫著	法華義疏 上巻 聖徳太子御製
幸 福 論 草間平作著	リ唯物論と經驗批 中巻 佐野文夫著	法華義疏 下巻 聖徳太子御製
哲學の本質 戸田三郎著	リ唯物論と經驗批 下巻 佐野文夫著	法華義疏 校註 花山信勝著
世界觀の研究 山本英一著	ニ唯物論と經驗批 佐野文夫著	法華三教指歸 加藤精神著
七大哲人 安倍龍成著	エミイル (第一篇) 平林初之輔著	大師三教指歸 加藤精神著
ケーベル博士遺集 久保 成雄著	エミイル (第二篇) 平林初之輔著	上人愚迷發心集 高瀬承殿校註
人間の精神 立花祐雄著	エミイル (第三篇) 平林初之輔著	歎 異 抄 金子大栗校訂
哲學とは何か、ゲインデル著	エミイル (第四篇) 平林初之輔著	正法眼藏隨聞記 和辻哲郎校訂
イマヌエル・カント 河東 涓著	エミイル (第五篇) 平林初之輔著	日蓮上人文抄 姉崎正治校註

一 遍上人語錄 藤原 正校註	チャールズ ダーウキン ド・ダーウキン著	近代民主政治 ニブライ 武著
上人御文章 藤谷徳隆校註	ラブラタの博物學者 岩田良吉著	近代民主政治 三ブライ 武著
夢中問答 佐藤泰経校訂	家畜系統史 ケルレル著	近代民主政治 四ブライ 武著
禪海一瀾 今北洪川著	科學の價值 田邊 元著	近代民主政治 五ブライ 武著
	科學と方法 吉田洋一著	慣習と權利 青山道夫著
	科學者と詩人 平林初之輔著	法 と 國 家 堀 眞 著
	科學的に見たる 科學的宇宙觀の變遷 寺田實彦著	
自然科學		經濟・社會
フアラ蠟燭の科學 クルツクス編		ケネー經濟表 増井幸雄著
種の起原 上巻 ダーウキン著		スミ國富論 上巻 氣賀勳重著
種及び動物の 表情について 濱中濱太郎著		ゴオ富に關する省察 永田 清著
天才と遺傳 上巻 甘粕石介著		マオ初版人口の原理 高野皆三著
天才と遺傳 下巻 甘粕石介著		サス初版人口の原理 大内兵衛著
雜種植物の研究 小泉 丹著		經濟學及課税之原理 リカアド著
フアール昆蟲記 山田 吉彦著		クールの理論の數學的 ノー原理に關する研究 中山伊知郎著
第二分册・第五分册・第九分册		地 代 論 山口正吾著
第十分册・第十二分册・第十三分册		ミル 自 傳 西本正美著
第十四分册・第十七分册・第十八分册		資本論初版鈔 長谷部文雄著
第二十分分册 既刊 定價各★★		
生命の不可思議 上巻 後藤格次著		
生命の不可思議 下巻 後藤格次著		
法律・政治		
アリストテレスの國家 原 國譯	君 主 論 マキアヴェリ著	
法の精神 上巻 モンテスキュー著	法の精神 下巻 モンテスキュー著	
人間不平等起原論 ルソ著	民 約 論 平林初之輔著	
權利のための闘争 日神豊昭著	近代民主政治 松山 武著	

賃労働と資本	マルクス著 長谷部文雄譯	戦争論上巻	クラウゼヴィッツ著 馬込健之助譯
賃銀・價格および利潤	マルクス著 長谷部文雄譯	戦争論下巻	クラウゼヴィッツ著 馬込健之助譯
フランスに於ける内亂	マルクス著 木下平治譯	労働者綱領	小泉信三譯註
マルク太人問題を論ず	久留間敏造著	暴力論上巻	ソレル著 木下平治譯
改進黨の私利私欲	エンゲルス著 西野雄譯	暴力論下巻	ソレル著 木下平治譯
住宅問題	エンゲルス著 加田哲二譯	婦人論上巻	草間平作譯
道徳的經濟的基礎	草間平作譯	婦人論下巻	草間平作譯
經濟的財貨論	ボエーム・パウル著 長守善譯	婚姻の諸形式	ユリ・リヤ著 木下史郎譯
資本論解説	カウツキー著 大里傳平譯	戀愛と結婚上巻	エレン・ケイ著 原田實譯
職業としての學問	尾高邦雄譯	戀愛と結婚下巻	エレン・ケイ著 原田實譯
經濟學入門	佐野文夫譯	マルクス・エンゲルス傳	リアヂノフ著 長谷部文雄譯
資本論精論上巻	長谷部文雄譯	レロシヤにおける上	大山岩雄譯
資本論精論中巻	長谷部文雄譯	ニ資本主義の發展を	西野雄共譯
資本論精論下巻	長谷部文雄譯	レ何を爲すべきか	平田良福譯
資本論精論再論	長谷部文雄譯	カール・マルクス	レイニン著 (他五篇) 伊藤弘譯
ローザ・ルクセン	松井圭子譯	レイニンの	中野重治譯
ブルグの手紙	松井圭子譯	ゴオリキーへの手紙	中野重治譯
		シ帝國主義	長谷部文雄譯

岩波文庫に就て	御申込み次第早速お送り申し上げます。 ★定額は便宜上星(★)数を以て現はし、 ★一つが二十錢であります。定價と送 料とを表にしますと大體次のやうにな ります。
□岩波文庫は普及を第一義として刊行する廉價版であります。	★ 定價二十錢 送料二錢
□内容の厳選 東西古今の古典並に價値高い良書を續々刊行、網羅せしめ、校訂、翻譯に於て、また校正、印刷、製本等に於ても最善の注意を拂つてゐます。	★ 四十錢 四錢
□最低の廉價 定價は専ら低廉を旨とし豊富な内容を小さい形の中に収める形式を採つてゐます。	★ 六十錢 六錢
□購求の自由 豫約出版ではありませんので、讀者は何時でも自由に欲しいものを撰購求することが出来ます。全國の書店に取揃へてあります。	★ 八十錢 八錢
□携帶の至便 平福百穂畫伯の裝幀による菊半裁判で、體裁は極めて潇洒、旅行その他の伴侶に至便であります。	★ 一圓 八錢
□解説附目錄 岩波文庫の各書について解説を附した分類總目錄があります。	★ 星數はまた頁數をも現はし、★一つは大體百頁乃至百五十頁であります。
	□御注文は、すべて前金でお願い致します。著者名・書名・卷數・冊數及び御住所氏名を楷書で明記の上、代金に必ず送料を添へてお送り願ひます。
	□御送金には「振替東京二六二四〇番」の御利用が最も安全で簡便であります。爲替で御送金頂いても結構であります。また切手代用の場合には一割増に願ひます。

最新刊書

アルプス登攀記 下 ウイム、バー著 浦松佐美太郎譯 ★★
 シロシアに於ける 下 大山岩雄共譯 ★★
 資本主義の發展 卷下 西雅雅雄共譯 ★★
 親鸞聖人と讚集 名畑應順校注 ★★
 傳習錄 山田準譯註 鈴木直治譯註 ★★
 ドリアン・グレイの畫像 ワイルド作 西村孝次譯 ★★
 ねぢの廻轉 ヘンリチエイムズ作 富田彬譯 ★★
 ハヴエイ血液循環の原理 暉峻義等譯 ★★
 黃曉斷傳 心法要 宇井伯壽譯註 ★

トルストイ文學論集 河野與一譯 ★★
 若山牧水歌集 若山喜志子選 ★★
 西洋紀聞 新井白石著 村岡典嗣校訂 ★
 小説神髓 坪内逍遙著 ★★
 太郎坊 他三篇 幸田露伴著 ★
 二都物語 上卷 ディッケンズ作 佐々木直次郎譯 ★★
 お伽草子 島津久基編校 ★★
 背徳者 アンドレ・ジイド作 川口篤譯 ★★
 法・不法及刑罰の社會倫理的意義 大森英太郎譯 ★

最新刊書

處女地後篇 ツルゲ、ネフ譯 ★★
 マックス・ウエーバー 社會科學方法論 恒藤恭校閱 富野祐治共譯 ★
 佛說四十二章經・佛遺教經 得能文譯註 ★
 赤彦歌集 齋藤茂吉選 久保田不二子 ★★
 影を失くした男 シヤマミツ子 井汲越次譯 ★
 アイヌ叙事詩 ユーカーラ 金田一京助採集并ニ譯 ★★
 續日本紀宣命 倉野憲司編 ★
 緑の木蔭 トマス・ハーディ作 阿部知二譯 ★★
 緑の鸚鵡 他一篇 茅野蕭々譯 ★

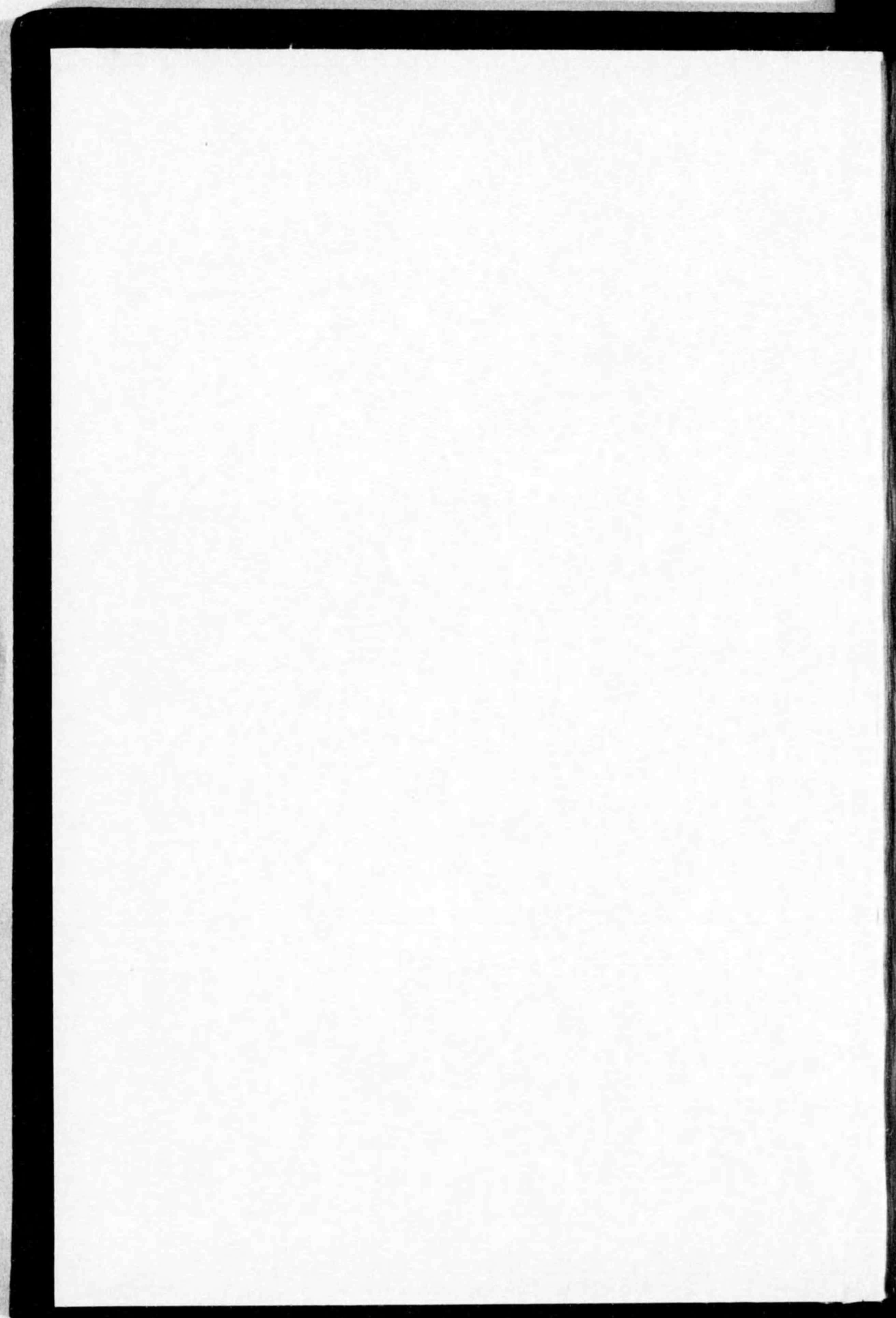
最 新 刊 書

ヒュペーリオン ——希臘の世捨人——	駿臺雜誌	翁問答	講孟餘話 (舊講孟劉記)	シャーロック・ホームズの冒険 ——ボスコム谿谷事件 他四篇——	物質と記憶	ドーン蒙古史上卷
ヘルデグリオン作	室銑鳩三校集訂著	中江盛藤一樹註著	吉瀨田松陰校訂著	コナン・ドイル譯作	ベルゲリソン譯著	田中萃一郎譯補
★★	★★	★★	★★	★★	★★	★★

42466



波岩



終

